



尊敬する歴史上の人々

それぞれの時代に生きた - 偉人たちの記録

田中 義明

齊藤 剛

はじめに

この本は主として人生の目標や自分の生き方を探している子供たち、その子供たちを指導する立場にある大人たち（親や先生方）に読んでもらうことを目的として書かれたものです。

本書は次の3部構成になっています。

【第1部 世界史年表】

これは、本書で取り上げた各偉人が生きた時代背景を日本史、中国史、世界史の中で簡単に知ることができるように年表様式でまとめたものです。

また第3部のヨーロッパ史を読む場合も、ヨーロッパの各時代の大きな動きが起こっている時、同時代史的にみて世界ではどうだったのかを知る上で利用することも可能です。

この部分は、「わたしたちの中学社会」（日本書籍新社）の年表をもとに作成しました。

【第2部 世界の偉人たちの生きざま】

これは、世界の人々、あるいはある地域の人々の文明、文化、生き方などに重要な影響を与えた偉人たち26人を選んで抄録風にまとめたものです。普通1人で1冊にまとめられているので、26人全部読むのは大変ですが、各人数ページ程度であればそれ程の負担にはならないでしょう。勿論人名辞典や広辞苑や学校の歴史の教科書よりは詳しいことが書いてあります。もし興味が湧いたら、より詳しい資料へと入っていけば良いので、各人の終わりにその出典が書いてあります。

「世界の偉人が何故この26人なのか」という疑問が必ず起こるでしょうが、私のこれまでの経験、見聞の中で勝手に選ばせてもらったと答える以外にありません。ただ架空の人物臭い人や明らかに独裁者は意図的に外しました。

なお、並べた順は分野と関係なく誕生順となっています。

【第3部 偉人たちの時代背景としてのヨーロッパ史】

本書で取り上げた偉人たちの生きざまを十分に理解するためには、多かれ少なかれその背景となっているヨーロッパ史（いわゆる西洋史）の予備知識があった方が

はるかに良いと第2部を書いているうちに思うようになりました。私は西洋史を勉強しなおして、それをまとめることは相当大変だと悩んでいました。

そんな時、家内に「全く素人のあなたが書くよりも、共通の友人である斉藤剛さんが最近出版された歴史の本から必要な部分を転載させていただくという方法も考えては？」というアドバイスをもらいました。そこでアートサロンに寄贈していただいていた「世界の中の日本」(斉藤剛、太陽堂印刷所)という書物をもう一度じっくり読み直してみました。同書は日本の過去・現在・未来を斉藤氏自身が考えるベースとして西洋史を独自の視点から簡潔にまとめたもので、同書の3分の1位の分量を占めているのですが、本書の目的にも合致し、分量的にも適切だという結論になりました。

早速斉藤さんにお問い合わせすると快諾して下さったので、共著ということで第3部は斉藤さんの文章をそのまま第2部と文体の統一もせずに転載させていただくことにしました。

この「尊敬する歴史上の人々」の第1部と第2部は参考図書をもとに基本的には私(田中義明)が書きましたが、第3部は全面的に共著者になっていただいている斉藤剛氏に依存しています。またパソコンへの入力は一ツツのアートサロンの従業員だった菅野寿子さんが担当し、表紙等書籍としてのデザインは出版社の高橋営業部長にお願いし、途中のアドバイスや校正は家内の京子が担当してくれました。応援して下さった皆様に対しここに感謝の意を表します。

なおこの小冊子は無料で読める電子本にもする予定です。

またグループで読む等複数部数必要な場合は、下記へ御連絡いただければ、在庫がある限り寄贈させていただきます。

〈連絡先〉アートサロン (または田中京子)

〒260-0855 千葉市中央区市場町2-6 TEL.043-222-2962 FAX.043-225-1631

2013年1月 田中 義明

目次

目次	4
【第1部 世界史年表】	8
【第2部 世界の偉人たちの生きざま】	
出来過ぎて敬遠された 孔子	18
(B.C.552—479) 73才没	
人類の良心 ソクラテス	23
(B.C.470—399) 71才没	
インドを率いる大王への道を捨てた ブッダ(釈迦)	28
(B.C.463—383) 80才没	
人類史に最も大きな影響を与えた イエス・キリスト	34
(B.C.4~7—A.D.26~30) 33才没	
三大宗教の一つイスラム教の教祖 マホメット	39
(570—632) 63才没	
仏教をベースとした政治を行った 聖徳太子	44
(574—622) 49才没	
インドや日本を目指しアメリカ大陸を発見した コロンブス	47
(1446—1506) 60才没	
偏屈な天才 ミケランジェロ	53
(1475—1564) 89才没	
宗教裁判で幽閉された ガリレオ	59
(1564—1642) 77才没	
幻の人 平賀源内	62
(1729—1777) 51才没	
自分の力を過信した ナポレオン	64
(1769—1821) 46才没	
次第に耳が聞こえなくなった ベートーベン	70
(1770—1827) 56才没	

二宮金次郎(尊徳)の実像	71
(1787—1856)	70才没
生物の進化を説いた ダーウィン	74
(1809—1882)	73才没
世界で一番伝記を書かれている人 リンカーン	80
(1809—1865)	56才没
愛の天使 ナイチンゲール	85
(1820—1910)	90才没
世界中で一番読まれている トルストイ	89
(1828—1910)	82才没
総合判断力で日本を導いた 福沢諭吉	95
(1834—1901)	67才没
まさにマルチタレントだった エジソン	98
(1847—1931)	84才没
早く死に過ぎた ゴッホ	102
(1853—1890)	37才没
家族でノーベル賞を3回もらった キューリー夫人	110
(1867—1934)	66才没
インド独立運動のリーダー ガンジー	116
(1869—1948)	78才没
世界中で最も尊敬されている シュバイツァー	125
(1875—1965)	90才没
三重苦を乗り越えた愛の人 ヘレン・ケラー	131
(1880—1968)	88才没
映画初期の大スター チャップリン	136
(1889—1977)	88才没
人種差別運動の師 キング牧師	138
(1929—1968)	39才没

【第3部 偉人たちの時代背景としてのヨーロッパ史】

第1章 アテネ・ローマの歴史	
アテネの歴史	146
ローマの歴史	152
第2章 中世ヨーロッパ社会	
一神教の誕生	159
ユダヤ人迫害の歴史	160
三つの一神教	163
中世ヨーロッパ社会	164
第3章 近代ヨーロッパの幕開け	
イタリア・ルネサンス	166
宗教改革	173
科学・哲学・市民革命	177
第4章 ヨーロッパの光と影	
魔女裁判	182
音楽の都ウィーン	186
ナポレオンと芸術の都パリ	188
社交界の華・オペラ	192
第5章 産業革命と帝国主義	
イギリスの産業革命	195
帝国主義による世界分割	199
【著者プロフィール】	202



第1部

世界史年表

日本	原 始								
日本	縄文時代				弥生時代				
中国	殷	周	春秋	戦国	秦	前漢	後漢	三国	
世界の主な出来事	○採取・狩り・農耕・牧畜の時代				前二七二	前二二二	前二七	六七	○ローマ帝国が栄える
	前三三〇〇ごろ	前二五〇〇ごろ	前二〇〇〇ごろ	前一六〇〇ごろ	前四四三ごろ	前二七二	前二二二	○中国で紙が改良される	
西洋	古 代				前四三三ごろ	前二七二	前二二二	○中国で紙が改良される	
	前三三〇〇ごろ	前二五〇〇ごろ	前二〇〇〇ごろ	前一六〇〇ごろ	前四三三ごろ	前二七二	前二二二	○中国で紙が改良される	
本書で取り上げた人物	メソポタミア文明が栄える				ギリシャ（アテネ）が栄える	ローマがイタリア半島を統一	秦の始皇帝が中国を統一	仏教が中国に伝わる	○中国で紙が改良される
	メソポタミア文明が栄える	インダス文明が栄える	エジプト文明が栄える	黄河文明が栄える	ギリシャ（アテネ）が栄える	ローマがイタリア半島を統一	秦の始皇帝が中国を統一	仏教が中国に伝わる	○中国で紙が改良される
キリスト生（前四〜七）	孔子生（前五五二）				ソクラテス生（前四七〇）	ブッダ生（前四六三）	キリスト生（前四〜七）	キリスト生（前四〜七）	キリスト生（前四〜七）
	孔子生（前五五二）	ソクラテス生（前四七〇）	ブッダ生（前四六三）	孔子生（前五五二）	ソクラテス生（前四七〇）	ブッダ生（前四六三）	キリスト生（前四〜七）	キリスト生（前四〜七）	キリスト生（前四〜七）

中世（封建時代前期）

鎌倉時代

(南北朝時代) 室町時代 (戦国時代)

(南宋)

モンゴル／元

明

- 一五一九 マゼランが世界周航に出発
- 宗教改革 ルター（一五二七）カルバン（一五四一）
- ルネサンスが全ヨーロッパに広まる
- 一四九八 バスコ・ダ・ガマがインドに着く
- 一四九二 コロンブスがアメリカに着く
- 大航海時代はじまる
- 一四五三 東ローマ帝国がほろびる
- グーテンベルグが活版印刷術を発明
- 一三九二 朝鮮王朝を建国
- 一三六八 明建国
- 一三八七 ダンテが「神曲」を書く
- イタリアにルネサンスがおこる
- 教皇や教会の勢力がおとろえる
- 一二七四 マルコ・ポーロが元に着く
- 一二六〇 フビライ・ハーン即位
- 一二〇六 チンギス・ハーンがモンゴル民族を統一
- 一一七七 朱子学がおこる
- 自治都市が発達する

中世（封建時代）

ミケランジェロ生（一四七五）
コロンブス生（一四四六）

近 世 (封建時代後期)	
安土桃山時代	江戸時代
明	清
<p>一五三三 スペインがインカ帝国をほろぼす</p> <p>○絶対主義の国家があらわれる</p>	<p>一七六九 ワットが蒸気機関を改良</p> <p>一七六二 ルソーが「社会契約論」を書く</p> <p>一七四八 モンテスキューが「法の精神」を書く</p> <p>一七四〇 フリードリヒがプロイセン国王になる</p> <p>一六八九 イギリスの権利章典</p> <p>一六八八 イギリスに名誉革命おこる</p> <p>一六四四 清が中国を支配</p> <p>一六四三 フランスのルイ十四世が即位(絶対王政)</p> <p>一六四二 イギリスの清教徒革命</p> <p>○市民階級の力が盛り上がる</p> <p>一六二八 イギリスで権利請願</p> <p>一六〇二 オランダが東インド会社をつくる</p> <p>一六〇〇 イギリスが東インド会社をつくる</p> <p>一五八八 イギリスがスペインの無敵艦隊を破る</p> <p>一五八一 オランダがスペインからの独立を宣言</p> <p>一五五八 エリザベス1世が即位</p>
中 世	近 代
<p>ガリレオ生(一五六四)</p>	<p>平賀源内生(一七二九)</p> <p>ナポレオン生(一七六九)</p>

近世（封建時代後期）

江戸

明治

清

- 一八七六 ベルが電話を発明
- 一八七一 ドイツの統一
- 一八六九 スエズ運河が開通
- 一八六七 マルクスが「資本論」を書く
- 一八六六 アメリカで南北戦争が始まる
- 一八六一 イタリアの統一
- 一八六〇 ロシアが沿海州を領土とする
- 一八四二 清がイギリスと南京条約を結ぶ
- 一八四〇 アヘン戦争（清・英）一八四二
- 一八三二 イギリスが第1次選挙法改正
- 一八二〇ころ ラテンアメリカ諸国の独立
- 一八一四 ウィーン会議がはじまる
- 一八〇四 ナポレオンが皇帝となる
- 欧米の産業革命が進む
- 一七八九 フランス革命がおこる（人権宣言）
- 一七七六 アダム・スミスが「国富論」を書く
- 一七七五 アメリカの独立戦争（一七八三）
- 一七七〇年代 イギリスの産業革命が進行する

近代

- シュバイツァー生（一八七五）
- ガンジー生（一八六九）
- キュリー夫人生（一八六七）
- ゴッホ生（一八五三）
- エジソン生（一八四七）
- 福沢諭吉生（一八三四）
- トルストイ生（一八二八）
- ナイチンゲール生（一八二〇）
- リンカーン生（一八〇九）
- ダーウィン生（一八〇九）
- 二宮尊徳生（一七七七）
- ベートーベン生（一七七〇）

近 代		現 代	
明 治		大 正	
清		中華民国	
<p>一九二九 世界大恐慌がはじまる</p> <p>○世界の平和がゆらぎはじめる</p> <p>一九二二 ソビエト社会主義共和国連邦が成立</p> <p>一九二〇 国際連盟の成立</p> <p>一九一七 ロシア革命 アメリカ参戦</p> <p>一九一四 第一次世界大戦（〜一九一八）</p> <p>一九一一 中国で辛亥革命がおこる</p> <p>一九〇五 シベリア鉄道が完成する</p> <p>一八九九 清で義和団事件（〜一九〇二）</p> <p>一八九八 フィリピンがアメリカの領土となる</p> <p>一八九五 マルコーニの無線電話</p> <p>一八九四 朝鮮に甲午農民戦争がおこる</p> <p>一八九〇ころ アフリカの分割終わる</p> <p>一八八六 ビルマがイギリスの植民地になる</p> <p>一八八五 フランスがベトナムを征服</p> <p>一八八二 三国同盟（ドイツ・オーストリア・イタリア）</p> <p>○植民地の争奪が激しくなる（帝国主義の時代）</p> <p>一八七七 インドがイギリスの領土となる</p>	<p>キング牧師生（一九二九）</p>		
<p>チャップリン生（一八八九）</p> <p>ヘレン・ケラー生（一八八〇）</p>			

現 代	
昭 和	
中華民国	中華人民共和国

- | | |
|---|---|
| <p>一九三三
ドイツでナチスが政権をとる</p> <p>一九三九
アメリカでニューディール政策開始</p> <p>一九四一
第二次世界大戦（～一九四五）</p> <p>一九四五
ドイツが降伏</p> <p>一九四五
イタリアが降伏</p> <p>一九四五
ポツダム会談 国際連合発足</p> <p>一九四五
ドイツが降伏</p> <p>一九四五
イタリアが降伏</p> <p>一九四五
第二次世界大戦（～一九四五）</p> <p>一九四五
アメリカでニューディール政策開始</p> <p>一九四五
ドイツでナチスが政権をとる</p> | <p>一九六九 人間が月面におり立つ（米）</p> <p>一九六八 核兵器拡散防止条約調印</p> <p>東南アジア諸国連合（ASEAN）の成立</p> <p>ヨーロッパ共同体（EC）が発足</p> <p>アフリカで一七国が独立</p> <p>キューバで革命がおこる</p> <p>ソ連の人工衛星打ち上げ</p> <p>ヨーロッパ経済共同体（EEC）結成</p> <p>北大西洋条約機構（NATO）が成立</p> <p>アジア諸国の独立</p> <p>ポツダム会談 国際連合発足</p> <p>ドイツが降伏</p> <p>イタリアが降伏</p> <p>第二次世界大戦（～一九四五）</p> <p>アメリカでニューディール政策開始</p> <p>ドイツでナチスが政権をとる</p> |
|---|---|

現 代

現 代	
	平成
中華人民共和国	
	二〇〇三 米英軍、イラク戦争開始
	二〇〇二 欧州単一通貨「ユーロ」一二カ国で流通
	〃 米英軍、アフガニスタン攻撃
	二〇〇一 アメリカで同時多発テロ
	一九九三 ヨーロッパ連合（EU）が発足する
	〃 ソ連の解体
	一九九一 湾岸戦争
	一九九〇 東西ドイツ統一
	〃 東欧の共産党政権がたおれる（～一九九〇）
	一九八九 中国で天安門事件おこる
	○冷たい戦争が終わる
	一九八六 ソ連で「ペレストロイカ」はじまる
	一九七九 ソ連がアフガニスタンに侵攻（～一九八九）
	一九七六 ベトナム社会主義共和国が成立
	一九七三 ベトナム和平協定
現 代	



第2部

世界の偉人達の 生きざま

田中義明

出来過ぎて敬遠された孔子

孔子は乱れた世(約2500年前の中国)を平和で正しい世に戻そうとして諸国を巡り、人間尊重の理想を諸侯に説いて回り、晩年は教育と著作に励んだ儒教の父です。

「30にして立つ」まで

孔子は戦乱の続く中国で最強といわれた戦士(軍人)を父として紀元前552年に生まれ、丘人と名付けられました。

中国の有名な歴史書「史記」によると、孔子の祖先には著名な教養人がずらりと並んでいます。

彼が3歳の時父と死に別れ、それを境に彼の家は坂を転がり落ちるように貧乏になっていきました。彼の母は故郷にいれば昔からの付き合いでお金も掛かるので、魯国の都曲阜の郊外に移って、親子2人だけでつつましく、ひっそりと暮らすことにしました。

彼は7歳で小学校に入りますが、最初から勉強の好きな子供ではありませんでした。彼は自ら「私は15歳の頃に、よし、これからは学問に打ち込むぞと思うようになった。」と語っています。彼は2mを超えるノッポだったといわれていますから、有名な軍人だった父の職業を継げば、知人も多く出世は間違いないでしょうが、敢えて学問の道を選びました。当時高度な学問をするには、家庭教師をつけるのが当たり前でしたが、彼の家には勿論そんなお金はありません。彼はスタートからハンディを背負っていたのです。

彼は「書経」、「詩経」など昔から中国に伝わっている本を貪るように読みました。ずっと後になって孔子という名が世に知れ渡るようになった頃、弟子の子貢しこうがある貴族から「貴方の先生は若い時に誰について学問をされたのですか」と尋

ねられたことがありました。それに対し子貢は「先生はどこでも、誰にでも学ばれました。誰という特定の師がいたわけではありません。」と答えました。

つまり孔子は、自分で見たり、聞いたり、読んだりしたことを材料に自分でことん考え、正しいと思う事柄を関連づけ、体系づけて蓄積していくという思考の方法をとっていたのだと思います。

彼は19歳で結婚し、その翌年には長男が誕生するなどして、生活のために小役人となってあくせく働かなければならなくなりました。

彼の最初の仕事は、農民が税として納める穀物をいちいち調べて倉庫に入れる仕事でした。彼は決して賄賂^{わいろ}などは取らず、公平無私だったので農民からは信頼されていました。やがて牧場の監督もしましたが、どんな仕事についても誠意を持って忠実に励みました。

しかし、できることなら学問に専念したい、1日も早く学問の道をひたすら歩みたいものだ^と心の底から望んでいました。その願望が強い程、生活費稼ぎのための日々の仕事が、彼にとって辛いものでした。「学問を好むという点では私の上に行く人はいない」と日頃謙虚な彼自身が言っています。彼は役所の仕事が終わると寸暇^{すんか}を惜しんで勉強しました。

彼は24歳で母を亡くしましたが、その悲しみも乗り越えて5年、10年と努力を続け、学問を志し15年立った時、「30にして立つ」と自他共に認めるだけの実力を蓄えることが出来ました。そして孔子の所へは、その人格、学識を慕って青年達が集まって来るようになりました。

彼の教えを「論語」という本にまとめていますが、その中に「君子」という言葉が70回以上も出て来ます。君子とは一言で言うならば、世の中を平和に治める理想的な王、政治家、人格者を意味します。孔子以前の王でいえば、古代中国周の輝かしい文化を築き上げた周公がそれに当たり、孔子は夢にまで見るほど尊敬していました。彼は君子と呼ばれる政治家となるためには「仁^{じん}」という徳目を身に付けている必要があり、そういう政治家を養成することが、彼が学問をする唯

一の目標であると言っています。

30歳以降政治家を目指して

孔子は諸国を修行して回り、再び魯国の土を踏んだのは50歳前後になってからです。彼の「仁」は貧しい人、不幸な人への愛を意味しましたが、イエス・キリストとは違って「なんじの敵を愛せ」などとは決して言いませんでした。彼の「仁」は、悪人に対しては鋭い刀となって胸元に突き刺さっていったのです。

彼は「私は40歳になった時、自分の進むべき道をはっきり見出し、物事に惑うことがなくなった。そして50歳になった時、天が私に与えた使命が何であるかをはっきり見出したと言っています。

彼は魯国に戻ると、自分の言う「仁」を実現するために高級役人として役所勤めを始めました。

彼は土木工事や民事を取り締まる仕事を次々とやってのけ、54歳で国の政治に深く関わる大臣の1人(現在の警視総監のような役)にまで出世しました。

彼は実権を握ると、恐れることなく悪の大本を^{おおもと}裁ち切ろうと、まずギャングのボスを捕らえました。その男は役人をあごで動かし、人々にまむしのように恐れられていましたが、孔子はびくともしませんでした。

次に彼は魯国の政治を良くするために、3人の^{あくかろう}悪家老の勢いを抑え付けました。彼等は沢山の家来を自由に使い、やりたい放題に振る舞っていたので、これは実に大変な仕事でした。しかし孔子は人民のためには、少しもためらわず、相手がどんなに強敵でも、悪は悪として厳しく退けたのです。

孔子の活躍の結果、魯の国はどんどん良くなり発展しましたが、隣国の^{せい}齊ではそれをみて心配になりました。今のうちに何とかしなければ近いうちに我が国が^{じょがく}圧迫されるおそれがある。そう思った齊国の重臣達は、80人の女楽(歌劇女優のようなもの)を魯国の国王に贈り、うまく丸め込んで孔子の言うことには一切

耳を傾けないようにしてしまいました。この結果魯国の政治はたちまち乱れ始め、政界における孔子の立場は目に見えて悪くなっていきました。そしてついに孔子は弟子達を連れて国外に立ち去らなければならなくなりました。

孔子は魯国一国だけでなく、中国全体を「仁」で治めるために諸国を旅し、諸侯しよこうに説いて回ったのですが、戦乱に明け暮れていた当時、戦術以外に耳を傾ける諸侯はいませんでした。

孔子は13年にわたって諸国を渡り歩きましたが、どこも彼に実権を握らせることはしませんでした。それは彼があまりにも優秀で、弟子達も立派だったので、実権を持ったらいつか自分の地位を脅かす人間になると思ったからです。孔子はいつも相談を受けるだけで、今で言えばコンサルタントとして扱われたわけです。68歳になって再び魯国に呼び戻されましたが、ここでも国老こくろう(国家の顧問)として厚遇されましたが、実際の政治には参加させてもらえませんでした。

コンサルタント・教育者としての晩年

孔子は年齢からしても政治家になることは諦め、未来に希望を求めて弟子達の教育と「詩経」や「書経」の編集、「春秋」の著述しゆんじゆうに専念することにしました。孔子は、政治家としては最後まで恵まれませんでした。教育者としては輝かしい成果を上げました。弟子は3千人、そのうち孔子の教えをしっかりと身に付けた者が72人もいたと伝えられます。

そのうちで一番優れた弟子だった顔回がんかいは孔子について次のように語っています。「孔子という人は、私達があれこれ言うことが出来ないほど偉大な人物です。先生は人を導くのにまず文をもって知識を広め、その後礼をもってしめくくりをつけます。私達は、やむにやまれぬ気持ちになり、いつとはなしにその教えにのめり込んでしまいます。そうになると最初はとらえようのなかった人格がだんだん見えてきます。私達がそこまで進んで行こうと思っても、まだまだ高く遠く

で私達には近寄ることができないのです。」

その一番弟子の顔回が31歳の若さで亡くなってしまった時、孔子は「天が私を滅ぼした。ああ天が私を滅ぼした」といって子供のように泣き崩れたといえます。その時彼は71歳になっていましたが、その年になっても彼は悲しい時には全てを忘れて泣ける人間だったのです。

孔子は言っています。「世の中には、仁は高遠で容易には求められないものだと思います。思いこんでいる人が多いが、そんなことはない。身近な所から実施していき社会に迷惑を掛けないことが仁なのだ。換言すれば、仁とは社会的人間としての自覚であるともいえる。」

彼は73年の生涯を終え、魯の城の北に、優れた弟子達の悲しみに包まれて静かに葬られています。弟子達は喪に服している間に互いに孔子の教えについて語り合い、それを書き記して「論語」にまとめ上げました。この本が中心となって孔子の教えは中国全土に広まっていきましたが、やがて日本にも伝わってきて、私達日本人の心のよりどころとなりました。

私の時代は小学校の倫理に論語はありませんでしたが、成人してから何冊か論語の解説本を図書館で借りて勉強しました。孔子の教えは儒教じゆきやうといわれます。「需」とは、ひろく昔の聖人の道を学んで心を潤すという意味です。

現代の日本では、儒教に対する関心が薄れつつありますが、そのため豊か過ぎる物質に心を奪われ、精神的な支えを失っているように思えてなりません。論語の中には人間を人間らしくする永遠の宝が沢山含まれています。また共産主義の中国では、国家の主義と儒教の思想が合わないとして退けられていますが、いつの時代か力強く儒教が復活することを期待しています。

〈注〉この紹介文はさ・え・ら書房「文化の出発点となった人々」(志村武)によっています。

人類の良心 ソクラテス

万能選手だったソクラテス

ソクラテスは紀元前470年にギリシャのアテネ市に生まれました。その頃のアテネ市は、世界第一の海軍力を持ち、交通と商業の発展により、政治的にも経済的にもギリシャ全土で一大中心地を成していました。その面積からいってもギリシャの都市国家の中では最大で、日本の佐賀県位の大きさを持っていました。父親は石像の彫刻師で、母親はお産の手伝いをしていました。

彼は、当時の小学校教育は十分に受けられる家庭環境にありましたが、7歳からの小学校は行ったとしても科目は音楽と体育しかありませんでした。彼はそこで人一倍基礎体力を鍛えたに違いありません。彼は軍人ではありませんが生涯で4回戦争に参加しています。いずれにおいても目覚ましい活躍をしていますが、特に47歳の時のデリオンの戦においては勇気と忍耐力の手本を示しました。

アテネ軍の守る砦が猛火に包まれ、全軍総崩れとなった時、ソクラテスと戦友のラケスだけが踏みとどまって友軍の退去を助けたのです。ソクラテスの鋭い眼光、その堂々たる身体全体にみなぎる勇気が並み居る敵を寄せ付けなかったのです。そして2人も見方の退去を見届け、足を速めました。ラケスが言っています。「ソクラテスがいなければアテネ軍は全滅していただろう。」

当時のアテネ人にとって、ソクラテスはまさに謎に包まれた人物だったでしょう。彼自身は自分自身について何も書き残していないからです。しかし、私達は彼の弟子や友人達の書いた忠実な記録を手掛かりとして、ソクラテスの真実の像に迫ることが出来るのです。

当時のアテネでは、16歳になると学校に行くことをやめ、2年後には同族組

合の者達によって検査を受け、青年団員となって一人前の市民としての待遇を受けることになります。そして20歳になれば、法律上の全ての権利を行使できるようになります。

ソクラテスもアテネの中流階級として、このようなプロセスを踏んで成長していったと思われます。その過程でオリンピックも楽しんだことでしょう。オリンピックには現在のように陸上競技の他に詩の朗読、音楽、劇のコンクールも含まれており、若いソクラテスは、それらの鑑賞に胸をときめかしたことでしょう。たとえ都市国家間の戦争中でもオリンピックのある年はその期間「神の休戦」といって1ヶ月間休戦する慣わしだったといえますから、さすがオリンピック発祥の地だと思います。

ソクラテスが24～5歳になった頃は、アテネは東地中海の制海権を一手に治め、繁栄を極めていました。政治的には民主主義（といっても戦争で捕虜となった人を奴隷として使うことは許されていました）が実現していて、商工業が非常に発展し、貿易と植民が盛んに行われました。この繁栄の地アテネを目指して、アジア、アフリカ、ヨーロッパの各地から言葉や服装や、信仰も異なる人々が続々と入国してきました。ソクラテスはそれらの人々と積極的に接触しました。それは、彼等がソクラテスの知らない知識を持っており、思いもよらない知恵を出したからです。

ソクラテスはその頃自然科学に非常に関心を寄せていました。例えば「地球は何から成り立っているか」、「万物の根源は何か」、「地球は平らか丸いか」などの疑問を外国から来た有名な学者に1人ずつ聞いて回りました。その結果彼は^{あぜん}茫然としてしまいました。それぞれの学者の言うことがあまりにも^{むじゅん}矛盾していたからです。

彼が27～8歳の頃、どうしても自分が納得できる学説に巡り会えないのは自分が自然科学には向いていないからだと思うようになり、長年続けてきた研究をあっさりやめてしまいました。

一方自然科学ではない分野の哲学、論理学の分野では、当時ソフィストと呼ばれる一団がもてはやされていました。ソフィストとは賢い人、知者を意味しますが、私は^{きべん}詭弁論者と訳しています。議論している相手に気付かれないように論点をずらして結果的には自分が言いたい方向に結論を持って行ってしまう議論の名人のことです。私達がギリシャに旅した時、老人男性が2人議論しながら同じ場所を行ったり来たりしている場面に何回か会いましたが、ギリシャ人はもともと議論好きなのかも知れません。

ソフィストの術が一番求められるのが政治の場です。そしてアテネでは能力さえあれば、誰でも代議士になれましたので、多くの市民がその術を学ぼうとソフィストの元に集まりました。しかし、ソクラテスにはどうしてもソフィスト達が真理の探究をしているとは思えませんでした。「人生は、考え方や言い方や党派次第でどうにでもなるものであって良いはずはない。自分は『誰にとっても善、誰にとっても悪』であるものとは何であるかを研究するのだ。」と決心しました。

ソクラテスは若い人を相手に、このテーマについて議論を続けているうちに、次第に評判は良くなり、真面目な弟子達が増えていきました。しかしちっとも金儲けに関心のない彼は、相変わらず貧乏でした。ソフィスト達は「ソクラテスは若者相手に毎日くだらない話をしているのだから、貧乏なのは当たり前」といって馬鹿にしていました。彼が37～38歳の頃です。

ソクラテスを誰よりも尊敬しているカイレフォンという弟子が、世の中のあまりにも的外れの評判に腹を立て、アテネからかなり遠いアポロン神を祭るデルフィ神殿に1人旅立ち、「私の先生ソクラテスより賢い人が今の世の中にいるでしょうか」とアポロン神にお伺いを立てました。それを聞いた^{みこ}巫女が仲介役となって、しばらくたって「ソクラテスのような賢い人はいない。」というアポロン神のご託宣が下がりました。カレイフォンは喜び勇んでアテネに飛んで帰り、ソクラテスにそのことを報告しました。

するとソクラテスにはこりともせずと言いました。「私はここ数年来、人間に関する研究を続けているが、まだ何も分かっていない。アポロン神は誰か他の人と私を間違えたのではないか。」

その後しばらくソクラテスは時間さえあれば、賢者として有名な人を1人ずつ訪ねては、真、善、美や徳などについて問答をしていきました。そして彼は気が付きました。自分も世に賢者と言われている人達も本当に知らなければいけないことを知らない。しかし自分は知らないということだけは知っているけれど、賢者といわれている人達は自分は知っていると思っている。アポロン神はこの点について言ったのだとやっと納得しました。そして世の中の人々に、自分が知らないことは何なのかを知らせるのが神が自分に託した使命なのだと思います。それに思い当たるまでには実に40年の歳月が流れていました。

ソクラテスは、デルフィの神殿に彫り込んである「汝自身を知れ」という言葉を一番好んで使っていました。世の中には自分自身が分かっていないため、つまり自分の長所と短所が分かっていないために短所を長所で補ってバランスを取ってピンチを乗り切ることに失敗する人があまりにも多いからです。

ソクラテスは哲学者ではありましたが、青白くて気むずかしい学者タイプの人ではありませんでした。お酒は飲むし、社交性にも富み、演劇や体育祭にも喜んで参加しました。戦争にも志願して4回も参戦するという幅の広いマルチタレントでした。彼のこういう生活態度や思想は次第に広く知れ渡り、彼を慕って有能な若者がアテネに集まってくるようになりました。その中にギリシャの3大哲学者に数えられるプラトンやアリストテレスも含まれていました。

しかし一方でソクラテスは既得の権益の上にあぐらをかいている上流階級の人達からは徹底的に嫌われていました。彼等はソクラテスの個人攻撃にさらされ、政治や行政の中身も厳しく批判されたからです。

無実でも自ら毒を呷ったソクラテス

デリオンの戦いの翌年、彼が48歳の時、ギリシャで有名な喜劇作者アリストファネスによってソクラテスをモデルにしたような演劇がアクロポリスの丘で上演されました。ソクラテスはギョロ目で、獅子鼻で、歩く後ろ姿は水鳥を連想させました。実際のソクラテスは劇中の人物とはまるで違うのですが、ソクラテスを実際に知らないアテネ市民は混同してしまい、そのことがソクラテスの評判を更に悪くしました。

こうして誤解が誤解を生み、反感が反感を生んで、ついにソクラテスは「青年達を墮落させ、国家が信仰する神々を冒瀆する危険人物である。」としてアテネの法廷に告訴されてしまいました。まさに無実の罪です。ソクラテスは500人の陪審員を前にして3時間にわたって堂々と意見を述べました。

「諸君、アテネ市民の多くは居眠りばかりしている軍馬のようなものだ。私は神によってその軍馬の目を覚ますために軍馬にくっつけられたアブのようなものだ。だからこそ私は至る所で居眠りしている諸君の精神を問答という針で刺して回っているのだ。その針を刺された者は怒って私をピシャリと叩き落とすように死刑にしようとするかも知れない。しかし、そうすれば諸君は生涯目覚めるチャンスを失うであろう。」

その結果は有罪票数280、無罪票数220でソクラテスの死刑が確定してしまいました。もし彼が憐れみを請うていたら死刑は免れたかも知れませんが、彼の日頃の主張を正々堂々と陪審員達にぶっつけて一層の反感を買ってしまったのです。

いよいよ明日死刑が執行されるという日の早朝、クリトンという親友が獄屋を訪れ、ソクラテスに脱獄の準備が出来たことを告げました。しかし、ソクラテスはその誘いには乗りませんでした。

「クリトン君、君の友情には本当に感謝する。しかし、尊いこと、善いこと

ということは生き長らえることとは全く関係のないことなのだ。自分がどんな人間であるかを抜きにして、ただ自分の命を保つなどということは男子が問題とすべきことではないのだ。私は今日まで生きられる時間をどうしたら最善に生きられるかだけを考えて生きてきた。それを最後まで貫きたい。」とってクリトンを帰し、翌日毒をあおって71歳の人生を閉じました。

彼の精神と思想は、ヨーロッパの人達だけでなく、広く「人類の良心」として今日も尚生きています。

(注)この紹介文はさ・え・ら書房「文化の出発点となった人々」(志村武)によっています。

インドを率いる大王への道を捨てたブッダ(釈迦)

城を出るまで

今からおよそ2500年前、現在のネパールとの国境近くにシャーキャという小国（面積は北海道の半分位）があり、その国の王はシュッドーナといい、王子としてシッダールタという一人っ子がいました。シッダールタは生まれると直ぐに母親と死に別れたため兄弟が増える可能性はありません。

シッダールタは、非常に情け深い性格で、どんなに小さい生命も奪ったことがなく、また疑問に思うことは「何故」、「どうして」とどこまでも突き詰めずにはいられない探求心の強い子供でした。そして国王の心配は、一人木陰で物思いにふけることが多いシッダールタが国政の後を継ぐ気が無いのではないかということでした。もしそんなことにでもなれば、小国のシャーキャ国などはたちまち隣国に攻め込まれてしまうでしょう。

シッダールタは19歳の時、ミス・シャーキャ国ともいうべき美人と結婚しました。学問はもとより武道にも優れ、美人に恵まれ情けも厚いシッダールタ

は、国王になればインドに散在する16の国を統一し、平和を築くであろうと国王はじめ国民の期待を一身に集めていたのですが、シッダールタはそのためには多くの尊い人命を失わなければならないことが何としても嫌でした。

シッダールタはしばしば馬で国内を視察して回りましたが、その度に彼は多くの不幸な人々と遭遇し、人間の不幸は突き詰めると老・病・死の三つに集約されるのだと考えるようになりました。人間はこの三つの苦しみからどうしたら解放されることが出来るかを真剣に考えるようになりました。そんな折、彼は1人の坊さん（当時は寺などなかったので、家を捨てて山や森で修行する人）に出会いました。

なんの飾り気もない身なりをしていながらも、その坊さんは自信に満ちて実に堂々としていました。心の落ち着きが身体全体に滲み出て神々しいばかりです。目は澄み切った青空のようにすがすがしく、真一文字に結んだ唇は意志の強さを物語り、それでいて表情は見る者の心に染み入るように慈悲深いのです。

シッダールタは長い間探し求めていた人生の光を、今こそ見出したような気持ちになりました。シッダールタはこれ以降「王位は継がず坊さんになろう。そして老・病・死を克服する道を見極めるのだ。たとえ私がインド全土を武力で統一しても、私が死ねばまた戦乱の世になって、人々は苦難にあえぎ不幸に泣くに違いない。私は坊さんになり、全人類の心の支えとなる真理を見出すのだ。」と固く決意したのでした。

シッダールタは自分の息子が生まれるのをひたすら待ちました。そうすれば自分の代わりに王位を継ぐことが出来るからです。そしてついに待ちに待ったその日が来たのです。

月が中空に輝く夜、カピラ城の門が音もなく開かれ、御者に手綱を引かせた馬上のシッダールタは、父と妻子の眠る城をなつかしげに仰ぎ見ました。既に29歳になっていました。

修行時代

シッダールタは東へ6~70km進みラーマという山の麓に到着しました。そこは多くの出家した修行者が修行している所で、彼は自らの剣で髪の毛をそぎ落とし、その髪の毛と冠と剣を御者に渡し、それらを国王に届けてくれるように頼みました。そして「自分は、自分の目的を達成するまでは決して城に戻らぬ」と告げました。身に付けていたきらびやかな衣装は村人の粗末な着物と交換し、1人森の中に入ってしまいました。

そこでシッダールタが見た修行は、自分の身体を限界までいじめ抜くもので、あくまで自分の幸せのための修行でした。シッダールタはがっかりしてしまいました。シッダールタが城を出てまで修行に出たのは「どうしたら全ての人間を幸せにできるか」ということだったので、こんな所に何時までもとどまっていられないと、南の方に偉い仙人がいるということを知ると、翌朝南へ向かって旅立ちました。しかしどんな仙人も、彼を満足させる答えを持っていませんでした。

彼はいよいよ自分自身で答えを見出さなければならないと、一人で出来る難行苦行を続けました。それは徹底した断食行で、1日米1粒、ごま1粒という厳しいもので、当時のインドでは真理体得のための最良の方法とされていました。彼の身体は1年の間にみるみるやせ衰え、ガンダーラで見つかったシッダールタの有名な座像は、まさに骨と皮と筋だけで、眼光だけは鋭く輝いています。身に付けているものといえば、腰に巻いたボロ切れ1枚です。

シッダールタは川の岸辺に水を飲みに行ったのですが、身体を支える力もなく途中で倒れ込んでしまいました。そして、こんなに体力が無くなってしまっただけでは考える力も出ない、ひとまず体力を回復しなければと反省しました。そこにたまたま通り掛かった村娘に乳がゆを恵んでもらい、ふたたび森の奥へと入って行きました。

城を出て6年経った頃です。シッダールタは座っている間に自分の心が澄み切った鐘のようになっていくのを感じました。今日まで分からなかったことが、もつれた糸がほどけるように分かってきたのです。心が清らかに統一され、慈愛に満ちた知恵が生じて、彼は人間社会の苦の原因も見極めることができました。もう老・病・死も恐れません。人間世界のあらゆる欲望も洗い流されたようにすっかり無くなってしまいました。

これを仏教の言葉では「悟り」と言います。シッダールタは最早カピラ国の王子でも貧しい修行者でもなく、生きたまま「仏陀」となったのです。彼はそれから35日の間本当に自分が「仏陀」になったのかどうか確かめるために同じ場所に座り続けました。そして間違いないと確信を持って立ち上がりました。

仏教の布教

これからは耳ある者の全てに自分が悟ったことを聞かせねばならないと、まず仏陀が訪れたのは鹿野苑ろくやおんという修行者が集まる場所です。そこには、以前断食中にシッダールタが村娘から乳がゆを恵んでもらうのを遠くから見ていた5人の修行者がいました。彼等はシッダールタを修行の落伍者として軽蔑していました。しかしさすがに修行者です。シッダールタが近づいて「私は仏陀になることが出来た。」とおかしがたい威厳に満ちて言うと、皆その場にひれ伏してしまいました。

仏陀は言いました。「人間には誰にも貪欲と怒りと愚痴という3つの毒がある。この3つの毒も結局は人間が我を張り、自分にしがみつく所から生ずるのだ。老・病・死の苦しみも全て我からくるものだ。」これを聞いて5人の修行者の心は清々せいせいしくなってきました。そして身体中に力と勇気が満ちあふれてきました。5人の修行者は心の底から感動し、仏陀の最初の弟子になりました。

それから約3ヶ月で、仏陀の弟子は次々に増えて60人になりました。仏陀は

弟子達をインドの各地に派遣し、彼がつくった新しい宗教である仏教の布教に当たらせました。仏陀自身は、その頃インドで最も強大な国であったマガダ国へ行って、人生において何が最も大切かを説いて回りました。

仏陀はいつも聞く人の置かれている状態や頭の程度に合わせて例えなどを変えて話し方を工夫したので、分かり易く信者はどんどん増えていきました。やがてマガダ国の国王までが信ずるようになり、仏陀のために立派な寺も建ててくれました。そんなこともあって仏陀の名前は彼の生国カピラ国のシュッドーダナ王にまで届き、王は早速迎えの使者を送りました。

仏陀は大勢の弟子を引き連れて7年ぶりに故郷の土を踏みました。途中まで出迎えた王や家来達は、仏陀とその弟子達の粗末な服装に驚きました。今やシッダールタは人類の心の指導者として最強国マガダ国の王からも尊敬されている存在なのです。しかし我を捨てた彼等は服装などは気にもとめませんでした。カピラ国でもまず7人の従兄達が、続いて家来や奴隷達までもが次々と信者になっていきました。

ここで一悶着^{もんちやく}起こりました。インドにはカースト制度というものがあり、生まれながらに越えられない4つの階級がありました。

- ①バラモン（僧侶）
- ②クシャトリア（武士）
- ③バイシュヤ（商人、職人、農民）
- ④スードラ（奴隷）

世間では、上の階級の者が下の階級の者に頭を下げて礼を尽くすということはまずありません。ところが仏陀の弟子（比丘^{びく}という）の間では1日でも早く比丘になった先輩に対しては国王といえども、例え先輩が自分の使っていたスードラでも頭を下げるという決まりがありました。それが問題となったのです。

仏陀は言いました。「主人とか使用人というのは、人間が世の中に生きる上

の仮の姿に過ぎない。どんなに尊い身分に生まれても老・病・死を免れるものではない。人間は本来、絶対平等なものである。私達は我^がさえなくせば、どんな人でも大切に出来るようになるのです。」

仏陀がカピラ国に滞在したのは僅か3ヶ月でしたが、仏教はたちまちのうちに国中に広まりました。ただ残念なことに、病気がちだった父シュッドーナ国王がその間に亡くなりました。国王は「自分は今心から幸せだと思っている。息子が仏陀となって、自分が生きているうちにカピラ国に戻ってきてくれたことを」と言って仏陀の手を取って安らかに息を引き取りました。

仏陀がマガダ国に戻って間もない頃、スダッタというインドで1番の大金持ちの信者が、ガンジス川の向かい側にあるコーサラ国の首都舎衛城^{しゃえいじょう}の近くに広大な修行場を寄付してくれました。仏陀はそこを祇園精舎^{ぎおんしょうじゃ}と呼び、6月から9月のモンスーンによる雨期に室内での修行に活用しました。

仏陀や弟子達は雨期が終われば、お椀を手にして町から町へ、家から家へと歩き回り、好意であるいは尊敬の念を持って恵んでくれた食物を、感謝の気持ちを持って食べながら、辻説法などで布教活動を続けていきました。

仏陀といえども老・病・死を免れるわけではありません。ただそれらの苦しみから解放されるだけです。仏陀は80歳で布教の旅の途中亡くなりました。今日では5億人を越える信者を有する一大宗教となっています。

私は数十年前手塚治虫の「ブッダ」という長編漫画を読んだ時の感動を未だに忘れられません。ここに書いた内容はその漫画とほぼ同じ内容となるように心掛けました。現在の日本の仏教のお坊さんは、人間の死後の世界のみを司っているように思えてならないのです。ブッダはあくまでも生きている生身の人間を正しく導くために修行したのです。

(注)この紹介文はさ・え・ら書房「文化の出発点となった人々」(志村武)によっています。

人類史に最も大きな影響を与えたイエス・キリスト

謎に包まれたイエス・キリストの生涯

世界三大宗教（キリスト教・仏教・イスラム教）の中で9億人という一番多くの信者を抱え、これまでの世界史で最も大きな影響を与えてきたのは言うまでもなくキリスト教です。しかも世界で一番多くの伝記を書かれた人はイエス・キリストです。ですからここにイエス・キリストの生涯を要約して紹介することは避けて通れないのですが、いざ筆を執るとなるとはたと困ってしまいました。信者でない私に、これは事実だろうと思われる内容があまりにも少ないのです。

第1に彼は歴史上本当に存在した人物かどうかが問題となります。歴史学者の中には、イエス・キリストの存在に疑問を呈している人が沢山いるのです。アフリカの医療に生涯を捧げたあのシュバイツァー博士さえ、熱心なクリスチャンでありながら「イエスが実在したということを証明しようとして努力してみたが、どうしてもうまくいかなかった。」と自分の著書で書いている程です。

第2にそもそもイエス・キリストは「神の子」なのか「人の子」なのか。イエスは母マリアが大工の父ヨゼフと結婚する前に懐妊したから「神の子」だというけれど、処女懐妊などということが実際に起こりうるのか、また、処刑後の復活、生前に行った数々の奇跡など本当にあったのだろうか。疑えばきりがありません。

信者に問えば、聖書に書いてあるから事実だという答えが返ってくるでしょうが、聖書自体は初めから信じて疑わない後世の人々によって編集されたものです。しかもその聖書にすら、イエスの12歳から30歳までの期間は何も書い

ていないので、この18年間については世界中誰も分からないのです。

ここでは、以下に実際にあったかも知れない事柄をつないで1人の聖人の人物伝をまとめてみようと思います。

イエスがキリスト（救世主・メシア）になるまで

イエスはナザレの大工ヨゼフを父とし、その妻マリアを母として紀元前4年にベツレヘムの馬小屋で生まれました。

ベツレヘムに将来大王となるべき神の子が誕生したことを星占いで予知した東方の3人の博士（よくキリスト教の宗教画に描かれている）は、当時のユダヤのヘロデ王に会い、その子との面会を申し込みました。ヘロデ王はいずれ自分の地位が脅かされると思い、兵士達に命じてベツレヘムの男の赤ん坊を皆殺しにさせました。イエス一家はこっそりとベツレヘムを抜け出し、奇跡的に助かりました。

そして12歳頃まで、ナザレで父から大工仕事を習いながら、学校でユダヤの歴史や預言書、律法を学んで育ちます。そして12歳の時エルサレムで毎年行われるユダヤ最大のお祭り過越祭（スギコシサイ、モーゼに率いられてエジプトを脱出したことをお祝いする1週間のお祭り）に参加しました。その際生け贄に供される羊に関してラビと呼ばれるユダヤ教の律法学者を相手にイエスは沢山の質問をして多くのラビをさんざんやり込めました。

ここまでが聖書でたどれるイエスの少年時代で、この後30歳の立派な青年になるまでは、どこで何をしていたかは想像する他ありません。彼は20歳の頃父を亡くし、弟4人、妹2人の長男として一家を支えるために生活は大変だったろうと思います。特にその頃のユダヤはローマ帝国の植民地としてユダヤ人は奴隷同様の状態でした。

ユダヤ教のヤウェー神がユダヤ民族を選ばれし民として尊重しているのであ

れば、もう一度ダビデのような強力な王をメシアとしてこの世に送ってくれて、ローマ人を1人残らず追い払って欲しいというのがユダヤ人の共通の願望でした。イエスの誕生から青年時代にかけて、2度ユダヤ人のそういう気持ちが爆発して、ローマ軍との間に血の雨を降らしたことがありましたが、2度とも武力でねじ伏せられてしまいました。

イエスもユダヤ人の1人です。この敗戦で悔しい思いをしたに違いありません。そんな折、ヨルダン川のほとりで「悔い改めよ、神の国は近づいた。」と自信に満ちた声で説法しながら、集まった人々に洗礼を施すヨハネという偉い修行者が現れ、次第に遠方からも洗礼を受けに来る人達が増えていきました。イエスもその話を聞きつけ、ヨハネの洗礼を受け、ユダヤ人はもとより全人類のためになろうと意を決しヨルダン川のほとりにやって来ました。

イエスが人をかき分けてヨハネに近づくと、ヨハネはこの人こそ私が待ちに待ったメシアに違いないと感じ、「貴方は私の洗礼を受ける必要はない。私は貴方の靴の紐をとくにも値しない男だ。」と言いました。

イエスは「私は世の全ての不幸な人々を救うために貴方の洗礼を必要としているのです。是非受けさせて下さい。」と強力に願い出て、やがてヨルダン川の清らかな水でヨハネによるイエスの洗礼が始まりました。イエスの人間的な欲望の全てが洗い流されていき、ヨハネに励まされてイエスの心には満々たる自信と勇気が満ちあふれてきました。

私は不幸な人々のために神の子となるのだ。イエスはただ1人焼けた砂地を1歩、1歩踏みしめながら、誰もいない砂漠の真ん中へ入って行きました。誰もいない所で、全くの1人きりになって、自分という者と思う存分に戦ってみたかったのです。

神の子として生き抜くためには、自分を徹底的に捨てなければならない。10日、20日と経つうちに、肉体はいよいよ衰えていきました。30日を過ぎる頃には立つことは勿論、手を動かすことすら難しくなってきました。昼には彼

を狙って秃鷹が舞い、夜には獣の遠吠えが聞こえるようになり、自分の死が一步步近づいていることが感じられます。しかし、イエスは逃げだそうともしませんでした。自分の弱さと必死に闘い、飲まず食わずの生活を続けて41日目の暁に「我こそ神の子」（キリスト）とイエスは火の出るような叫び声を上げました。

イエスがキリストとして

彼の心の内にひそむ欲望と弱さは、人類に対する限りない愛情によって跡形もなく吹き飛ばされてしまったのです。彼は自信に満ちてナザレの街に戻って来て説法を始めました。

「皆さん、神の国はすぐ間近にあります。この世の出来事などにとらわれず心をつくし、力をつくして父なる神を信じなさい。悪者にも手向かってはいけません。右のほほを打たれたら、左のほほも打たせてやりなさい。下着を奪おうとする者があったら上着も与えてあげなさい。」

イエスのこういう話は、貧しい人々、不幸な人々の間に力強く浸透していきました。一方で既得権益を持っている人々、貴族、ユダヤ教の祭司、パリサイ派の人々（旧約聖書の解釈を一手に引き受けて古くからの律法を全てのユダヤ人に守らせようとしている人々）は、イエスを無視するか反感を持って迎えました。彼等が考える神とは、ユダヤ民族の独占物であり、「神の国」とはユダヤ民族が地上の全てを支配することであったからです。

イエスは12人の弟子を選んで使徒と名付け、使徒を各地に派遣し、自らもガリラヤ地方を中心に布教して回りました。急速に増えていく信者を見てパリサイ派などはいずれイエスが信者を率いて自分達に向けて反乱を起こすに違いない、早く処分してしまわないと危険だと思えるようになりました。自分の死が近いことはイエスも感じていましたが、彼は少しも恐れませんでした。西暦

30年、彼の生涯の最後となった年の4月の過越祭にも12人の使徒を引き連れてエルサレムに乗り込んで、住民から「ホザナ、ホザナ（ばんざいの意）ダビデの子」、「ホザナ、ホザナ、ユダヤの王」と熱狂的な歓迎を受けました。その場でイエスはパリサイ派を徹底的に批判する演説を神殿内で行いました。

その晩12人の使徒と開いた過越祭を祝うための晩餐会が「最後の晩餐」としてレオナルド・ダ・ヴィンチの有名な絵となっています。イエスはその晩ユダの裏切りによって捕らえられたことになっていますが、遅かれ早かれ逮捕は時間の問題だったでしょう。

ローマの植民地だったユダヤには、人を死刑にする権限は与えられていなかったもので、ローマから派遣されている総督ピラトのもとに手荒く引き立てられて行きました。パリサイ派の人々は口々にイエスに対する恨み、^{つら}辛みを訴えました。

「この男は自分のことを神の子だ、キリストだ、ユダヤの王だと言って居ります。このまま放任しておけば、いずれ貧民を率いてローマに謀反を起こしかねません。どうか総督の手で死刑にして下さい。」

しばらく黙って彼等の訴えを聞いていたピラト総督は、イエスに向かって「お前は確かにユダヤ人の王なのか」と尋ねると、イエスは「そうです。しかし私の求める王国はこの世にあるものではなく、人々の心の中にあるものです。」とただ一言答えただけで、その後は何を問われても沈黙を通しました。ムチで打たれても足蹴にされても巖のように毅然としているので、ピラト総督にはこの若者が死刑にしなければならない悪人にはどうしても見えませんでした。そこで「わしにはこの男に罪があるようには思えない。この辺で許してやろうではないか」と提案しました。

それに対し、イエスを引き立ててきた祭司やパリサイ派の人々は承服せず、ワイワイ騒ぎ立てるので、やむを得ず死刑にすることにしました。

こうしてイエスは33歳の若さでゴルゴダの丘まで自ら十字架を担ぎ上げ、

その上で無残な死を遂げることになります。聖書ではイエスは十字架にかけられて3日後生前の預言通り復活し、40日間弟子達を教え導いた後天に昇ったと伝えられますが、これはあり得ないでしょう。ただ彼の愛の教えは弟子達に受け継がれ、次第に人々の心の内に染み込んでいったことは事実です。

私はイエスが「神の子」（キリスト）を意識して弟子の指導に当たり、自ら布教に当たったのは現在の大学の4年にも満たない3年前後だったことをむしろ奇跡だと思います。その教えが、世界特に西欧の歴史に多大な影響を与え、教養のある人々は殆ど大学で神学を学んでいること、今でもクリスチャンの日常生活の倫理面にまで入り込んでいることに驚かされます。

(注)この紹介文は主にさ・え・ら書房の「文化の出発点となった人々」(志村武)によっています。

三大宗教の一つイスラム教の教祖マホメット

少年時代

紀元570年マホメットはアラビア半島の西南部にあるメッカ市に生まれました。日本では聖徳太子の誕生とほぼ同じ頃です。

当時のメッカは、東ローマ帝国とペルシャの戦争で他の交通路が途絶えたために蜂の巣をつついたみたいな賑わいで、商売を巡って部族間の争いが絶えませんでした。彼等の間にはそれを平和に治める政府も法律もありませんでした。

ただしその中で唯一、全てのアラビア人から崇拝されている場所がありました。それはメッカ市の中央部にある「カーバ神殿」です。伝説によると「カーバ神殿」はアラビア人の祖先アブラハムの子イシメイルによって造られたものであると言われていて、神殿を管理する一族はアラビア人の中で最も尊敬され

ていました。

マホメットは、神殿の管理者の家イシメイルの子孫であるハーシム家に生まれました。良い家系に生まれたのですが、生まれた時には既に父はこの世の人でなく、母親の手によって育てられました。しかしその母親もマホメットが6歳の時に亡くなってしまい、彼はアブー・ターリブというおじさんの家に引き取られることになりました。

言うまでもなく10歳に満たない孤児のマホメットでは神殿の管理はできず、神殿の管理権は親戚の悪い人達に奪い取られ、数年前まではメッカ市で一番勢力のあったマホメットの家もすっかり落ちぶれてしまいました。おじさんは決して無慈悲な人ではありませんでしたが、お金持ちではなく、マホメットは羊を追ったり、馬やラクダの番人をしたりして朝から晩まで勉強をする時間も遊ぶ時間ありませんでした。

マホメットが13歳になった時、彼はおじさんのアブー・ターリブに連れられて、シリアに行く隊商に参加する機会が巡ってきました。この旅行は苦難の環境にはぐくまれて小さな芽を出したばかりのマホメットの信仰心を、急に大きく成長させるチャンスとなりました。

彼等が通るアラビア砂漠には一本の木も生えてなく、なだらかな砂丘がどこまでも続きます。そういう所でもラクダの乳を飲み、ラクダの肉を食べて暮らしている牧畜を生業とする少数民族がいました。彼等は気が荒く、隊商の荷物を奪うのも、人を殺すのも、生きるために平気でやっていました。

そんな人々にも信仰心はありました。枯木や石ころなどを神として拜んでいました。マホメットにはそんなものをいくら拜んでも何の価値もない、弱い人達を助けたり、悪いことをしないように導いてくれる神様がどこかにいる筈だと砂漠の旅の間中考えていました。そんな折、たまたま彼は1人のキリスト教の修道士に出会いました。その修道士は、眼には見えないけれど、マホメットの求めているような愛としての神様が実際に存在すると強力に主張しました。

マホメットはこの後もイエメン、エジプト、ペルシャなどを隊商の一員として巡り、キリスト教の修道士に植え付けられた考えを次第に膨らませていきました。

青年時代

マホメットが25歳になった時、ハディージャという大金持ちの未亡人に雇われて、隊商の指揮者となり、再びシリアに商売に行きました。マホメットはアミン（誠実という意味）とあだ名される位、正直で働き者で情深く、勇気もあったので、とうとうハディージャと結婚することになってしまいました。この時彼女は40歳でマホメットより15歳年上でした。彼は急に財産家になったので、すぐに救済組合を作り、貧しい人や身寄りのない人達を支援する事業を始めました。マホメットとハディージャの間には何人か子供も出来、平和な家庭生活が続きました。

この頃メッカで神殿を管理していた金持ちのクライシュ族に対し、貧しい人々の不満が次第に高まって来ていました。メッカ市の市政は権力を握っている一部の人達の都合の良いように振り回されており、貧しい人々は世の中を作り変えてくれる神様が現れることを心の底から待ちわびるようになりました。

マホメットはこれらの人々の不幸を見るにつけ、世の中の矛盾を深く感じました。そして彼は商売を全て妻のハディージャに任せて、自分はたった1人でメッカ市の郊外にあるヒラ山の洞穴に閉じこもり、神について考え、神について思いを巡らすようになりました。ところがある夜のこと、突然不思議な響きを持つ声がどこからともなく聞こえて来ました。彼が初めてこの声を聞いたのは、40歳の時でした。

「私はアッラー神の天使である。アッラー神は、宇宙の一切を支配する唯一の神であり、力と愛を備え、正義と慈悲を持つ、アッラー神こそはお前が求め

ている神に他ならぬ。そしてお前はアッラー神の預言者であり、使徒なのだ。これからはアッラー神がお前に何でも教えて下さる。お前はその教えを広く皆に伝えるが良い。」

マホメットは恐れおののき、大地にひれ伏したけれど、一瞬気が狂ったように洞穴から飛び出しました。しかし、地平線の彼方からも、星のきらめく夜空からも「お前こそアッラー神の預言者、お前こそアッラー神の使徒」と聞こえてくるのでした。

布教時代

マホメットは最初はアッラー神の言葉を信じられなかったし、その重責に押し潰されそうになって、そのことを妻やごく親しい友人にしか話していませんでしたが、3年後にはメッカのあちこちで辻説法を始めました。権力を握っているクライシュ族の人達を徹底的に批判すると同時に、アッラー神以外のものへの信仰の無意味さを説いて回りました。クライシュ族の人達は最初のうちは彼を気違い扱いしていましたが、信者が増えるに従って無視できなくなってきました。当時大きなオアシスを持つ砂漠の都市としてメッカと比肩できるのはメッカの北300km位の所にあるヤスレブ市（後のメジナ市）だけでした。マホメットが50歳位の時、ヤスレブ市から巡礼に来ていた人達から次のような話を聞きました。「ヤスレブ市では部族間の争いが激しく、それを利用するユダヤ人もいて、このままでは市の崩壊は免れない。是非マホメットのような強力な指導者に来てもらいアラビア人同士の争いを治めてもらいたい。」

マホメットもメッカでは色々な制約もあって、自由な布教活動は出来ないと考えていたので、この話に乗りました。彼に従ってヤスレブ市に行く信者は70人、まさに集団脱出劇となるのですが、両市の間には砂漠が広がっていて、全員が秘かに移住するという事は困難です。そこで一番目立つマホメットが

最後になり、小グループずつ移住し、いよいよマホメットの番になった時、不運にもクライシュ族にメッカ脱出の情報が漏れてしまいました。クライシュ族の権力者達は、「ヤスレブ市で信者を増やした後、メッカにマホメットが攻めてくるに違いない。彼を生かしておくわけにはいかない。」と、若い3人の刺客を彼の家に送り込みました。

ベッドにはマホメットが寝ていたので、3人の刺客は剣で一突きにしようとする、ムックリと起き上がったのはマホメットではなく弟子のアリーでした。彼は命を掛けてマホメットの身代わりをしていたのでした。結局アリーの気力に押され、3人の刺客は去りました。

一方マホメットは、追っ手が来るであろうヤスレブ市には向かわず、逆の南への道を取り、弟子のアブー・バクルが探しておいてくれたサウル山の洞穴と一緒に一時身を隠していました。そこにも追っ手は来ましたが、途中マホメット達が入った後に蜘蛛の巣が張り巡らされた箇所が出来たために、追っ手は人が入った形跡はないと判断して去りました。

マホメットは63歳で亡くなるまで50回以上も戦いをしています。それはアラビアの限られた地域ではありましたが、剣を布教のために利用するという事は、決してほめられるべき事ではないでしょう。

しかし、彼は無政府状態にあって貧しさにあえいでいた砂漠の民を統一し、一代で大イスラム教国の基礎を築きあげた事を考えると、それもやむを得なかったのかなとも思われます。

イスラム教はマホメットの死後驚くべき勢いでインドネシアなど世界中に広まっていき、1400年近く経た今日では4億人を超える信者の世界3大宗教の一つとされています。

ところでイスラム教の教典とされているコーランはマホメットの教えを信者達がまとめたものですが、特筆すべきことをいくつか抜き出してみましょう。

①メッカの方向に向かって1日3回（後の法律では1日5回）礼拝を行う。

- ②ラマダーンの月（9月）には1ヶ月の断食（日没から翌日の日の出までを除く）をすること。
- ③メッカのカーバ神殿へ巡礼に行くこと。
- ④豚肉を食べないこと。
- ⑤異教徒との戦い以外では殺人をしないこと。

(注)この紹介文はさ・え・ら書房「文化の出発点となった人々」(志村武)によっています。

仏教をベースとした政治を行った聖徳太子

少年時代

聖徳太子は574年に用明天皇を父とし、あなほべのはしひとのおうじよ穴穂部間人皇女を母として生まれました。母は妃になる前のある日不思議な夢を見ました。金色に輝く僧が枕元に立っているのです。

僧は「私は救世観音菩薩です。私はこの世の人々を救うためしばらくあなたのお腹をお借りしたい」と言ったかと思うと、一筋の光となって彼女の口の中に飛び込みました。このことを後に用明天皇に話すと、天皇は「あなたが産む子はきっと尊い聖人になるでしょう」と答えました。

1年後の1月元日、妃が宮殿の庭を散歩していてちょうどうまや厩（馬小屋）の前まで来ると、急に産気づいて玉のような男の子を産み落としました。その瞬間あたり一面金色の光が差し込み、空には美しい雲がたなびきました。この子はうまや厩の戸の前で生まれたのでうまやどのみこ厩戸皇子と名付けられました。この話にはキリストの処女懐妊に一脈通じるものがあるようです。

聖徳太子は大変頭が良く、同じ年頃の子を36人集め、1人ずつ思いついたことを勝手にしゃべらせ、全部終わってから聖徳太子が並んだ子の順に何をしゃ

べったかを正確に復唱してみせました。

こんな遊びが何回か繰り返されると、集められた子供達は何とか太子をへこましてやろうと、親から難しい言葉や言い回しを教えてもらってしゃべっていましたが、太子はたちどころに覚えて、すらすらと繰り返してみせました。

これはほんの一例で、太子の人並みはずれた賢さに両親はもとより、当時おおおみ大臣として政治の実権を握っていた蘇我馬子うまこ（男性）も「もしかしたら厩戸皇子こそ、新しいまつりごと（政治）を始められる方になるかも知れん」と秘かに思い、太子の成長を楽しみにしていました。

私は蘇我氏は、横暴を極める地方豪族の1人くらいに思っていたのですが、実は馬子は太子の母の伯父に当たり、一族からきんめい欽明天皇、用明天皇、推古天皇、すしゆん崇峻天皇を生み出した名門で、孫の蘇我入鹿いるか なかのおおえのおうじが中大兄皇子に滅ぼされましたが、馬子の時代は、聖徳太子と協力して天皇中心の政治を行っていたのです。

推古天皇の摂政時代

蘇我馬子は仏教導入賛成派でもう1人の豪族物部守屋もののべのもりやは反対で2人は激しく対立しており、ついには2人は戦争状態に入りました。その時には太子は14才で既に用明天皇は病死し、日本初の女性天皇、推古天皇が即位しており、太子はせつしょう摂政となって馬子の味方となって戦いました。激戦の後、物部氏を滅ぼし、各地（大阪に四天王寺、斑鳩いかるがに法隆寺等）に寺院こんりゆうを建立して仏教の布教に努めました。後に仏教を解説するための書物あらかも著しています。

太子が30才の時には馬子と共に朝廷に仕える人達の位を12段階の冠の色によって表す冠位12階の制度を制定しました。これはなるべく家柄にかかわりなく、能力や功勞によって上の冠位に昇進できる仕組みをつくることを目的としていました。一番上が紫で、それが大徳と小徳の2つに分かれていました。続いて青、赤、黄、白、黒となります。日本で紫が一番高貴な色とされるよう

になったのはこの時以来です。

その翌年、太子はいろいろな人達の意見を聞いて17条の憲法を制定しました。これは現在の憲法とは異なり、朝廷に仕える役人や豪族達の守るべき心構えや道徳を仏教や儒教の思想に基づいて簡潔に17条にまとめて説いたものです。一部を現代語に訳して以下に示します。

十七条の憲法（一部、現代語訳）

- 1.和をとうとんで人にさからうことがないようにころがけよ。
- 2.あつく^{さんぼう}三宝をうやまえ。三宝とは、^{ほとけ}仏と^{ほうきょうてん}法（^{そう}経典）と僧のこことである。
- 3.天皇の命令を受けたら、かならずしたがえ。天皇は天であり、臣下は地のよ
うなものである。
- 4.役人は礼を基本とせよ。^{たみ}民をおさめる基本は礼である。
- 6.悪をこらしめ、^{ぜん}善をすすめるのは昔からのよいしきたりである。
- 8.役人たちは朝早く出勤し、夕方は、遅く退出せよ。
- 9.^{しんまこと}信（誠）は、人の道の根本である。何ごとも信をもってせよ。
- 12.役人は民からかってに^{ぜい}税をとりたててはならない。民の^{くんしゅ}君主は天皇だけである。
- 17.重大な問題はひとりで決めてはならない。かならず、多くの人と話しあっ
てから決めよ。

法隆寺完成後の聖徳太子と蘇我一族との関係

物部一族を滅ぼし、敵のいなくなった蘇我一族は次第に横暴になっていき、天皇の後継ぎ問題にくちばしを入れるだけでなく暗殺までするようになっていきました。^{すしゆん}崇峻天皇は馬子に暗殺されたのです。

以下は私の推論ですが、聖徳太子は現代の政教分離（政治と宗教の分離）の

はしりをやってのけました。つまり、どろどろした政治の中心地飛鳥は推古天皇と蘇我一族に任せ、自分は法隆寺の近くに斑鳩宮を造り、そこを拠点に将来の日本国の在るべき姿を構想することにしたのです。勿論会議の際には愛馬にまたがり片道4時間半かけて通勤しました。

その頃の太子の一番の関心は、より進んだ国の政治の仕組みや制度、さらに仏教の教義などで、小野妹子（男性）を中心とする遣隋使を随が滅びるまで4回にわたって派遣しました。彼等が帰国すると、それらの情報を基に太子は日本国の長期構想を練り上げていました。遣隋使に持たせた国書に太子が「日出する国の天子から、日沈む国の天子へ」という対等の国以上の書き出しをしたことで、随の皇帝を怒らせた話は有名です。

聖徳太子は49才で亡くなったため、太子の構想が実現することはありませんでしたが、太子の死後、天智天皇による「大化の改新」の中に取り込まれたものと思われます。

(注)この紹介文は主として「聖徳太子と仏教伝来」(フレーベル館)によっています。

インドや日本を目指しアメリカ大陸を発見したコロンブス

弟との密約

コロンブスは1446年に、イタリアのジェノバで毛織屋の両親のもとに生まれました。しかし彼は家を継ぐのが嫌でたまりませんでした。おじさんが船長をしている船がジェノバに荷物を降ろす時、コロンブスは父に連れられてその船を見に行きました。あまり熱心にコロンブスが船員たちに船の色々なことについて質問するので、おじさんが「この船に乗ってみるか」と聞くとコロンブ

スは大喜びしてそのことを母に話すと、母は心配して猛反対でした。そして今回1回だけならという条件付きでやっと許可が出ました。コロンブス14歳の時でした。このようにして1回目の航海は無事終わりましたが、コロンブスの海への関心はますます高まりました。

コロンブスには弟がいましたが、弟も毛織屋の仕事が嫌いで、世界地図を作って売るお店を開きたがっていました。そこで2人の間に密約ができました。昼間は毛織屋の仕事を手伝い、夜はそれぞれの勉強をして、将来はそれを実現して協力し合おうというものです。つまり、弟の最新の地図を使って航海に出て、新しい陸地を発見したらまずその情報を弟に提供するというものです。

そのようにして三方良しの状況がしばらく続いたのですが、コロンブスが19歳の時、母が病気で亡くなってしまいました。それで心配を掛ける人がいなくなって、兄弟2人の計画が早まりました。弟は地図の注文の多かったポルトガルのリスボンで地図屋を開き、コロンブスはおじさんの船で航海に出て、やがて1つの船の船長を任されるようになりました。コロンブスはフェリッパという美しい女の人と結婚し、ディエゴという男の子まで生まれました。そして弟の世話でポルトガルの船長にもなりました。

しかしコロンブスは調べ物ばかりしていて、さっぱり船出しようとしません。これでは生活が成り立たないと、弟が注意すると「インドに行く海路を探している」と言います。弟が「ポルトガルからも50年も前からアフリカ経由でインドに行こうとした船が沢山あるけれど、皆失敗している。やめた方が良い」と言うと、コロンブスは「地球は丸いんだ、自分は西へ西へと行った方がインドはずっと近いということがやっと分かったんだ。あとは船を出してくれる支援者を探すだけだ。」と言いました。さすがに地図屋の弟は、兄の言っている意味が分かり、スポンサー探しに協力してくれることになりました。

しかしポルトガルではいくら待ってもスポンサーは現れず、不幸にも妻のフェリッパは病気で亡くなってしまい、コロンブスは男手一つでディエゴを育

てることになってしまいます。悪いことは重なるもので、ポルトガルの役人がコロンブスに内緒でインドへの探検船を出して嵐に会い、逃げ帰った責任をコロンブスに負わせようと、大事な地図をコロンブスが盗んだと警察に訴えたのです。

大航海出発まで

コロンブスはポルトガルに居てはだめだとスペインの首都バリャドリッドに逃れました。そこで彼はイサベラ女王に会い計画を話すと、大変興味を持ち、サラマンカ大学の学者達に研究させようということになりました。コロンブスはその大学に呼ばれ、色々質問を受けました。当時は学者といってもキリスト教の坊さんばかりで、聖書の解釈に明け暮れていました。集まった30人程の学者が次々に質問します。「神が地球を丸く作ったとどこに書いてあるのか」、「地球が丸いとしたら、地球の裏側では人間は逆さまに歩いているのか」、「地球の裏側がどうなっているのか分からないようでは、とても地球は丸いという前提でインド探検船を出すわけにはいかない」と言って、全面的にコロンブスの主張を退けてしまいました。

コロンブスは困りましたが、次のような3つの質問を返し、それに答えてくれたら自分も答えると応じました。

- ①沖に出て行く船は、まず船体が、次いで帆やマストが見えなくなるのは何故か。
- ②もし地球が平らなら、その先はどうなっているのか。
- ③夕方西の空に沈んだ太陽が、次の日の朝また東から昇ってくるのは何故か。

これら3つの質問に答えられる学者は1人もいませんでした。

コロンブスは、学者達をやりこめてしまったことを悔いて力なく息子と長逗留させてもらっている修道院に戻りました。

それから6年経ってやっとイサベラ女王からもう一度会いたいという手紙が来ました。コロンブスが女王と国王の前に出て説明しようとする、6年前にサラマンカ大学でコロンブスを尋問した学者の1人が総理大臣になっていて、「コロンブスは既に不合格になっている」と言って邪魔をしましたが、イサベラ女王の助けもあって、国王に説明することが許されました。その中でコロンブスはマルコポーロの「東方見聞録」（陸路で中国まで行っている）の知見まで交えて中国や日本を魅力たっぷりに説明しました。特に日本は当時黄金の国と思われていました。

やっと航海の許可が下りたのですが、また総理大臣が口を挟み、「グラナダ（イスラム教徒の支配するスペイン国内の地域）との戦争が終わったばかりで、国にお金がない」と主張しました。すると女王が、それでは私が出しましょうと言って、沢山宝石を持ってこさせ、身につけている指輪まで外して差し出し、「これで3隻の船を買えるでしょう」と言いました。

大航海の実際

これでお金の面では出航の準備は整ったのですが、スペインのパロスの港では、誰もそのために船を出そうとしないし、一緒に乗り込もうとする人も現れません。コロンブス親子のお世話をしている修道院長が見かねて船長候補としてピンソン兄弟を紹介してくれました。コロンブスは直ぐにピンソン兄弟に会って意気投合し、小さい方の船を兄弟にそれぞれ船長を任せ、乗組員を集めさせました。そうしてたちまち出航の準備が整い、1492年（コロンブス46歳）にやっと初探検に乗り出しました。一番大きなサンタ・マリア号には司令官としてコロンブスが乗り込みましたが、これでもせいぜい2～3百トンの帆船で、あとの2隻は百トン足らずで、今ではそれらで大西洋を横断するという事は想像もできない位危険なことでした。

コロンブスの時代は、地球はもっと小さくて、大西洋の西の果てには日本（ジパング）や中国があると考えていました。つまりアメリカ大陸の先に太平洋があることすら知りませんでした。しかもいくら西へ行っても海と空ばかりで、陸地は全く見えません。当時の最新の地図でも、もう日本が見えても良い頃で、さすがにコロンブスも不安になってきました。ましてや迷信を信じている船員達の恐怖には想像を超えるものがありました。

ついに反乱が企画されました。コロンブスを海に突き落とし、自分達だけでスペインに帰ろうというもの。それを聞きつけたコロンブスは自ら皆の前に出て、「私は自分の命は惜しまない。この大洋の先には必ず宝の島ジパングがあり、その先には中国、インドがある。それを発見することが国王、女王との約束だ。それを果たすまでは自ら引き返すわけにはいかないのだ。とにかく後3日命をくれ、その間に陸地が見えなかったら、私の命を差し出す。」と行ってやっと船員達を散会させました。

その後むなしく2日過ぎ、3日目も夜10時頃になりました。その時真っ暗な前方に明らかに火の光がちらちらと幾つか見えました。これらは陸地があり、人が住んでいる証拠です。翌日夜が明けるとたわわに果物が実る緑の島が見えました。コロンブスはスペインの国旗を浜辺に立て、その島をサン・サルバドル（キリストの島）と名付けました。出航して実に70日、彼が地球は丸いと信じて西回りで東洋を目指して探検航海を企画して10年が経っていました。

コロンブスはこれらの島々はインドの近くにあるのだと思って、原住民達をインディアンと呼びました。今でもアメリカの原住民をインディアンと呼んでいるのはそのためです。先住民達は、赤黒い身体に白や赤で模様を描き、一見もの凄く恐く見えるのですが気は優しく、コロンブス一行に沢山食べ物を提供してくれました。

船員のうちには、スペインに戻りたくないという人もいたので、39人を島に残してコロンブスは一旦女王と国王に報告するためスペインに戻りました。

パロスの港に帰ったのは出航して240日後でした。

帰国後

「コロンブスが新しい陸地を発見して戻ってきたぞー」という知らせに国中が沸き返りました。寺院は喜びの鐘を鳴らし、人々は窓から花を投げ道に出て旗を振ってコロンブス一行を歓迎しました。

コロンブスは原住民6人を先頭にし、原住民に酋長からもらった冠や色とりどりのオウム、そしてきらびやかに着飾った自分と船員達を最後に首都バリャドリドまで行進していきました。

コロンブスは王様と女王様に発見した新しい土地の様子などを詳しく説明してから、「今度の発見は、これから行う大発見のほんの手始めに過ぎません。どうか第2、第3の探検隊をお出し下さい。きっと成功して王様の領土を広め、富を増やし、神様のお恵みを世界にもたらずでしょう。」と申し上げました。王様は大層喜んで、コロンブスを貴族に取り立て、新しい土地の総督に任命しました。

昔からの貴族は焼きもちを焼いて色々陰口をきくようになりました。

ある時大勢の貴族の集まる宴会で、ある貴族が「コロンブス君、君は新しい陸地を発見したと言って得意になっているが、西へ西へと行きさえすれば、誰でも発見できるのではないか」と絡んできました。するとコロンブスは笑いながら「あなたはこの卵を縦にして立てることができますか？」と答えました。他の貴族も面白がってやってみましたが、誰も出来ません。

コロンブスは真面目な顔で、「それはこうするんです。」と言って、卵の端を机でコツンとつぶして卵を立てました。さっきの貴族が、「そんなことなら誰でも出来るではないか」とくっつかかりました。コロンブスは「そうです。私が最初にやったから後は誰でも出来るのです。」と答えました。

この逸話は発明、発見の重要性を見事に物語っているといえるでしょう。

コロンブスはその後3回、計4回にわたってバハマ諸島に行っていますが、それらは最初の大航海ほど世の中にインパクトのあるものではありませんでした。特に4度目に航海は失敗に終わり、一文無しになってしまった上に長年の海での過労のため、足、腰をひどく痛めてしまいました。

コロンブスは貧乏と病気に苦しめられながら60歳で淋しくこの世を去りました。しかしコロンブスが行った探検によって発見された現在のバハマ諸島は、北アメリカと南アメリカの東海岸に位置しており、実際にはアメリカ大陸の発見だったといっても過言ではないでしょう。

(注)この紹介文は児童伝記シリーズ19「コロンブス」(沢田謙)によっています。

偏屈な天才 ミケランジェロ

ルネッサンスの3大巨匠が生きた年代は、レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452年～1519年)、ミケランジェロ(1475年～1564年)、ラファエロ(1483年～1520年)でした。今回は若い頃、波乱に富んだ人生を送ったミケランジェロを取り上げます。

ミケランジェロは、フィレンツェ共和国の代官の次男として生まれましたが、母は体が弱く乳が足りなかったため、石切場の^{いしく}石工の所に里子として出されました。彼が6才の時、母は没しています。

修行時代

6人兄弟の次男として生まれた彼は7才から小学校に行きましたが、読み書きや算数には全く興味がなく、彫刻や絵画に惹かれました。

昔風で画家や彫刻家を一段低くみていた気位ばかり高く、頑固な父は、ミケランジェロが自分で絵を描いたり、粘土細工をしていると知れば、ただでは済まないことを知っていた彼は、内緒でやっていましたが、彼が優れた能力を持っているということは、友達の間では有名でした。

彼の良き理解者は、数年先輩のフランシスコ・グラナッチでした。彼はイタリアでも1~2位を争う大工房を経営する画家ドメニコ・ギルランダイヨに弟子入りしていたので、師匠にうまく取り入ってお手本や画材をミケランジェロに提供してくれました。その上彼を自分の師匠に紹介してくれました。

ミケランジェロがどのように父を説得したかは分かりませんが、父以上に頑固な彼が押し勝ったのでしょう。彼は弟子ということではなく、助手としてドメニコ・ギルランダイヨの工房に入り、多少の給料を貰って家計を助ける道を選びました。

1年後の14才の時、王ロレンツォ（フィレンツェを拠点）が、メディチ家の再興をはかるためには、優れた彫刻家を養成する必要があるとあって、ベルトルドを所長とする彫刻塾をつくりました。そしてミケランジェロはその助手に工房主（ドメニコ・ギルランダイヨ）から推薦されました。彼は現在の工房からは既に学ぶものはなく、もっと血の通った人間や動物を表現したかったので、すぐに彫刻塾に入ることをOKしました。

その頃、イギリスから勉強に来ていた先輩に、彫像の模写の邪魔をしたという理由で顔面を思い切り殴られたのが原因となって、鼻骨をつぶされてしまいます。当時の医学では元に戻らず、ミケランジェロは長い間、精神的にも肉体的にもつぶれた鼻に悩むことになります。そのせいもあってミケランジェロは生涯おしゃれはせず、風采ふうさいの上がらない人物で通しました。15才からは国王の自宅に住まい、庭園等に飾ってある古代彫刻からも彫刻の勉強をすることになります。

その後ミケランジェロは、43才で波乱に富んだ人生を閉じたロレンツォ王

の死によって後ろ盾を失い、いったん実家に戻っていましたが、その間にサン
ト・スピリト修道院長の好意で秘かにその付属病院で死体を解剖^{かいぼう}する許可が与
えられました。ギリシャ時代以来途絶えていた人体の解剖に参加できたという
ことは、彼のその後の作品に大きな影響を与えることになります。

(注・レオナルドもほぼ同時期に人体の解剖を行い、記録を残して医学の進
歩にも貢献しています。)

ダビデの像

ミケランジェロの代表的な彫刻といえば、何ととっても26才の時受注したあの巨大なダビデの像でしょう。ダビデは旧約聖書にある英雄で、宿敵フィリス人の豪傑ゴリアテをわずか1個の石を投げて打ち倒した羊飼いの青年です。共和制の象徴として特にルネッサンス後のフィレンツェでは絵や彫刻でダビデは多く題材とされましたが、それらは戦いに勝って既に全身の力を抜いたダビデ像ばかりでした。ミケランジェロは、これから戦いに向かう力のみなぎったダビデ像こそフィレンツェ市民にふさわしいと考えて制作しました。私達がフィレンツェに行った時に見たのは、市庁舎の入り口にある同じ大きさの模像で、本物は風化されないようにどこか室内に飾ってあるとのことでした。

レオナルド・ダ・ヴィンチとの対決

一方、レオナルド・ダ・ヴィンチはミケランジェロよりも23才年上であり、2人の直接の接触はあまりないのですが、少なくとも1回ダビデ完成の後、市政府が久方振りに帰郷したレオナルドに、市会議室の片側の壁画装飾を1万フィオーリーノで依頼しました。レオナルドはフィレンツェ軍がミラノ軍を破った「アンギアリの戦い」を描くことにし、構図を練り始めました。

一方ミケランジェロには、半年おくれてもう一方の壁画装飾を3千フィオーリーノで依頼されましたので、ミケランジェロがあまりの価格の差に憤りを覚えたのは確かで、対抗して同じく戦場場面を選び、アルノ川で水浴中のフィレンツェの兵士達が敵に急襲され裸で武器を取る「カッシーナの戦い」を描くことにし、異常な早さで下図まで描き上げてしまいました。

既に「最後の晩餐」を描き上げ、多くの美人画も手掛けているレオナルドは、イタリア内外で有名になっており、価格差があるのは当然といえば当然だったのですが、人一倍負けん気の強いミケランジェロには許せなかったのでしょうか。当時発明に夢中になり、色々な実験をのんびりやっていたレオナルドに相当のプレッシャーが掛かったことは確かです。彼等がそりが合わなかったのには、レオナルドの方に彫刻家に対する一種の偏見があったことも原因していると思われます。ここにレオナルドの文を紹介します。

「絵画と彫刻との間に見出されるちがいは、彫刻家が画家よりもいっそう大きな肉体労働によって制作するのに対して、画家はその作品をよりいっそう大きな精神労働によって制作するという点にすぎない。思うに、彫刻家はその作品の制作に当たって、石塊の奥にひそむ人物に付着したよけいな大理石その他の石を削り取るのに、それはきわめて手工的な作業をとめない、腕力しょうげまりよくと衝撃力を用いるが、しばしばほこりとまじって泥となった大汗をかき、顔はべとべとなり、石の粉にまみれてパン焼き職人のようで、しかも身体はのりづけしたように細かなきらきらした破片でおおわれ、住居も石の破片や粉でいっぱい汚れているからである。それに反して、画家は作品の前にのうのうと座りこみ、立派な身なりをし、美しい色をつけた軽い刷毛をふるう。彼は思うままに盛装できるし、家は清潔であり、美しい絵でいっぱいである。彼はしばしば音楽を伴奏させながら、または多くのすぐれた本を朗読させながら制作する。以上のすべてに槌やその他の騒音に悩まされることなく、耳を傾けることができるのである。」

彼の傑作《モナ・リザ》の微笑みをたやさせないように、レオナルドが音楽を奏させたという逸話は、こうした彼の絵画についての考え方をよく反映しています。

ミケランジェロが、冷静な哲学者のように泰然として人を見くだす彼の態度に我慢できなかったのも推量できます。

どういう理由か分からないけれど、二人の壁画は共に完成せずに終わってしまいました。しかし、二人の描いた下絵についてはフランドルのルーベンスなどが模写に来ているところからしても、壁画として完成していれば、大変な名画としてフィレンツェの名所となっていたであろうと思います。

システィーナ礼拝堂の天井画

ミケランジェロが30才の頃から、ローマ教皇の後援を受けることとなります。ローマ教皇として独裁的権力をふるったユリウス2世にシスティーナ礼拝堂の天井画を依頼されたミケランジェロは、約束が違うと行ってローマを去るほどの強情者でした。

結局は間に立つ者があって仲直りし、システィーナ礼拝堂の天井画を受注することになります。しかし彼の内心は、建築顧問のブラマンテと絵画顧問のラファエロがミケランジェロに失敗させてミケランジェロをローマから追放しようと企んだと本気で思っていたのですが、結局はそのような事実はなかったところを見ると、彼には相当被害妄想じみたところがあったといえるでしょう。

システィーナ礼拝堂の天井画制作に当たってはフィレンツェから5人の助手を募集して手伝わせましたが、何事も自分の思うとおりにいかないと気が済まない彼に、皆裏切られた気持ちになり、5人共フィレンツェに戻ってしまいました。そして彼は助手たちが制作した部分を全て取り壊し、1人で制作する羽目になってしまいました。

教皇が天井画の出来映えを見に来た時、その出来映えに感心し、「何時完成するのか」とたずねると、ミケランジェロは「自分が満足できる時」と答えました。それを聞いた教皇は怒り、「下がれ、身の程を知れ」といって教皇杖でミケランジェロをたたきました。ミケランジェロはその屈辱感に耐えかねて直ちにローマを去る支度を始めました。その時、激しく扉をノックする音がして教皇の使いがやって来て、「教皇は後悔している。制作を続けるように。」といい、謝金を手渡しました。やっと機嫌を直したミケランジェロに使者が「本当のところ、何時完成するのかと教皇が仰せられておりますが。」と問うと、彼は「私の答えは一つです。私が満足する時です。」と答えました。この頑固で偏屈な男2人はお互いにぶつかりながらも、内心では尊敬しあっていたのです。

ところで、完成間近のシスティーナ礼拝堂の天井画を見てラファエロはその出来映えに感服し、当時同じ法王庁内で自ら制作していた「アテナイの学堂」の中にヘラクレイトスとしてミケランジェロを描き込みました。これは巨匠への敬意の表れでした。

そろそろ筆を置こうという時、天井画を教皇に見てもらおうと、「全体に地味なのでもっと金を使うように」と指示されますが、彼はそれを拒否し、「彼等は決して金持ちではなく、金持ちを卑しい人とみる神聖な人達です。」と反発しました。彼の絵はまるで大理石の彫刻のようで、女性像も男性をモデルとしたものでした。最初の公開日、人々は天井画を見てその大ロマンのすさまじい気迫と情熱にすっかり圧倒されてしまいました。

私はスイスにあるヨーロッパ最大のシンクタンクに勉強に行っている間に1度システィーナ礼拝堂を見ているのですが、家内と一緒にいった時は修学旅行生などで一杯で鑑賞を諦めました。数年前徳島に行った時、鳴門にある大塚美術館にシスティーナ礼拝堂の写真を焼き付けた陶器を貼って一部がそっくり再現されていると聞いて行ってみると、模造品ではあるけれど、雰囲気はそのま

ま出ていて見事なものでした。

ミケランジェロは、この天井画によってローマだけでなく、キリスト教世界全体で有名になりました。一方で長年天井ばかり見ていたので視力を悪くし、フィレンツェに帰っても数ヶ月の間デッサン一枚すら書くことができませんでした。

彼は36才のシスティーナ礼拝堂の除幕式後89才まで生きましたが、大きな話題となるような大作は制作していません。

どんな天才でも人生を掛けたような大勝負は一生のうちそう何回もあるものではないのかも知れません。それも人との巡り会い次第です。

彼は生涯独身で通したようです。

(注)この紹介文は世界伝記文庫「ミケランジェロ」(中森義宗)によっています。

宗教裁判で幽閉されたガリレオ

少年時代・大学時代

1564年、ガリレオ・ガリレイはイタリアのピサ近郊で生まれました。ガリレオのお父さんは、現在のギターの先祖に当たるリュートの奏者で、それほど裕福ではないけれど、地元では一応名士でした。リュートは当時大変人気のある楽器で、お父さんは幼いガリレオにもリュートを教え、彼も生涯それを趣味としました。

父は音楽教師もやっていて、リュートの弦の振動について研究をしていましたが、ガリレオはその手伝いをしているうちに科学の実験への興味が湧いてきました。ガリレオが10才の時、一家はフィレンツェへ引っ越しました。そこでガリレオは修道士になりたいと思い修道院に入って勉強しましたが、父は

もっと収入の良い医者になることを期待していました。

ガリレオは17才になると、父の要望を入れて幼い頃過ごしたピサの大学で医学の勉強をすることになります。ところがガリレオが一番興味を持ったのは医学ではなく、幾何学を中心とする数学でした。当時のピサ大学の数学の教師は、トスカーナ大公付きの数学の首席数学者で、ガリレオの父に「医学よりも数学を専攻させた方が良い」と奨めてくれましたが、父は首を縦に振りませんでした。

それにも拘わらず、ガリレオは医学の学位も取らずにピサ大学を辞めてしまいました。ガリレオに当時ついたあだ名は「やかまし屋」で、何かにつけて議論をふきかけ反論したものです。この性格は一生変わりませんでした。

ガリレオの絶頂期

ガリレオは数学の個人教授などのアルバイトなどで稼いでは、数学の勉強を続け、合わせて物理の実験を行い、いくつかの重要な発見をしました。

22才で振り子の等時性についてまとめた「小天秤」を、26才で物体の運動と落下についてまとめた「運動について」を書物にしました。こうしてガリレオは数学者、物理学者として徐々に世に認められていきました。そしてピサ大学やパドバ大学の数学教授の口が得られたのでマリナ・ガンバと結婚し、3人の子供をつくりました。

実はガリレオが生まれる21年前にポーランドの天文学者コペルニクスが、宇宙に関するアリストテレスの理論（キリスト教の神学者が支持する理論）が間違っているという内容の書物を発表しており、これを巡って後の科学者の運命が大きく左右されたことを早めに記しておいた方が良いでしょう。

ガリレオが33才の時、ドイツの科学者ケプラーが、「宇宙の神秘」を出版して、宇宙に関するコペルニクスの理論を支持した時には無事でしたが、イタ

リアの哲学者ブルーノが3年後にコペルニクスの理論を支持した時には、宗教裁判にかけられ火あぶりの刑に処せられてしまいました。これには発表の場がカソリックかプロテスタントかということも関係していると思いますが、自身が敬虔なカソリック信者であったガリレオも自説の発表には十分気をつけなければならないと肝に銘じたのでした。

1608年、オランダのメガネ職人リッペルハイが2枚のレンズを組み合わせて望遠鏡を発明すると、ガリレオは直ちにそれを改良し、数十倍も拡大率の大きな望遠鏡を作り上げ、天体観測を開始しました。

その後ガリレオは、「太陽黒点現象に関する歴史と証拠」、「偽金鑑識官」、「天文対話」などを発表し、自身が教会の宇宙に関する考え方に反対である立場を明らかにしていきました。

宗教裁判

ガリレオが教皇によってローマの宗教裁判所に呼びつけられたのは、彼が68才の時すでに病床に伏していました。教皇はガリレオと比較的親しかったのですが、ガリレオを憎む側近達からあることないことをささやかれ、教皇が馬鹿にされているといわれるとさすがに教皇も怒り心頭に発し、フィレンツェからローマへ引き立てて来いと命令しました。ガリレオの友人達が教皇をとりなしたのですが頑として耳を貸しません。教皇はプロテスタントを相手に後に30年戦争といわれる宗教戦争の最中にあり、何としても断固とした姿勢を示す必要があったのです。

ガリレオは2週間馬車に引かれ寝たままローマに行き、2ヶ月半にも及ぶ審問の結果、異端であるということになり、終身刑と全ての出版物の発禁ということになりました。彼は法廷で「それでも地球は動く」と叫んだといわれています。

彼はしばらくして自宅監禁ということになり、秘かに再び執筆活動に取り掛かりましたが、伝染性の眼病にかかり、既に視力は殆どなくなっていたので、若い助手に口述筆記してもらったものですが、74才の時「新科学対話」と題してオランダのライデンで出版しました。

1642年、ガリレオは77才で永眠しました。死ぬまですさまじいばかりの科学者魂を持ち続けたのにはまさに脱帽です。

(注)本紹介文は主として「ガリレオ」(B L出版)によっています。

幻の人 平賀源内

平賀源内については、中学校か高校の歴史で一度は耳にしたことはあっても正確に覚えている人は殆どいないでしょう。私もそのたぐいで、「日本で初めて電気(エレキテル)の実験に成功した天才である」位しか知りませんでした。

先日、千葉で一番安くて親切な介護タクシーを紹介されて、私は一人で、あるいは家内も一緒に近場の一泊旅行を楽しみました。その時、私はつい調子に乗って私の祖先は平賀源内までは辿れると自慢してしまいました。彼は本気にしたのでしょうか。家に帰ってパソコンで調べたら、源内は結婚していないということが分かり、「源内の子孫というのはどういうことなんだろうね」と家内に遠慮がちに尋ねたそうです。私は真面目な人には特に嘘をついてはいけないと反省させられました。

私は人間トータルとしての生き様こそ最高の芸術品と考えるようになっていたので、図書館で何気なく「世界伝記文庫」を見ていたら、1. 二宮尊徳2. 福沢諭吉に続いて3番目に平賀源内が出ているではありませんか。この事実だけで、平賀源内が日本の子供達に如何に人気があるかが分かりましたので、早速借りてきて、ここに紹介文を書いている次第です。

彼は江戸時代中期の1729年に、四国香川県の志度町に生まれました。父は高松藩の御蔵番（米蔵）の足軽で、少ない給料でも忠実に仕事に励む人でした。

源内は、薬草の知識を見込まれて18才で藩の薬草係の足軽に登用されました。21才の時、若くして父を亡くし、父の仕事であった御蔵番も引き継ぎましたが、好奇心に燃えた源内は、狭い藩内に閉じこもった勉強には満足がいかず、自分を気に入ってくれている藩主に頼み込んで、長崎に遊学しますが、蘭学だけが頼りの長崎よりも、今や江戸が学問の中心であると知り、またも藩主に無理を聞いてもらい、江戸への留学を実現させます。

江戸幕府の信頼を得るため、幕府の正式の学校である昌平黉に入学しますが、その漢学は幕府に都合の良いように解釈する朱子学一辺倒で、ちっとも面白くなく、結局は籍だけ置いて、自分で好きな学者について自由に勉強するというスタイルをとらざるを得ませんでした。江戸で源内は田村藍水らんすいから本草学を、服部南郭なんかくから漢学を、加茂眞淵まぶちから国学を学びました。

彼が江戸で力を入れたのが、物産会（現在の万国博覧会の小規模なもの）で、最初の2回は田村藍水との協同でしたが、3回目以降第5回目までは源内自身が会主となりました。その成功のお陰で、彼の名は全国の商人や各藩の幹部に知れ渡り、薬草や貴重な鉱石の鑑定が彼のもとに舞い込むようになり、いつも研究費の不足に悩まされていた彼の家計を多少とも潤すことになりました。

彼を世界人名辞典で引いてみると、博物学者、戯作者、礦山開発者、農業開発者、油絵画家などとされています。

幕府などの政治を巧みに皮肉った彼の脚本が当たって陰の収入源となっていたようです。それにしても彼の多能振りにはまさに恐れ入ります。私などとても足元にも及びません。ただ、開発過程はうまいけれど、事業を軌道に乗せる段になるとどこにも頭を下げられない性格が災いして、うまくいかない点などは私も源内に似た部分があるかも知れません。

また、源内は少額の禄（給料）のために自由を縛られるのを何よりも嫌って

いました。親の代から世話になった高松藩も江戸留学中に藩主をお願いして脱藩させてもらいました。それには生涯他の藩や幕府に雇われないという条項がつきましたが、そのこと自体彼は一向気にしませんでした。彼はこれで自分の研究の成果を日本の全国民のため、世界の人類のために役立てることができると考えたからです。しかし、不幸にも彼が活着しているうちに沢山発明、発見、工夫がありましたが、そこまでいったものはありませんでした。

源内の最後は謎に包まれています。あの温厚な源内が部下の1人を切り殺し、獄中で一度も食事をとらず、餓死してしまったということです。51才、1777年のことです。私が想像するに、最大のライバルで親友だった杉田玄白等が彼等の名著「解体新書」を苦勞して翻訳、発表し、それを見せられた源内が、八方美人的にあちこち食い散らかして結局は何も残せなかった自分の生き様に幻滅し、精神的に破れかぶれになっていたのではないかと思います。

私にも10年位前、自分の生き様を思い起こして、悔いて酒に溺れたことがあります。

(注)この紹介文は世界伝記文庫3「平賀源内」(今井誉次郎)によっています。

自分の力を過信したナポレオン

少年時代

1769年にナポレオンは地中海のコルシカ島の貧乏小貴族の家に生まれました。当時コルシカ島はイタリアの都市国家ジェノアに所属していましたが、度々独立戦争を起こし、一度は勝って独自の自治政府を打ち立てました。ナポレオンの父は1分隊を率いる隊長でした。

財政難に苦しんでいたジェノアは、コルシカ島の自治政府に相談することな

く、コルシカ島を隣国フランスに売ってしまったので、今度は近代兵器で武装した大勢のフランス兵が攻め込んで来ました。コルシカ軍も頑張ったのですが、旧式兵器ではいかんともしがたく降伏し、フランスに占領されてしまいました。

そういう環境の中で育ったナポレオンは、あるとききれいな虹を掴もうとどこまでも追いかけて行き、崖から落ちてしまったり、小学校からの帰り、女の子と手をつないで歩いている所を数人の上級生にひやかされ、1人で立ち向かっていくという勇敢でどこまでも諦めず夢を追うというロマンチストでもありました。学校の勉強にも自発的に取り組み、特に数学が得意でした。

ナポレオンが10才になった時、父が兄弟を呼び、「これからは教育設備の整っているフランス本国で勉強した方が良い。おとなしいジョセフは僧侶になる学校へ、ナポレオンは軍人になる幼年学校へ入ってはどうか」と奨めました。2人とも直ちに了承しました。

幼年学校時代

ナポレオンは11才から15才まで幼年学校で過ごしました。お金の余裕がなかったため、その間一度も両親の元には戻っていません。幼年学校時代、彼は被征服民族で、フランス政府の補助金だけを頼りに留学してきた田舎者として扱われたので、いつも独りぼっちで、休み時間はアレキサンダーやシーザーなどの英雄伝を読みふけていました。

3年生の時には、学業優秀ということで級長に任じられました。そうなることあるごとにクラス全員に号令を掛けることになりますが、誰もコルシカ出の少年なんかに号令を掛けられたくありません。それで代表数人が級長を変えて欲しいと校長に直訴しました。困った校長は、ナポレオンを呼んで真のリーダーというものは…と懇々と諭しました。「国民を救う本物の司令官は、部下達があの司令官のためなら自分の命を投げ出しても良いと思えるような人間的

な魅力を備えた人物でなければならない。」

英雄伝を読んで既に自分なりに軍人の理想像を心に描いていたナポレオンは、校長の言いたいことが直ぐ分かり、それからはクラスのどんなグループの中にも自分から打ち解けて近づいて行くようになりました。その成果が最大限に発揮されたのは、クラス対抗の雪合戦の時でした。

ナポレオンは自分のクラスの司令官となり、綿密に戦略・戦術を練り、それをクラス全員に周知徹底し、予想される戦況に合わせて機動的に動けるように事前に訓練しました。雪合戦の当日です。無秩序に総力で攻め込んで来る敵に押されているように見えたナポレオン軍は自陣地におびき寄せ、敵を小グループに分断した上で大勢で取り囲み、十分にストックしておいた雪の弾を集中的に浴びせて降伏させ、ついに敵の全軍を降伏させてしまいました。

その後ナポレオンはクラス全員の尊敬を集め、名実共に級長としての役割を果たしました。そして15才の時、校長から「君は成績優秀だからパリにある士官学校への入学が許可された」と告げられました。

青年時代

士官学校は僅か1年で卒業となり、数学が得意だったナポレオンは自ら志願して砲兵隊に入隊し、中尉に任官しました。その年に父が病気で亡くなり、ナポレオンは母を見舞いに8年振りでコルシカ島に帰りました。母はナポレオンの後にも沢山子供を産みましたので、少ない地代収入で家計を賄うのは大変でした。ナポレオンは可能な限りの長期休暇を取り、母の手助けをしました。

彼が20才の時、兄のジョセフが大学を卒業して家に帰ってきたので、ナポレオンは後を兄に頼んで軍隊に戻りました。

その頃フランスはロベスピエールをリーダーとする人民革命軍による王制打倒の嵐が吹き荒れていました。ルイ16世とマリー・アントワネットは、国民

から苛酷な税金を搾り取りながら、その大半をヴェルサイユ宮殿を中心として連夜貴族を招いて豪華なパーティを開いて浪費していました。

ナポレオンは、王政を苦々しく思いながらも、革命軍を支援することなく、正規軍の司令官としてイタリアに遠征して見事勝利を収め、一足飛びに少将に昇官しました。

その間にフランス革命は成就し、主な王侯貴族は断頭台の藻くずと消え、ロベスピエールが中心となって民主的と称する恐怖政治（少しでも反対すると、ろくな裁判もせず断頭台に送られる）に移行していました。それに納得しない大勢の人民が国会議事堂に押しかけ、ロベスピエールを捕らえて逆にロベスピエールを断頭台に掛けてしまいました。

一方ナポレオンの出世を妬む人達が、ナポレオンはロベスピエール派だと密告したので、彼は捕らえられ投獄されてしまいます。このままではナポレオンも断頭台に送られると心配したイタリア遠征時の部下の1人が、脱獄の手筈を整え、こっそりと迎えに来ましたが、ナポレオンは堂々と裁判を受けて身の潔白を証明したいと言って、親切な申し出を丁重に断ってしまいます。そして間もなく彼は正式に裁判を受けて無罪となり、国内の治安回復に司令官として貢献しました。

フランスの国内政治の混乱が長引く中で、戦えば必ず勝つ司令官のナポレオンへの期待が徐々に高まっていき、なかなか物事を決められない現政府に代わって、思い切ってナポレオンに国のリーダーを任してみたらという世論が支配的になってきました。ナポレオンは自分が出る時期が到来したと、30才の時帝政ローマを真似た3人の統領制をしき、自分が大部分の権限を握る第1統領になりました。

ナポレオンが35才で皇帝となるまでの5年間は比較的平和な時代が続き、ナポレオンは内政に専念することができました。ロベスピエールの二の舞とならないよう、フランス革命の精神を十分に汲みながら国内の諸々の制度を次々と

変革していきました。

その最大のものが、「ナポレオン法典」と称される民法を中心とした法体系の編纂へんさんです。この法典は「ハンムラビ法典」や「ローマ法典」と並んで世界の三大法典と称され、後に各国の法典の参考とされたものです。ナポレオンは法典編纂へんさん会議には常に出席し、彼からほとぼしり出た卓抜な意見は、専門の編纂委員を驚かしました。フランス革命が主張した自由平等主義は十分に法典に取り込まれました。

また、革命時代にも実施できなかった税金の大幅な軽減も実行し、小、中学校の増設、専門学校重視等実用本位の教育を奨励しました。さらに宗教についても、ロベスピエールがキリスト教を禁じ理性崇拜を強制したのに対し、国民の大多数が信仰しているキリスト教を復活させました。

以上のようにナポレオンは、よく時代精神に従い、国民の要求を容れて、自由と平和を尊重し、権利を認め、経済生活の安定を保証する政治を行ったので、国民の支持は一層高まりました。

皇帝時代

しかし、そうなると彼の心の中にヨーロッパ全体を支配したいという野望が膨らんでいき、ついに35才の時国民投票で皇帝になってしまいました。その時に10年近く連れ添ってきたジョセフィーヌを子供が出来ぬという理由で離婚し、一種の政略結婚でオーストリア皇室からマリー・ルイズを皇后として迎え入れました。

彼が内政に専念している間に周辺諸国はフランス特にナポレオンへの憎しみを募らせていたのですが、そのことにナポレオンは気が付きませんでした。たとえアドバイスする人がいても、彼は聞く耳を持っていませんでした。

皇帝になってからも、イタリアを占領していたオーストリア軍を不可能と思

われていた砲兵を含めたアルプス越えで打ち破るなど戦争に勝つには勝ったけれど、味方の損害も甚大で、国民に大きな負担を掛けることになりました。

ナポレオンが陸戦でウィーンを攻め落としている間に、ネルソン率いるイギリス艦隊に、莫大な費用を投じて急造したフランス艦隊が全滅してしまうという悲劇に見舞われました。ナポレオンがその負い目を陸戦でロシアを占領することによって挽回しようと、大軍を率いてモスクワ目指して進軍しました。ところがモスクワに着く頃には真冬になってしまい、夏服姿のナポレオン軍は敵と戦う前に冬将軍にすっかりやられて弱体化してしまいました。いよいよモスクワ進攻という前日にロシア軍は意図的にモスクワを焼き払い、ナポレオン軍が攻めて来ても食料もなければ暖も取れないようにしてしまいました。

ナポレオンはやむなく引き上げを開始したのですが、そうするとどこからともなくロシア軍が現れて猛反攻を開始しました。ナポレオン軍は既に戦意を失っており、大混乱に陥り、フランスまで逃げおおせたのは、ナポレオンを含めて最初の10分の1以下になってしまいました。

2年後、オーストリア、ロシア、プロシアなどの連合軍がフランスに攻めて来て、ナポレオンは捕らえられ、エルバ島に幽閉されてしまいました。幸い1年で脱獄に成功し、フランスに帰って内政の乱れに乗じて再び皇帝になりました。そしてイギリス、プロシア連合軍とのウォーターローの戦いに敗れてセント・ヘレナ島に島流しになりました。ナポレオン46才の時でした。彼は52才（1821年）までそこで淋しい人生を送りました。

ナポレオンも平家物語と同じで「奢れる者、久しからず」の例に漏れず最後は惨めなものでした。

(注)この紹介文は「ナポレオン」(ポプラ社)によっています。

次第に耳が聞こえなくなったベートーベン

「クラシック音楽の歴史の中で最大の作曲家は？」と問われれば、9割以上の方がベートーベンと答えるでしょう。そしてN響等の演奏会でベートーベンの交響曲やピアノ協奏曲を直接あるいはテレビやレコードで聴いたことがあるでしょう。ところが彼の生涯の実像を知っている人は意外に少ないのではないのでしょうか。

ショパンやモーツァルト等は映画化されて、その生涯が比較的ポピュラーになっていますが、ベートーベンが映画化されたという話は聞きません。彼の伝記もあまり見掛けません。やっと見つけた子供向けの伝記をたよりにこのミニエッセイをまとめてみました。

ちょっと俗っぽくなりますが、ベートーベンの外見から紹介しましょう。彼はいわゆるイケメンとは程遠く、身長は150数センチでやや猫背でずんぐりしており、眼は小さく、鼻は短く大きかったといえますから西欧人としては貴婦人たちの話題にもならなかったようです。それにもかかわらず彼は生涯で5～6回恋に落ち、いずれも一方通行の失恋に終わっています。彼は薄汚れた黒い上着に、粗野な態度、その上に平民出身で、ピアノの家庭教師に行った先の貴族の娘が好きになってしまったのですから、先方の親も含めて考えれば失恋に終わるのは当然で、56年の生涯を結果として独身で通すことになってしまいました。

しかし、彼の音楽家としての人生はまさに輝かしいものでした。画家のゴッホのように亡くなってからその真価が認められるというのではなく、ほぼリアルタイムで評判が高まって行きました。それは、音楽愛好の王侯貴族が彼に他の貴族を紹介したり、発表の場を用意してあげたりしたからです。

ベートーベンはドイツのボンで生まれましたが、人生のほとんどを隣国オー

ストリアのウィーンで過ごしています。それはボンの選定候の薦めとオーストリアの王侯貴族や音楽家モーツアルトやハイドン等への紹介があったからこそ実現したことです。

ベートーベンはモーツアルトのレッスンを1度だけ受けています。ベートーベンは与えられた曲を必死に弾いたのですが、モーツアルトはさっぱり乗ってきません。そこでベートーベンは最後の手段とばかり、モーツアルトから簡単なメロディーをもらい、それをベースにして即興的にピアノ曲にして弾いて見せました。すると隣室にいたモーツアルトの友人たちまで入って来て、皆がベートーベンの即興能力を褒め称えました。

またベートーベンはハイドンの弟子になり、作曲法を学びました。一方少年リストのピアノを聴いて励ましたこともあります。

私がベートーベンはただの天才以上の存在だと思うのは、30才を前にして次第に耳が聞こえなくなっていく中で、何回も音楽を投げ出そうとしながらも、自分にはこれしかないと思い直し、ついに死の直前に交響曲第9番（合唱付き）を完成させたことです。その曲には「よろこび」という副題がついていますが、初演の時、総指揮者をしていたベートーベンには演奏が終わった時の聴衆の熱狂的な拍手も全く聞こえず、聴衆に背を向けたままだったといえます。

(注)この紹介文は児童伝記シリーズ13「ベートーベン」(伊藤佐喜雄)によっています。

二宮金次郎(尊徳)の実像

戦前の二宮金次郎像

皆さん、二宮金次郎と聞いて何を連想されますか。戦前を知っている人達は、小学校の校庭や玄関に立っていた銅像を思い出し、薪を背負い歩きながら読書

に励む農家の子で、感心な子だと書いてあった修身の教科書によって全国共通の認識を持っていることでしょう。

戦後進駐軍が入ってきて、戦中の軍国主義を連想させるような武将や軍人の銅像と一緒に、一度も戦争を奨励したことのない二宮金次郎の銅像までたいした配慮もなく撤去させられてしまいました。その考え方は、薪を集めることと、勉強することは、全く違うという短絡思考で、分業の進んでいたアメリカでは、二つのことを同時にやることは、能率が悪いと考えたのです。何かをしながら何かをすることの得意な日本人の特質が全く分かっていませんでした。

二宮金次郎は、修身の科目が道徳と名が変わると同時に全く消されてしまい、戦時中を知らない人達は二宮金次郎の名も知らない人達が殆どでしょう。

ここで二宮金次郎（後に尊徳という）を取り上げるのは、実はもっと深い訳があるのです。それは、彼の人生の生き様そのものが、私がライフ・ワークとして追求しているB-C-E-P（ビジネス・クリエイティブ・エクゼキューション・プログラム、仕事における創造的な実践のプロセスを教育プログラムに仕立て上げること）そのものであったということが最近になって分かったからです。

コンサルタントとしての二宮尊徳

二宮金次郎は1787年、相模の国、現在の小田原の近くに生まれました。おじいさんが働き者だったので、一代で大地主となったのですが、子供に恵まれず、養子として迎えたお父さんが気の弱いお人好しだったので、村の悪い連中にだまされて、これまた一代で文無しになるだけでなく、借金で大金を背負うことになってしまいました。

彼が14歳の時、お父さんが亡くなり、二宮金次郎を頭に二人の弟は、それぞれおじさん達の所に預けられ、一家離散してしまいました。それから二宮

家の再興を目指した彼の生活が始まります。銅像ではそんな背景とは関係なく、やさしい顔付きに表現されていますが、二宮家を滅ぼした悪い連中に対して、今に見ていると怒りに満ちた顔をして、大人でも難しい本を読みあさっていたのです。そして約10年で見事に二宮家を再び村一番の大地主にし、弟二人を呼び戻し、そこで裕福なお百姓としての生涯を送ることもできたのですが、一生成長を望む彼は、そんなことで満足する男ではありませんでした。

当時過重な年貢を科し、えびりくさっている武家の社会の内実を知りたいと小田原藩の家老、服部家の下男として入り込みます。

そこで服部氏の信頼を得、服部家の財政の立て直しを全面的に一任されるまでになります。そして自ら設定した5年という期間で見事に服部家の財政の健全化を達成してしまいました。家老の家の財政立て直しといっても、やることは単純です。

要は農民のやる気を引き出し、新田を開発し、家老と武家の支出を出来るだけ抑えることです。

いわば、コンサルタントとして入り込む訳ですが、それを農民がやることに武家達のものすごい抵抗があることが一番の障害となりました。

二宮尊徳の噂は当時の小田原藩主大久保忠^{ただかね}氏にも届き、大久保氏の招きで藩邸に二宮尊徳が出向くと、一介の農民が藩の一番重要な財政のコンサルタントになることに臣下全員が猛反対です。大久保氏はやむを得ず、手始めに、飛び地になっている茨城県にある領地で、ならず者の巢と化している桜町の領地の財政立て直しのみを依頼することにしました。誰もが不可能と見ていたこの難事業も10年あまりで見事にやり遂げただけでなく、その間に起こった大飢饉も予知して、ひえ、あわ等非常用食料で一人の餓死者も出さずに乗り切り、近隣の村々をも食料援助したのです。

このことは、ついに幕府の耳にも届き、二宮尊徳は幕府のコンサルタントにまで登用されることになるのですが、彼は既に高齢化しており70歳で亡くな

りました。その後は弟子達が引き継ぐことになるのですが、詳しいことは分かりません。

この原稿は、国土院の二宮尊徳（筑波常治）によっているのですが、二宮尊徳が世界伝記文庫の第一号であることから、彼が単なる天才、秀才ではないことが分かるでしょう。

生物の進化を説いたダーウィン

調査船ビーグル号に乗り込むまで

1809年チャールズ・ロバート・ダーウィンはイギリス中部のシュルーズベリーに生まれました。医者でロバートとその妻スザンナ（ウェッジウッドという陶器製造業を創立した名門の出）の5番目の子供で、次男でした。チャールズは子供の頃あまり利口な子ではありませんでした。両親も、小学校の先生もチャールズにはたいした期待をかけていませんでした。

ある日父はチャールズに言いました。「お前は、お前自身の恥だし、家族の恥だ。」それでも、チャールズはあまり気にしませんでした。

シュルーズベリーの周辺には豊かな自然の田園風景が広がっていて、チャールズは森や川の周りを歩き回り、珍しい昆虫や植物や石を集めるのが趣味でした。しかし、父はチャールズを医者にすることに決めており、16才の時エジンバラ大学の医学部に入れました。チャールズは医学の勉強が大嫌いで、講義は退屈でたまりませんでした。特に手術を見るのはまるで悪夢でした。悲鳴、血、苦しみ…、チャールズは2度までは付き合いましたが、3度目はもう行きませんでした。

一方でエジンバラには、チャールズが好きなことをする機会が沢山ありまし

た。彼は生物学に興味を持っている多くの人たちに会い、博物学会にも入会しました。そして海辺で発見したことをまとめては、新しい友人の前で読んで聞かせました。

チャールズでは良い医者になるのは無理だと判断した父は、田舎の牧師にでもなつてはどうかと提案してきました。その方がましだと思ったチャールズはすぐに同意し、南に下ってケンブリッジ大学に入り直しました。

そこでチャールズは乱暴な仲間たちとよく飲み、夜遅くまでトランプなどをして遊びました。昼間はカブトムシ集めと射撃に精を出しました。特に射撃は、空砲で友人が持っているろうそくの火を消すゲームで、命中すれば火が消えます。そんな寮生活だったので、チャールズは当然教授たちの評判は良くありませんでした。

ただし2人の例外がいました。1人は植物学者のジョン・ヘンズロウ博士、もう1人は地質学者のアダム・セジウィック博士で、2人はチャールズの科学の知識に感心し、採集旅行に連れて行ったり、自宅に呼んで自分の蔵書を貸してくれたりしました。

そんなことで、専門とすべき神学には熱が入らなかったのですが、何とか牧師の資格を取って家に帰りました。帰ると親しいヘンズロウ教授と、同じケンブリッジ大学の科学者ピーコック博士からそれぞれ同様の手紙が来ていました。「イギリス政府は、南アメリカの海岸と太平洋のいくつかの島々を巡る5年にわたる調査船を出すので、それに乗り込む若い博物学者を推薦するように頼まれたので、君を推薦しておいた。」というものでした。

チャールズの趣味が思わぬ所で生きたのです。

チャールズが飛び上がらんばかりに喜んだのは言うまでもありませんが、父は猛反対です。息子がやっとな仕事に就けるようになったのに、生きて帰れるかどうか分からない調査船に乗り込むなんて許せるわけがありません。

チャールズは内心諦めながらも、一応ジョサイア伯父さんに相談しました。

伯父さんは「こんなチャンスは二度と来ない」と言って、一緒に父の説得に当たってくれました。父がやっと折れたので、チャールズは早速艦長の面接を受けました。最初チャールズと同年輩のフィッツロイ艦長は、チャールズが気に入らませんでした。チャールズの鼻が、小さくてあぐらをかいているという理由でした。フィッツロイ艦長はチャールズ二世を先祖に持つ貴族で、人の能力や性格はまず鼻に出ると信じていたからです。しかしチャールズの熱心さと人柄の良さに考えを変え、調査団に加えることにしました。（注：以下チャールズをダーウィンと称することにします。）

調査船ビーグル号は本当に小さい船で、今の大型バスほどの長さしかありません。それに75人が乗り込み大海に乗り出そうというのですから、まさに大冒険です。しかもビーグル号の出航を待っている間にダーウィンは手に腫れ物が出来、しかも胸が痛みました。それでもダーウィンはそれを隠して乗り込みました。ダーウィンは22才でした。

ビーグル号の大航海（1831～1836）

65日もの航海の後、ビーグル号が最初に寄港したのはブラジルのサルバドルでした。博物学者はダーウィン1人でしたので、寄港中は彼だけ陸地に残って生物の観察と採集という彼の仕事に専念しました。

彼は今、緑濃い熱帯雨林の森の中に立っています。回りを見回したとたん、嬉しさが胸の底からこみ上げて来ました。これまでもダーウィンは自然が好きで、鳥や獣や虫たちを愛してきました。今、彼は鳥や獣や虫たちの天国にいるのです。

当時はまだ写真が無かったので、現物で保存するしか方法がありません。鳥や獣の採集には、彼のライフルの腕前が大変役立ちました。集めた生き物は内臓を取って詰め物を入れ、彼の考察を加えて、ケンブリッジのヘンズロウ博士

に送りました。

アルゼンチンでは“怪物”の墓場と呼ばれ、古代の巨大な化石がある場所を発見しました。そこにはダーウィンを夢中にさせる珍しい動物の化石が沢山ありました。例えばカバほどもある水中に住むネズミの化石もありました。彼は現地人を使ってそれらをビーグル号の甲板に並べさせたので、乗組員にはいやな顔をされましたが、ダーウィンの方はもう夢中でした。

これらの巨大な生物は何故滅んでしまったのだろう。キリスト教によると、大洪水が起きて、ノアの箱舟に救われた生物だけが生き残ったのだと説明するに決まっています。しかし彼はその説明にはどうしても納得がいきませんでした。彼はだんだん牧師という仕事がいやになっていきました。そしてガラパゴス諸島での経験が彼のそれからの生き方に決定的な影響を与えることとなります。彼は牧師になる計画を捨てて、趣味としてやってきた博物学で生きることになりました。

ガラパゴスとはスペイン語でゾウガメのことです。その肉はとてもおいしいのです。ガラパゴス諸島は、近くに集まっており、環境は似ているのですが、島民たちから見れば、それぞれの生き物は一目でどの島のものか区別がつくと云います。ダーウィンはそのことを知るまで、各島で採取した同種の生き物を混ぜて本国に送ってしまったことを悔いました。

帰国して

ダーウィンは27才になってイギリスに戻ってみると、自分の名前と仕事の業績がかなり知れ渡っているのに驚きました。ヘンズロウ教授が宣伝してくれたのです。偉大な地質学者チャールズ・ライエル氏もダーウィンを食事に招き、名誉ある地質学会が彼の入会を認め、ダーウィンは間もなく幹事になりました。こういう仕事の他にダーウィンにはビーグル号で集めた標本を全部調べ直し、

分類するという博物学者としての仕事が沢山残っていました。後に彼はこの頃が生涯で一番忙しかったと語っています。

ダーウィンは30才でジョサイア伯父さんの末娘でいとこのエマと結婚し、その年に「ビーグル号航海記」を出版します。その頃からダーウィンは体調を崩し、すぐに疲れを感じ、目まいや吐き気に悩まされるようになり、イギリス南東部のダウン村に引っ越しました。彼は73才で死ぬまであまり人に会わず研究に専念しました。

ダーウィンの研究は極めて危険なもので、熱心なキリスト教信者でノアの箱舟を信じている妻のエマを説得することすら難しいと思われました。親しい友人に正直に話したら「君は人を殺したと白状しているようなものだ。」と警告されました。

ダーウィンは何人か子供をもうけ、一見平和な家庭生活を送っていました。父が残してくれた財産がありましたので、世の中を敵に回すような新しい学説を急いで世に問う必要はなかったのです。

ところが、東インド諸島で研究している博物学者アルフレッド・ラッセル・ウォレスからの一通の手紙がダーウィンを完全に打ちのめしてしまいました。ウォレスは独自の研究からダーウィンがこれまで発表してきた断片的論文と矛盾しない結論に到達し、それを一冊の本にまとめたのでその出版に協力してもらえないかという内容でした。それを承諾すれば、20数年間の研究成果は何の価値もなくなってしまいます。そうかといって先方に何の落ち度があるわけではありません。ダーウィンはどんな批判にも答えられるように理論武装し、証拠固めをしているうちにどんどん年月が経ってしまったのです。ダーウィンは学者の倫理として一時は全ての権益をウォレスに譲ることを覚悟しました。

ダーウィンは友人のライエルやフッカーに相談しました。2人はダーウィンの方が余程早く「種の起源」の元となる結論に到達していたことを知っていました。そして妥協案を考えてくれました。それはダーウィンとウォレスの連名

でロンドンのリンネ学会で発表するというものでした。ウォレスも承諾してくれましたので、ダーウィンは進化論を中核とする「種の起源」の執筆に専念することにしました。

1859年ダーウィン50才の時、かの有名な「種の起源」が発表されました。本文そのものは短いのですが、証明する文章が長く600ページにも及びました。ダーウィンは売れ残りを心配しましたが、即日完売してしまいました。しかし、その後が大変でした。世の中は蜂の巣をつついたような騒ぎになりました。キリスト教では「神に似せて人間を創った」というけれど、「種の起源」では「人間は猿が進化したもの」というのですから、牧師や貴婦人たちはとても容認できるものではありません。

当時既に病気がちのダーウィンは、ダウ村でメンデルに通じるような遺伝の実験などにいそしんでおり、とてもロンドンに出て来て論陣を張るなんてことはできませんでした。世の中はうまく出来ているもので、当時一番有名な生物学者トマス・ヘンリー・ハクスリーがダーウィンを支持し、敵方の弁士オックスフォードのウィルバーフォース主教をやり込めてくれました。

科学者からの反論もありましたが、彼等はずもともと神による創造という考え方、言い換えれば、聖書にしか根拠を求められない従来の方法論には不満を持っていたので、測定、実験、観察などというダーウィンの方法論を知り、殆どが進化論者になっていきました。

ダーウィンは1882年、73才でダウ村で亡くなりましたが、死の直前まで誰とも面と向かって対決することなく、静かに研究生活を続けました。一科学者としては幸せな生涯だったと言えるのではないのでしょうか。

(注)この紹介文は借成社「ダーウィン」(アンナ・スプロウル)によっています。

世界で一番伝記を書かれている人 リンカーン

世界で一番伝記を書かれている人はイエス・キリストで、この人は半分神様ですから、キリストを除くとダントツでリンカーンです。それだけリンカーンは政治家として世界の人に尊敬され、親しまれているということです。私は高校の社会科や歴史で学んだ以上の知識は持ち合わせていませんでしたので、自分の勉強も兼ねて短い紹介文を書くことにします。

幼・少年期

リンカーンは1809年に西部の開拓地ケンタッキーのフロンティアにあった質素な丸太小屋に生まれました。小屋は祖父が建てたものですが、祖父はインディアンにつかまり、殺されてしまいました。リンカーンには姉がいたので両親を含めて4人でその小屋に暮らしていましたが、勿論ベッドなどはなく、固い木の床に獣（けもの）の皮を敷いたり、わらを敷いたりして寝ていました。

1809年といえば、大西洋岸の北部13州がイギリスから独立した直後でしたが、ケンタッキー州はまだ人口密度の極めて低い開拓地でした。ヨーロッパではナポレオンI世の全盛期で、日本では文化6年といえば、ちょうど町人文化が江戸を中心に栄えようとしていました。

リンカーンの住んでいた所には学校はなく、カバン1つで巡回してくる先生が、部屋を借りて数ヶ月生徒を募集するという方式で、そのチャンスにリンカーンは姉と片道6kmもある通学路を通ったものでした。学習内容は読み書きと計算位で、ノートはなく、2人は家で地面に書いて練習するのが一番良い方法でした。

西部へ西部へと移動して成功するパターンは、後から来る人に今の土地を売

り、さらに西部でより広い土地を買ってやがて大農場主となるというのですが、リンカーンの父は度々移動したけれど、また同じような生活を繰り返すということで、商才には長けていなかったようです。

リンカーンが8才の時に移住した先はオハイオ川を北へ渡ったインディアナ州で、州に昇格したばかりで、しかも奴隷制度を認めない州でした。両親に政治的意図があった訳ではないけれど、奴隷州から自由州への初めての移住は、その後のリンカーンに大きな影響を与えた筈です。インディアナ州でも一家は森林を切り開いて丸太小屋を造り、畑を開拓しました。リンカーンは「この時より22才になるまで片時も斧を手放さなかった」と後に書いています。

彼が10才の時、母が牛乳で感染する恐ろしい病気で死亡してしまい、姉がしばらく母代わりを務めましたが、翌年父は再婚し、リンカーンは一挙に新しい母の連れ子3姉弟を持つことになりました。新しい母も誠実で優しく、荒野の生活をきりもりしていくだけの逞しさも持っていました。

彼はチャンスがある度に学校へ通いましたが、そこで習ったのは読み書き、計算程度で、生涯通算しても1年にも満たず、後は全て独学でした。彼は働き者で、家が忙しい時には父の手伝いをし、森や畑で働き、木の切り株の上に立ってはスピーチのまねごとをよくやっていたようです。農業が暇な季節には、自分で進んで人に雇われて少しでも家計を助けるようにしていました。

青年時代

リンカーンが19才の時、実の姉がお産が原因で亡くなり悲嘆に暮れている時、オハイオ川の渡し場と大農場を経営していたジェイムズ・ジェントリーという人に、リンカーンはその体格と人柄を見込まれ、農産物をミシシッピ河の河口にある大都市ニューオーリンズまで運ぶことを依頼されました。悲しみに沈んでいた彼は即座にOKし、その仕事に専念しました。1500kmもあ

り、2ヶ月以上かけてたどり着いたニューオーリンズは、自宅の廻りしか知らなかった彼にとっては、全く新しい世界で、遅まきながら世界の広さに関心が行くようになります。

2回目の河下りの際は、多少気持ちにゆとりのできた彼は、途中の南部諸州の船着場の近くで奴隷が売買されているのを眼にし、「いつかこの残酷な奴隷制度を徹底的に倒してやる」と決意しました。実際にリンカーンが奴隷制度を廃止するのはそれから30年後になりますが。

リンカーンは23才の時、初めて州議員に立候補しますが、見事落選してしまいます。しかし、彼はその経験から、自分をよく知ってくれている人達は皆自分に投票してくれるということに確信を持ち次の選挙には当選するという自信を持ちました。

彼は、25才でイリノイ州の州議員に初当選し、33才まで4期連続当選します。その間に郵便局長や測量の仕事をしながら独学で法律の勉強をし、弁護士資格もとります。この若き州議員の時代、彼は幸せだったかという、そうではありませんでした。共同経営で始めた雑貨商の友人が多額の借金を残して死亡し、その上結婚まで約束した恋人が病死するなどの不幸が重なり、彼は周期的にやってくる憂鬱症に悩まされたようです。

リンカーンは33才の時、メアリ・トッドという女性と結婚し、翌年長男ロバートが生まれ、リンカーンはやっと家庭に落ち着くことになりました。彼は4人の子供をつくりますが、そのうち2人を幼くして亡くしてしまいます。

当時の彼の写真を見ると、身長はアメリカ人の中でも大きい193cmで、髭のない彼の顔は決して好男子とはいええないものでした。大統領になってからの深みのある彼の顔は、決して平坦ではなかった彼の人生の中で徐々に作り上げられたものでしょう。

リンカーンはイリノイ州都となったピッツバーグを自分の生活の根拠地と考え、生涯で1度だけそこに自宅を建設し、年下のハーンドン氏を共同経営者と

する法律事務所を自宅の近くに開設しました。そのハーンドン氏によるリンカーンの伝記によると、彼の妻メアリは嫉妬深く、わがままで天下の悪妻だったそうです。

大統領への道

リンカーンが合衆国の下院議員（任期2年）一期生の時、メキシコとの国境を争う戦争はアメリカの勝利に終わり、国民が戦勝気分にかけている時に、一人「これはアメリカの侵略戦争だった」と主張し続けたために、自分の人気があがた落ちた事を認識しました。そんな時、自分が所属するホイッグ党のテイラー将軍の応援演説にかけずり回り、彼の当選に大きな貢献をしたので報償としてワシントンで勤められる良い官職に推薦してもらい、議員を一時休もうと期待していました。

ところが、リンカーンに用意されていた官職はワシントンから遙かに遠く、幌馬車で何ヶ月もかかる田舎のオレゴン州の知事（当時は官選）でした。それには都会の生活に慣れた妻のメアリが猛反対し、リンカーン一家はそれを断り、自宅のあるピッツバーグに戻り、弁護士業に専念することにしました。

1856年、リンカーンが47才の時、奴隷制度に反対を鮮明にした共和党が結成されると、彼は態度を明確にしないホイッグ党を離脱し、共和党に入党しました。それまでも民主党のイリノイ州選出の上院議員でリンカーンの好敵手ダグラスの法案に真っ向から反対する演説会を開くなどの政治活動を再開していました。

しかし、彼は急進的な奴隷解放論者とは異なり、奴隷制度が有する複雑な実情を十分に理解したうえで、奴隷制度が現在以上に拡大しないことをまず目標としていました。

リンカーンは51才で共和党として最初の大統領に当選します。アメリカ合

衆国としては、初代のワシントン以来第16代目に当たります。アメリカの大統領選挙の仕組みは若干複雑で、州ごとにあらかじめ決められている選挙人の数（具体的な人がいる訳ではない）を、1票でも投票者の多かった候補者が全て獲得し、獲得した選挙人の数をアメリカ合衆国全州で合計して大統領が決まります。そして州ごとに投票日も異なるので、各候補者は遊説の日程も組みやすいという仕組みで、共和党のリンカーンは、好敵手ダグラス（民主党）との一騎打ちの演説会などについての新聞の報道によって徐々に知名度を上げ、いくつかの幸運が重なってかろうじて当選したのです。

南北戦争と奴隷解放

大統領に当選して就任するのは4ヶ月後になるのですが、その間前任者が執務している間に、奴隷制度を認める6つの南部諸州が1861年に独立し、C S A（The Confederate States of America＝南部同盟国）というUSAとは別の国家を立ち上げてしまい、なおそれに続くいくつかの州が出そうな気配でした。リンカーンは大統領就任前に建国以来最大の問題を背負い込んでしまいました。

一方でリンカーンの暗殺計画が進んでいるという噂が複数の情報源から寄せられていたので、彼に髭をはやした方が良いという手紙をくれた少女に会う以外に各地での演説計画は全て取りやめにせざるを得ませんでした。

リンカーンは大統領就任演説で「南北は敵ではなく友なのだ」と熱心に訴えましたが、不幸にも翌月南軍の砲撃によって南北戦争の火ぶたは切って落とされてしまいました。北部の人達は総合力で上回る北軍が間もなく勝利するだろうと考えていたのですが、実際は南北戦争（The Civil War）は丸4年も続き、両軍で60万人も死者を出す世界最大の内戦となってしまいました。

最終的には北軍の勝利という結果に終わり、リンカーンが望んでいたように南部諸州のアメリカ合衆国への復帰と奴隷解放が実現するのですが、彼が56

才の時、第2期目の大統領に就任したその年に狂信的な南部の青年によってメアリ夫人と観劇中に暗殺されてしまいました。

リンカーンは今でもアメリカの歴代大統領の中での人気は抜群で、国家分裂の危機を救い、人間の自由と平等を回復し、民主主義（Government of the people, by the people, for the people）の基本理念を守り抜けた人は彼を置いて他に思い当たらないからでしょう。彼は最強の権力者の地位にありながら、その権力を自分の利益のためではなく、常に国民及び国家の現在と将来のために使う、というまさに人間を越え神性に近いものを持っていたと考えられます。（注）この紹介文は世界伝記文庫29「リンカーン」（猿谷要）によっています。

愛の天使 ナイチンゲール

100年以上も前に活躍したフローレンス・ナイチンゲールが、今もなお世界中の人々から尊敬されている理由は、次のような点からでしょう。

- (1) 自分の幸せよりも、気の毒な人達のことを優先して考えたこと。
- (2) 看護婦の仕事が、立派な仕事であることを世の中に示したこと。
- (3) 世界の人々を動かして万国赤十字社を作るきっかけとなったこと。

（実際に作ったのはスイスのアンリ・デュナン）

少女時代

ナイチンゲールは、イギリスの財産家の次女として1820年に生まれました。彼女は大変動物が好きで、家で飼っている犬や馬は勿論のこと、森の野生のリスなどもかなりコミュニケーションができました。

古いお人形の手足に包帯を巻いて手当をしたり、年を取って使えなくなった

馬の散歩を進んで引き受けたり、貧しい友達のお婆さんのお見舞いに行ったり、また近所の羊飼いのおじいさんが使っている犬が、子供に石をぶつけられて動けなくなっているのを毎日手当に行ったりと、普通では考えられない程のやさしい気持ちの持ち主でした。

ナイチンゲール姉妹は学校には行かず、全ての学科を女性の家庭教師から学んでいました。そしてその家庭教師がお嫁に行ってしまうと、知事までやっていた父が後を引き継ぎ、より深い解釈まで教えてくれました。1つ違いの姉はお金持ちの普通の女の子でしたが、ナイチンゲールは村人達からも慕われ、行き会おうと挨拶されるやさしい子でした。

ナイチンゲールは17才になり、出来るだけ良いお婿さんに見初められるようにとお屋敷では毎晩のようにパーティが開かれるようになりましたが、彼女は毎日自分はこんな事をしていて良いのだろうかという疑問を持つようになりました。ある日彼女は神様にお伺いを立てました。すると神様が「自分が望むように生きなさい」と確かに答えたような気がしました。

早速両親に「自分は看護婦になって、1人でも多くの人を助けたり、生きる希望を与えたい。お嫁に行かなくても良い」と申し出ました。それを聞いた母は気が動転してしまい、「あなたを看護婦なんかにするためにここまで育ててきたわけではありません」と言って部屋を出て行ってしまいました。父も「お母さんを悲しませるようなことをするのは良くない」と言ってやさしく彼女を諫めました。当時の病院は汚く、そこで働く看護婦の仕事は、良家の娘が就くべき仕事とは思われていなかったのです。

しかし、彼女には一旦神の許しを得て決意したことをたとえ両親が反対しても、簡単には引込めない強固な意志がありました。それからというもの、彼女は朝早く起きて書物でこっそり看護の勉強をするという生活が続きました。

その直後2年間にわたって彼女の一家はヨーロッパ旅行に出掛けます。そして彼女はイタリアのゼノアでシスモンディ博士という有名な歴史学者と知り合

い、自分の生き方について相談しようとする朝先生のお宅を訪ねて驚きました。門の前に100人を越える貧しい身なりの人々が行列を作っており、先頭では先生自ら1個ずつ全員にパンを配っているではありませんか。ナイチンゲールは最後に家に招き入れられ、先生からイタリアの歴史などについて親しくお話を聞くことができました。シスモンディ先生は、別れ際ナイチンゲールに「あなたもどうか不幸せな人達のお友達になって下さい。」と言いました。彼女は生涯この言葉を忘れませんでした。

社会に出る

ナイチンゲールはその後も両親の賛同を得られぬまま、1人で看護婦の勉強を続け、秘かにこの人ならばと思う人に相談しては励まされ、紹介をされて病院などを見学して回りました。ドイツにある世界一の病院では、短期間ですが看護婦として実地の勉強もしました。彼女が最初の仕事に就いたのは、ロンドンにある貧民学校でした。そこは貧しい人達が工場で働けるよう子供達を預かる所でした。

両親は彼女がお嫁にも行かず、どこまでも我が道を貫く態度をみてついに諦め、彼女の自由にさせることに決めました。その時彼女は既に33才になっていました。初めて神のお告げを聞いてからもう実に16年です。

翌年トルコをロシアから守るためイギリスとフランスは手を結んで戦うことになり、トルコの対岸にある黒海のクリミア半島で連合軍はロシア軍に遭遇しました。双方多くの負傷者を出しました。

イギリスの陸軍病院では食べ物も着替えも、薬も包帯も十分になく大変苦しんでいるにもかかわらず、友軍のフランスの陸軍病院には軍医も看護婦も十分いるという情報がロンドン・タイムスに載りました。

時のイギリスの軍務大臣はナイチンゲールが以前から知っている父の友人の

ハーバードという人で、彼女は「自分を派遣して欲しい」という手紙を書いたところ、時を同じうして軍務大臣もナイチンゲール宛に「クリミアに行ってくれる看護婦を出来るだけ見つけ、あなたが監督として連れて行って下さい。この広いイギリスにこの危機を救えるのはあなただけです。」という手紙を書いていました。

早速この手紙を家族に見せると、父は「立派にイギリス婦人の務めを果たしておいで」と言い、母や姉も涙をこらえて賛成してくれました。

ナイチンゲールは素早く38人の看護婦を選び出し、クリミアに向かいました。そして陸軍病院に来てみて驚きました。掘っ立て小屋でベッドも十分でなく、床に寝かされている負傷兵も沢山いました。間もなく冬が来るというのに暖房器具も燃料も殆どなく、食事も本当にひどいものでした。彼女が厳選した看護婦でしたが、そのうち4人はたちまちイギリスに逃げ帰ってしまいました。その上軍医達との反目もありました。軍医達は、彼女達がかえって自分達の仕事の邪魔をしているように思えたのです。

ナイチンゲールは、患者は次第に増えているのに、全ての物が不足している現状をイギリス政府に訴え、直ちに救援物資を送るように依頼しました。するとすぐに沢山の必要な物資が届きました。翌日1人の看護婦が自分の受け持ちの患者が寒いというので、すぐ毛布を持ってきてあげると約束したのですが、物資を管理する下士官が上官の許可が出るまでは、梱包を開けられないと言って分けてもらえないと訴えました。ナイチンゲールは全責任は自分が取ると言って一つの梱包を開けて一枚の毛布をその看護婦に与えました。

また患者達は、彼女のことを親しみを込めて「ランプを持つ天使」と呼んでいました。彼女は他の看護婦達が寝静まった後、全病床を見回ることを日課としていました。ところが過労のためか、当時流行していたクリミア熱という熱病に彼女自身が感染してしまいました。それもかなりの重病で現場に復帰するのは難しいという噂が各病棟に流れました。最早「ランプを持つ天使」の姿は

見られないと、兵士だった患者達の嘆き悲しみは大変なものでした。

奇跡的に彼女は回復し、現場に復帰しました。そんな時、一旦国へ帰って休養する方が良いという声が周辺から上がりましたが、まだ戦争は終わっていないと言って、彼女は強硬に帰国を拒否しました。そんな折、イギリスのビクトリア女王から次のような手紙が届きました。

「貴女が、この戦争の間、自分のことを忘れて熱心に働いて下さったことを私は心から感謝しています。貴女の手柄は、勇ましい兵士達にも決して劣るものではありません。どうか貴女の働きの記念に、このブローチをお受け取り下さい。」

ダイヤモンドがいくつもはめ込まれたこのブローチには、「憐れみ深い人は幸いなり」という言葉が刻み込まれていました。

やがて戦争はイギリス、フランス、トルコ連合軍の勝利に終わり、ナイチンゲールは帰国しました。彼女が実際に看護婦の仕事をしたのは、90年の人生のうち僅か2年余りです。

国際赤十字社を設立したのは、第1回ノーベル平和賞を受賞したスイスの男性アンリ・デュナン(1828～1910年)です。彼はナイチンゲールを尊敬してはいましたが、ナイチンゲールが手を貸した訳ではありません。それにもかかわらず、ナイチンゲールが世界の偉人としていまだに尊敬されているのは、彼女が死ぬまで看護婦のあるべき姿を追究し、その啓蒙に尽くしたからだと思います。

(注)この紹介文は偕成社の児童伝記シリーズ「ナイチンゲール」(山主敏子)によっています。

世界中で一番読まれているトルストイ

ロシアの文豪トルストイは、日本でも夏目漱石に次いで出版部数が多く、各国語に翻訳されて小説として、演劇として、映画として親しまれており、おそ

らく世界中では一番ポピュラーな作家でしょう。私も中学の時、トルストイの「酒が出来るまで」という短い戯曲の主役を学芸会で演じており、何らかの縁を感じている一人です。彼は偉大な思想家でもありましたが、それに関しては最後にふれます。

少年時代

トルストイは1828年に貴族の四男としてヤースナヤ・ポリャーナという小さな村に生まれました。ここは、モスクワから190キロメートル位南にあり、すぐ近くをモスクワ・キエフ間の幹線街道が走っていて、モスクワに馬車で1泊で行けましたから、当時としては交通の便の比較的良好な所でした。このヤースナヤ・ポリャーナで生涯の大半を過ごし、数々の名作を書いており、後に彼自身このふるさとを除いてロシアを考えることは出来ないと言っている程、重要な場所となっています。

彼が2才の時、彼を特別に可愛がってくれた母親が40才の若さで亡くなってしまいます。彼女は自分の肖像画を残さなかったのでトルストイには、母についての具体的な記憶は残っていませんでしたが、周囲の者が母についての良い面だけを彼に聞かせたせいか、彼にとって母は精神面だけの存在としていつまでも心に残ることになりました。

トルストイは5才になると、乳母から離されて、他の3人の兄たちと一緒に男性の家庭教師に教育を委されるようになります。しかし彼が一番影響を受けたのは長兄で、長兄からの話や一緒に遊んだことを通じて「全ての人々が愛し合って幸せに暮らしていけること」を人生の目標とすることを学んだことでしょう。

トルストイの記憶に残っている父はもう40才を過ぎていて、中背でがっちりした体格をしていました。いつも元気が良く、家族が集まるような場所では

冗談を言ったりして、皆の気を引き立ててくれました。彼の仕事は領地の管理ですが、彼は優しい性格で、当時当たり前のように行われていた農奴に対する鞭打ちの刑などは行いませんでした。父はトルストイなどをよく猟に連れて行き、ウサギ狩りやキツネ狩りを楽しみました。

トルストイは、そのせいか成人してからも猟が好きでした。トルストイ一家は、彼が8才の時に長兄が15才になって大学に入学する準備のためにモスクワに引っ越しました。そして間もなく父が43才の若さで脳卒中で亡くなってしまいました。トルストイ一家が悲嘆に暮れたことはいうまでもありません。家計の面でも急に厳しくなりましたので、そこで長兄だけをモスクワに残し、他の兄弟はヤースナヤ・ポリャーナに戻ることにになりました。

青春時代と軍隊時代

16才になり、トルストイは外交官になることを目指してカザン大学の東洋学部に入りました。しかし、貴族の子弟の集まる大学は、社交の場であり、トルストイのなじめる環境ではありませんでした。彼が興味を持ってそうな若い法学者（助教授）が入って来たので法学部に転部したのですが、彼の授業以外は面白くなく退学を決意します。

丁度その頃、父親の遺産相続が決まり、トルストイは幼少の時代を過ごしたヤースナヤを自分の財産とすることができたので、故郷に戻り、農場経営に専心することになりました。その後農民の子弟の学校を開いたり、指導者の育成に当たったりします。また絵や音楽や文学の勉強もし狩猟にも熱中して、いずれもある程度のレベルに達するのですが、ある日突然単身モスクワに行ってしまう。

モスクワでは法律の勉強もしたのですが、何よりも熱を上げたのはトランプなどの賭け事でした。彼は賭けで破産するほどの借財を作ってしまう。同

じ賭けで返済することができたのは幸いでしたが、この青春時代の彼の生活振りからみて、はたからは、後に文学で生きようという確たる方針があったとはとても思えません。ただし、彼の多様な経験が、彼の文学の肥やしとして生かされたことは事実でしょう。

トルストイは24才の時、長兄が入隊していたカフカス地方までついて行き、そこでコザック人の家に下宿して自由気ままな生活を送っていました。これまでとまるで違った荒涼とした環境に興奮し、コザック人の良い友人なども出来て日常生活を楽しんでいましたが、また悪い癖が出て、賭け事で大きな借金を作ってしまいました。その穴を埋めてくれたのがコザック人の友人でした。彼が賭けでロシアの将校達にごまかされないように教えた事へのお礼でした。トルストイは何時までもブラブラしていても仕方がないと、職業軍人になる気は全くないのに兄の所属している部隊に入隊を申し込み、砲兵下士官として採用され、周辺の少数民族との闘いに参加しました。

その年に最初の本格的な小説「幼年時代」を発表すると批評家からも、一般読者からも大変好評で、文学で食べていける自信もついたので退役を申し込んだのですが、ロシアはトルコとの開戦が迫っていたため許可が下りませんでした。そしてトルコとの戦争の最前線を担うクリミア軍に将校に昇進して参戦して何とか勝利します。しかし、近代兵器で武装したイギリスとフランスの連合軍がトルコに加担して攻めてきたセヴァストポリの戦いではロシアは敗れ、トルストイはやっと退役することができました。

丁度その頃、面識はないけれど、「獵人日記」などで既に有名になっていた先輩作家のツルゲーネフから「君の勇気は既に十分に証明された。君の使命は文学にある。」という歓迎の手紙をもらい、彼は自分の将来をやっと決めたのでした。

彼は作家として小説を書くかわら農民の子供達の教育にも力を入れました。彼の書いたテキストは彼が死ぬまでに28回も版を重ねました。最初の大

作「戦争と平和」は、ナポレオンとの戦争を題材とした歴史小説ですが、初版の4,800部が飛ぶように売れてしまいました。これは当時としては記録的なことで、一度は意見が合わず仲違いしたツルゲーネフさえも絶賛したほど文壇でも好評でした。

「戦争と平和」は559人の登場人物がおり、殆どが実名ですが、その人達は主役ではなく、架空の名前で登場する人達はトルストイ自身か彼の知っている人達がモデルとなって主役を演じています。その中に「ナターシャ」という女性が出て来ますが、「ナターシャ」はロシア文学の中で最も魅力的な女性の一人とされていて、この女性は彼の妻の妹がモデルであるとされています。

トルストイは出版までに何回も書き直すことで有名で、それが過労となって身体をこわし、静養のためにしばしば家を空けざるを得なくなりました。そういうこともあって、彼は生涯の間にそれほど多くの小説を残していません。

彼が50才の時、6年かけて書いた現代小説「アンナ・カレーニナ」が完成し、「戦争と平和」以上の評判となりました。その間に3人の子供を病気で亡くしましたが、彼にはなお2人の娘と4人の息子がいました。

彼は小説や教育のテキストが売れたお陰でヤースナヤの家の増改築が出来たし、サマーラ県にもう一つ大きな土地も購入して財産は増えましたが、トルストイは大切な人の死に接し、人は何のために生きるのかという問いに答えられずに悩んでいたのです。彼は科学者、哲学者に会い、ロシア正教会の最高位の聖職者にも会いましたが、戦争と死刑を否定できない彼等にトルストイは満足することが出来ませんでした。

トルストイが71才の時、最後の大作となる「復活」（「戦争と平和」、「アンナ・カレーニナ」と並ぶ）を出版します。この「復活」にはヒロインであるカチューシャの若い頃のすばらしい恋の描写が含まれています。日本でも「復活」は舞台にかけられ、女優第1号ともいえる松井須磨子がカチューシャ役を演じ、その時日本で作曲された「カチューシャの歌」は全国で大変よく歌

われました。

思想家として

トルストイを世界中で偉人としてここまで有名にしたのは、単に文人としてのみでなく、すぐれた思想家でもあったからです。

彼の思想は概略次のようなものです。

「キリストが教える愛の精神をベースとし、政府、ロシア正教、地主、資本家などの悪に対し、暴力でなく無抵抗の抵抗という方法で命懸けで戦い続けられれば、民衆の窮状はひとりでに消滅し、皆が住み良い社会を実現できる」というものでした。そのためには「貴族は、一時的な慈善事業としてではなく、直ちに農奴に土地等の財産を解放すべきだ。政府は戦争と死刑を廃止すべきだ。」というかなり過激なものでした。

そのために、トルストイの思想的な論文はロシア国内では発禁になるか、大幅に修正されてしまいました。しかし、それでも彼の思想の支持者は海外も含め徐々に増えて、彼に直接協力する人も現れました。彼を一番悩ましたのは、昔の貴族の考え方を捨てきれない妻ソフィヤとの言い争いでした。二人は愛し合っていたので、トルストイは多くをソフィヤに譲歩せざるを得ませんでした。そしてトルストイが82才の時、既に病気で相当弱っていたにもかかわらず、行く当てもないのに家出をしてしまい、列車の中で倒れ、小さな駅舎で帰らぬ人となってしまいました。

私も読んでいて、彼が思想的な論文を発表する度に、それに賛同して運動を起こそうとした人達が逮捕され、処刑されたことを知り、彼の言行不一致に苛立ちを感じていたのですが、その根本原因が奥さんにあったのだと知り、やむを得なかったのかなと思いました。そういえば、この部分に焦点を当てた「ソフィヤの選択」という映画を家内と観たことを思い出しました。

ところで、日本の文化人として初めてトルストイに会ったのは、(1894年)小西増太郎という神学校の留学生で、老子の「道德経」をロシア語に二人で翻訳しています。1906年には徳富蘆花が和服姿でヤースナヤを訪問し、一緒に水浴などもして5日間も滞在し、日本でもトルストイを詳しく紹介しています。

(注)この紹介文は世界伝記文庫「トルストイ」(米川哲夫)によっています。

総合判断力で日本を導いた福沢諭吉

福沢諭吉は一番大きなお札(1万円)に肖像が印刷されているので相当偉い人だということは誰でも知っていますが、具体的に何をした人かということになると、慶応大学の創立者位しか知らない人が多いでしょう。私もそうでした。世界伝記文庫の2番目に取り上げられていたので、土橋俊一氏の書をもとに、ここに短くまとめて御紹介しましょう。

修業時代

福沢諭吉は大分県の中津藩という小藩の足輕の次男として1834年に生まれました。当時父は大阪にあった藩の蔵の番人をしていた関係で、諭吉の生誕地は現在の大阪大学の校内になっています。

諭吉が3才の時、父が亡くなったので、母子6人全員中津へ引き上げました。家督は兄三之助が相続しましたが、子供達はまだ小さいので郷里で教育を受けることになったのです。諭吉は子供の頃から酒が大好きで、母親から「酒を飲ませるから」といわれると、いやな家事も喜んで手伝う程でした。何でも良くできる子でしたが、水泳と木登りは苦手でした。

中津に残った論吉は、叔父の所に養子に出されていましたが、兄のすすめもあり、20才の時長崎に勉強に行くこととなります。

砲術家山本氏の書生となりながら、オランダ語を学び、蘭方医の初歩を身につけていきます。

論吉の学問の進歩が早いため、一緒に来ていた中津藩家老の息子の妬みを買って、その企みで長崎に居られなくなった論吉は大阪まで来て、父の跡を継いでいた兄のすすめで大阪で緒方洪庵こうあんの私塾である適塾に入門します。

論吉が23才の時、兄が病気で亡くなり、論吉が家督を相続することになります。しかし、再遊学の念やみがたく、強引に母を説得し、刀など家に残っている財産全てを売り払い、借金をゼロにして、再び洪庵の適塾に戻ります。24才で塾長になり、生理学、医学、物理学、化学などの原書を読むかわら、さまざまな実験を試み、学問における実証主義の重要性を認識していきます。

この年に論吉は断酒を決意するのですが、気を紛らすために始めたたばこがやめられなくなり、断酒にも失敗、論吉としては全く面目ない結果に終わってしまいます。

25才の時、藩の命令で江戸勤務となりますが、この年（安政5年）に、10年後の慶応から明治に年号が変わった年に規模を拡大して慶應義塾となる小さな蘭学塾を開設しています。翌年、横浜を視察した時、既にオランダ語では全く通用せず、各国商社間などでは、英語が共通語となっていることを知り落胆しますが、すぐに独学で英語の学習に取り組み始めます。

27才の時、日米通商条約のため、幕府の初めての海外派遣使節を運ぶ船として、幕府の軍艦咸臨丸かんりんまるが使われることになり、論吉は何とかそれにもぐり込みたいと思いを巡らします。そして思いついたのが艦長である木村摂津せつ かつみの守の従者として同行するというもので、早速申し込んでみると、多少英語が分かる論吉なら心強いとすぐOKとなり、見事同行が許されました。

この初めての洋行で論吉は誰よりも多くのことを学び、わけても中浜万次郎

と親しくなり、一緒にウェブスターの辞書を買って帰ることができたことは大きな収穫でした。そして帰国後、幕府の翻訳方に雇われます。

28才で同じ中津藩士の次女錦と結婚しますが、この伝記の中には、奥さんの話はこれ以外全く出て来ません。

成果の結実

29才の時、幕府のヨーロッパ視察の正式随員として丸1年かけてフランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガルを視察しています。また34才の時には幕府の軍艦受取委員の随員として再びアメリカに行き、今度は半年かけてニューヨーク、ワシントンなど東部の諸都市を視察し、彼が幕府体制では実現できないと思っている議会制民主主義、郵便制度、警察制度、教育制度等についてもできるだけ詳しくその仕組みを聞き取り、関連する原書を沢山購入して帰りました。

当時、幕府側にも倒幕側にも欧米のシステムに通じている者は諭吉の他に勿論居ませんでした。しかも彼はそれらを分かり易く表現する表現力と、自分が出来ることは率先して実行してみせる実践力を備えていました。実践力の一例が塾生の自立を旨とする慶應義塾とどの政党にも偏らない不偏不党の時事新報の創設・発行です。諭吉はどこからも借金せずに実現しています。

表現力、文筆力の方では、諭吉は10冊以上の書物を書いています。中でも「西洋事情」、「学問のすすめ」、「文明論の概略」の3冊は多くの国民に読まれ、わが国民主義の父といわれているゆえんとなっています。

彼は自分を学者と言っていますが、特筆するような発明発見はなく、また明治維新で特定の変革のリーダーを務めた実績もありません。彼は陰の力として政治家や国民を導き、不可能と思われた日本の民主化、資本主義化をまがりなりにも実現にこぎ着けたまさに英雄といって良いでしょう。

論吉的な人の必要性は、現代の社会でより一層高まっています。何事にも細分化、専門化していこうとする近代科学では絶対文明の将来は見えて来ません。既存の敷居を取り払い、物事を広く横断的に眺めて初めて見えてくるものです。今こそスペシャリストだけでなく、それ以上に総合的判断のできるゼネラリストが求められる世の中になっていることに私達は気が付かなければなりません。まずはゼネラリストが食べていける社会にすることです。

(注)この紹介文は世界伝記文庫2「福沢論吉」(土橋俊一)によっています。

まさにマルチタレントだったエジソン

少年時代

エジソンは小学校に入る前に、友達にガスを吸わせて空を飛ぶか否か実験しますが、友達はひっくり返ってしまい、入院してやっと命をとりとめます。

小学校では校内にあるガラクタを集めて1人で遊んでいました。学校側では手を焼いて、彼を3ヶ月で退学させてしまいます。それからは母親1人による教育が始まります。母親はかつて先生だったので、優しくて厳しい良い先生になりました。

ここにエジソンの父親のことはあまり出て来ませんが、祖先はオランダ系の移民で、カナダで農場を営っていました。息子のサムエルはエリー湖のほとりでホテルを営っていましたが、その時、評判の良い学校の先生だった母と結婚しました。そしてアメリカのミシガン州ポート・ヒューロンに移住し、穀物と材木の売買を始めました。1人っ子のエジソンとの3人暮らしには何とか間に合う稼ぎはありましたが、息子の教育は母親任せでした。

母はエジソンに、自分の実験費用は自分で稼ぎ、疑問はまず自分で調べ、考

えるように仕向けました。このことは、小学校にろくに行っていないエジソンにとって相当に無理な要求でしたが、彼は人が変わったように勉強し始め、小学校のテキストはどんどん進んでしまい、科学の方法論であるパーカーの名著「考え方のテキスト」なども読破してしまいました。そしてそこに書いてあることを自分で実験してみたくになりました。

まず実験室ですが、物置になっている自宅の地下室を整理して自分の実験室にし、地元の新鮮な野菜を積んだ荷車を引いて町へ売りに行き、帰りにその利益で実験器具や薬品をそろえていきました。

そのうち彼は、もっと効率の良い方法はないかと考え、地元のポート・ヒューロンと大都市のデトロイトを往復する鉄道に乗せてもらい、車内で新聞配達をすることになります。昼間はデトロイトの図書館に通って色々な科学の本から学び知識と理解を深めます。それだけでなく、車掌さんに頼んで、今は誰も使っていない休憩室を自分の実験室用に借りてしまいます。かくして小学生から中学生にかけての年頃の少年が自らの実験室を二つも持つことになりました。

彼の夢はどんどんふくらみ、15才の時には週刊誌「ヘラルド」を1人で発行することになります。彼はそれに必要な技術として電信の技術を学び、近所の友人との間で電信が使えることを確認します。

彼はいつものように車内でアルコールを使って実験をやっていましたが、その時たまたま大きな揺れがあって棚に置いてあった燃えやすい燐のピンが床に落ちてしまいました。あっという間に炎は燃え広がり、彼があわてて上着を脱いで火を消そうとしたのがかえって良くなかったのでしょうか、他の薬品も払い落としてしまい、車掌が駆けつけた時は実験室内はもうもうたる煙と悪臭で充満していたのですが、2人の力で火は何とか消し止めることができました。

しかし、車掌の怒りは治まりません。いきなりエジソンの横っ面を大人の力で叩きつけました。その衝撃で彼の左耳は生涯難聴になってしまいました。し

かし彼はそれにもめげず発明家の道を突き進みます。

ここで特筆すべきことが一つあります。エジソンが列車内の実験室から追い出された駅で彼は新たに新聞売りの商売を始めていたのですが、どうい理由か待避線に止めてあった1台の貨車が動き出し、その下の方で遊んでいた3才になる駅長の子が今にも轢かれそうでした。それに気付いた大人達は自分の身の安全を考えて動こうとしません。その時1人の少年が線路に飛び出し、その子を救い上げました。その少年がエジソンで、駅長に大変感謝されたことはいうまでもありません。そして駅長は彼に電信技術を教えてくれただけでなく、17才の時、正式の電信士としての就職口も世話してくれました。

それから4年間彼は親元を離れて電信士として働くかたわら、新しい科学雑誌が出る度にその実験に追われていました。ある時、実験に夢中になり、つまずいて硫酸を床にこぼしてしまい、鉄道会社を首になってしまいます。彼はひょう然と故郷ポート・ヒューロンに戻って来ました。父母は「誰にだって失敗はある。成功との分かれ目はそれを生かせるかどうかにかかっている。」と言ってしばらく休養させてくれました。そしてやがてボストンのウェスタン・ユニオン会社に就職のチャンスが巡って来ました。エジソン21才からの再出発です。

21才からの再出発

エジソンは21才の時、早くも議会での電気式投票記録装置を発明しましたが、これは見事に失敗しました。装置としては完璧でも、投票は時間が掛かるところに意味があるということで、「無用の長物」といって退けられてしまいました。彼は発明は使われて初めて意味があるということを経身にしみて感じたものでした。

その後次々に発明しては特許を取っていき、その数は1,300を越え、それ

が多方面にわたること、製造業、撮影所、鉱山の経営にまで手を出すなどまさに史上最高の発明家であると同時にマルチタレントでもありました。エジソンの年譜によって年齢順に主な発明品及び特許をみると次の通りです。

- 21才 電気式投票記録装置の発明
- 23才 株式相場表示器の発明
- 24才 実用タイプライターの発明
自動送受信装置と印刷電信機の改良
- 25才 四重電信機の発明
- 27才 電話送話器の発明
- 30才 鑑（ろう）管式蓄音器の発明
- 32才 白熱電燈の発明
- 33才 白熱電燈の付属品、器具、装置などの発明
新式発電機の発明
磁気選鉱法の特許
- 42才 映画の発明
- 44才 映画の撮影機の発明、磁気選鉱機の発明、
蓄音機の改良
- 62才 蓄電池の発明
- 71才 雑草の中からゴムを取る方法の発明

エジソンは偉大な人格者であると同時に大変な努力家でした。多くの人々が彼を稀に見る天才と称えたのに対し、「天才は1パーセントのインスピレーションと99パーセントの努力のたまものである。」と答えた彼の言葉は、彼の生涯を最も良く物語っていると云えるでしょう。彼は1931年に84才で亡くなっています。

ラジオやテレビは真空管ができてから発達したのですが、真空管も彼が発

見した「エジソン効果」といわれる現象がきっかけとなって誕生したものですし、現代のエレクトロニクスやIT製品も元をたどればエジソンにまで遡れます。エジソンはまさにIT革命の祖父と言っても良いでしょう。

(注)この紹介文は世界伝記文庫「エジソン」(片方善治)によっています。

早く死に過ぎたゴッホ

少年時代

フィンセント・ファン・ゴッホは、1853年にベルギー国境に近いオランダのズンデルトという小さな村に牧師の長男として生まれました。

実は同じ名前の兄がいたのですが、死産だったのです。母は死産だったのは自分のせいだという思いが強く、そのためかゴッホに愛情が向くことはなく、ゴッホの方からも母を慕う気持ちは起こりませんでした。

ゴッホは小さい頃一人で森に遊びに行き、小鳥や小動物の生活を眺めていたり、汚れた身なりをした村の子供たちと遊んで来ては粗野でだらしない身なりで帰り、母に叱られるのが常でしたが、一向に改める気はありませんでした。

ゴッホは父のことは尊敬しており、日曜日に4つ年下の弟テオと教会に連れて行ってもらい、キリストの教えを父の口から聞くのを楽しみにしていました。そして大きくなったら父のような牧師になるのだと無意識のうちに決めていました。

ゴッホは近所の人たちからは、愛想のない可愛くない子とされていました。自分が悪いとは思っていませんでした。

11才になって紳士を育成するための4年制の寄宿学校に入れられましたが、牧師になるためには必要だと抵抗なく受け入れました。ところがクラスメート

からは気味が悪いとすっかり敬遠され、給食も教室の隅で一人で食べるようになってしまいました。ゴッホは実際よりはるかに年をとって見え、趣味が狭く、ギラギラする目のうえ態度は頑^{かたく}なで、着る物は野暮ったく、しかもややどもりで、友達もいない内向的な人間になっていきました。

16才で卒業するまでに、ゴッホはまさに自分の悩める感情の悪循環に陥ってしまったのです。孤独であるために荒っぽくなり、荒っぽいために友達が寄りつかないのです。この悪循環が彼の生涯につきまとい、彼の生涯の節目、節目で悪い方へ転がる原動力となるのでした。

それでもゴッホは、小さい頃から父親の姿に寄せていた夢は捨てませんでした。父親のように周りの人達に奉仕することを理想とする彼は、今でこそ他人と満足に付き合えないけれど、そのうちきっと高貴な生活をして見せると自分に誓うのでした。

彼は寄宿生活の中で、少年には理解しきれないような難しい本を読み過ぎたために、彼の考えにはいくつもの矛盾^{むじゆん}が含まれていましたが、彼はそれに気付くこともなく、両親の元に戻って行きました。

画家を目指すまで

ゴッホが家に戻ったのを歓迎したのは弟のテオだけで、両親は16才のゴッホが以前にも増して反抗的になり、これではとても他人を愛することが必要な牧師の仕事は無理と他の仕事を探し始めました。たまたま叔父が、ゲービルという繁盛している立派な画廊で高い地位に就いていたので、息子のために仕事の世話を頼むと、オランダの大都会のハーグのゲービルで働けるようにしてくれました。それをゴッホに話すと大きい都会にも興味があったし、絵の好きだったゴッホは抵抗することなく了承しました。

この頃から弟テオとの手紙のやりとりが始まり、それは生涯続くことになり

ますが、兄弟の間で本心を吐露した手紙の交換が続くということは、非常に珍しいことではないでしょうか。

グービルではゴッホはあまりダサイ格好はしませんでした。画商は画家からはした金で作品を買い上げ、それを高い金で客に売りつける社会の寄生虫のようなものだと思っていたので、客が買いたいという絵よりも自分が好きな絵を売り込んでしまう、画商としては大変困った性癖がしばしば出てしまいました。それでも重役の甥だということで初めのうちは表立って問題にはなりません。

ゴッホが20才の時、グービルのロンドン支店に転勤になりましたが、同年に弟のテオもグービルのブリュッセル店で働き始めました。このためゴッホ兄弟の結びつきは一層強いものになりました。ゴッホはその頃まだ自分が画家になるとは思っていませんでしたが、テムズ川沿いを散歩し、水辺の風景が時間と共に色彩を変えていくのをじっと眺めているのが大好きで、テオへの手紙に何枚もスケッチを添えて送りました。

ゴッホはロンドンの保育園を兼ねた下宿の世話をしてくれている女性に初恋をしますが、片想いに終わり、心に大きな傷を負ってしまって一旦両親の元に戻ります。げっそりやせてしまったゴッホを心配した両親は、ロンドンの女学校に入学する妹同伴でグービルに復帰させますが、店の仕事に身を入れないのでパリ店に配転させられます。しかしパリ店でもうまくいかず、ゴッホはついに4年間世話になったグービルを辞めさせられてしまいます。

以来3年間、ゴッホは現代でも考えられないほど職を転々とします。まずイギリスで小学校の代用教員となり、初等数学、フランス語、ドイツ語の教師となりますが、数ヶ月で辞めさせられ、オランダで書店の店員となりますが、ここでも聖書に読みふけったり、スケッチに夢中になったりして店を辞める羽目になります。

次いでアムステルダムで牧師になるための受験勉強に入りますが試験に失敗

し、一旦家に戻ります。そして受験のないベルギーの福音伝道者を教育する学校に入り、半年後にやっとベルギーの炭坑での伝道者の仕事を得ます。ゴッホは遂に自分の夢が叶ったと自分流のやり方で一生懸命に仕事に励みました。相手の人数や場所に関わりなく説教するし、下宿は炭坑夫の家族以上に貧しい家を借り、服装は炭坑夫以上に汚れた粗末な服を着、時間があれば炭坑で働き、自分が持っているものは惜しげもなく施し、自分としては神に仕える牧師としてこれ以上のことは出来ないという限界まで奉仕しました。

ところがどうしたことか、半年でクビになり、うちひしがれて両親の元に帰りました。炭坑夫たちからは、牧師らしくない単なる気遣いと見なされたことが根本原因で、先輩牧師たちからもゴッホのやり方は行き過ぎと評価された結果でした。両親からは家名を汚したと叱られ、弟のテオだけが既に27才になっていたゴッホに今からでも遅くはないから、本格的に画家を目指したらと奨めてくれました。

最初の自信作が完成するまで

ゴッホ自身ももはや自分の能力で世の中のためになれるのは絵だけだと思い、ブリュッセルに行って美術学校の試験を受けますが、不合格になってしまいます。普通の人間はこれだけ世の中に痛めつけられると自暴自棄に陥ってしまうものですが、ゴッホは常に自分は正しく世の中が間違っていると確信しており、しばらく落ち込んでも必ず新たなエネルギーが湧いてくるのでした。

入試に失敗したブリュッセルでも、物怖じしないゴッホは当時有名になっていた画家たちと対等に芸術論を戦わせ、ラッパルトとは特に親しくなって、彼のアトリエと一緒に使わせてもらい、ゴッホが実物の写生が出来るようにモデルを探すのを助けてくれさえしました。

絵への情熱が高まるにつれ、ゴッホには終生持ち続けた「画家達が集団で生

活し、互いに影響し合い才能を伸ばしていく」という理想が既に芽生えていました。しかしラッパルト以外は皆その意見に反対で、怒ったゴッホはまた両親の元に帰ってしまいました。

その間にはるばるラッパルトが訪ねて来てくれたので、両親はこういう人が息子の友人になるくらいだから、画家になるという息子の夢は今度こそ本物かも知れないと半分は信用して、ゴッホに^{つら}辛く当たることは大分減りました。

この頃のエピソードを1つ紹介しましょう。ゴッホは従妹のケー・フォスが旦那に先立たれ、小さな男の子を連れて一時ゴッホの家に転がり込んで来た時、ゴッホは一目で彼女に惚れ込んでしまい、まず子供と仲良くなると、次いで彼女を追いかけ回すようになりました。それをうっとうしがった彼女は、子供を連れて実家に帰ってしまいました。ゴッホはアムステルダムの子供の実家まで追いかけていき、面会を断られると、ランプの炎にこぶしをかざし、我慢できる間だけでも彼女に会わせてくれと家人に頼みました。結局はランプの火を消され、ゴッホは追い返されてしまうのですが、このような行動の中にも尋常でないゴッホの性格が出ているでしょう。女性に関してゴッホはこの後も何回か問題を起こしています。

31才の時、母が乗合馬車から落ちて腰を骨折し、1年近い療養が必要になった時、仲のあまり良くなかったゴッホが献身的な看護をし、気が狂った浮浪者のように思われていたゴッホがやっと名誉回復したのですが、翌年父が急死してしまいます。そして父の後に来た牧師がゴッホを無神論者だといって村人達にゴッホのモデルとなったり、アトリエとして部屋を貸さない方が良いと注意しました。その結果ゴッホはまたも村人達との間がすっかりいなくなってしまうました。

丁度その頃、ゴッホはプロの画家としての処女作「ジャガイモを食べる人たち」が完成したので、弟のテオに見せたのですが、テオは色調が暗すぎるといい悪い評価は得られませんでした。ゴッホはもう一度絵の勉強をしておそ

うとベルギーのアントワープに行き美術学校に入りますが、教え方が気に入らないと1ヶ月で退学してしまいます。

画家としての最盛期

ゴッホは手許にあったデッサンなどを安値で売って何とかパリまでの汽車賃を作ると、早々にアントワープを去り、パリのゲービル画廊に勤めている弟のテオの下宿に転がり込みました。久し振りにゴッホをみたテオはあまりにやつれてみすぼらしいゴッホの姿に驚き、まず服を買ってやり、歯の治療をさせ、新進の画家が勉強しているコルモン先生のアトリエで制作に当たらせました。

ゴッホの進歩的な考え方は、次第にコルモンのアトリエに集まる若手の画家たちの信奉するところとなりますが、ゴッホはコルモン先生とはそりが合わず、すぐに決別してしまいます。その時ゴッホは既に33才になっていました。ゴッホは弟のテオに頼んでモンマルトルの小高い場所に下宿を移してもらい、狭いながらも始めて自分のアトリエを持つことが出来ました。

ここでゴッホは自画像、静物、モンマルトルの風景など多くの作品を描いています。それらの作品は、日本の版画の「明るくてこまやかな色彩」や、少しずつ評価されだしたモネやルノアールなどの初期印象派の「明るい色調の絵」の影響を多分に受けています。

パリは画家にとっては永遠に刺激しあえるパラダイスだと思っていたゴッホは、慣れてくるにつれて実情は大分違うということが分かってきました。同じような画風の作家同士でも実際には仲が悪く、酒場で飲んでも、その場にはない人の悪口ばかりで、まともに聞いていると、ゴッホが尊敬できる画家は一人もこの世に存在しなくなってしまいます。

ゴッホは次第に深酒をするようになりますが、自分の絵は一枚も売れません。モデル代も払えなくなったので、街なか^{まちなか}にイーゼルを持ち出し街中の人々をモ

デルにしだしたのですが、憲兵につかまり、争いになってテオの店に連れ込まれる始末です。兄の才能を信じて疑わなかったテオもそろそろ我慢の限界に近づいていました。

ゴッホは意見の合わない画家たちのいるパリ、よどんだ空気と雑踏の街パリを離れ、35才の時1人アルルに移り、明るい太陽の下で、「ひまわり」、「種をまく人」、「アングロワのはね橋」などを描きます。しかし、直ぐに創作意欲に行き詰まり、プロヴァンス地方の代表都市アルルと一緒に新しいアトリエ村を作ろうと友人のベルナルや尊敬する先輩のゴーガンにも手紙で呼び掛け、弟テオにも経済的な支援を頼みます。テオは交通費や最小限の生活費を支援する代わりに、アルルでの作品は自分が勤めている画廊で一手に販売するという約束でやっとゴーガンにアルル行きを承諾させます。

しかし、個性の強い画家2人の共同生活はたちまち行き詰まり、ゴーガンが荷物をまとめてパリへ帰ろうとするのを見ると、逆上したゴッホはカミソリ（現在の安全カミソリではなく理髪店で使っているもの）を持ち出して追いかけます。ゴーガンに「何をするか！！」とどやされると、自分の家に駆け戻り、衝動的に自分の片耳をそぎ落としてしまいます。

ゴッホは出血多量のため死にかけますが、2週間の入院で退院し、「耳を切った自画像」を描きます。しかし、アルルでは気の狂った凶暴な人物として扱われ、当時としては珍しい修道院を改造したサンミッシェルの精神病院に入院させられます。そこでも彼は「糸杉のある麦畑」、「星月夜」などを描きます。やがて退院するのですが、安心して制作に当たれる場所を求めパリ近郊のオーベールで開業医をしているガッシュ博士を頼って行きます。ガッシュ博士は自らも絵を描き、ゴッホの良き理解者として安い下宿を世話すると同時に、暇さえあれば一緒に制作するなどゴッホにとっては楽しい日々でした。当時ゴッホはライフワークともいえる「プロヴァンスの印象」という何点かで1組の絵となるシリーズを制作中だったし、生涯にたった1点「赤土のブドウ畑」

が37才の誕生日の直前にまともな値段でテオの店で売れたこと、テオの長男にフィンセントというゴッホと同じ名前をつけたことをテオの手紙で知ったゴッホは気分的にも、創作意欲の点でも上々だった筈ですが、通説では丁度その時に、ゴッホはオーベールの野原でピストル自殺をし、37才の短い生涯を閉じたことになっています。

ゴッホ自殺の疑問

ところが先日のテレビでフランスのゴッホ研究者が、ゴッホの死は単純な自殺ではなかったということを強力に主張しているのを聞き、私もその方が筋が通っていると思いました。彼の仮説は以下の通りです。

弟のテオが叔父が亡くなって後ろ盾を失い、画廊グービルのパリ店でゴッホの作品を置いてもらえなくなったこと、結婚して長男までもうけてお嫁さんとゴッホの支援を巡って言い争ったことなどから、もともと肉体的にも精神的にも弱かったテオが、限界まで追い詰められ、ゴッホの目の前で詫びた上でピストル自殺を図ろうとしたのを、ゴッホが止めてピストルの奪い合いになり、ゴッホが敢えて銃口を自分に向けて発砲したというのです。しかも自殺なら急所を狙える筈なのに腹部に1発発射したきりで下宿のベッドに戻り、ガッシュ博士とテオが見守る中で「これでいいんだ」というのが辞世の句だったといえます。さらに凶器となったピストルは発見されていないし、弟のテオも間もなくオーベールで亡くなり、兄と一緒にオーベールに埋葬されています。

いずれにしてもゴッホが悲劇の天才画家であることには違いはありませんが、特にその分野が芸術である場合、その芸術家がどの時代に生きたかということが、その人の生涯を大きく左右すると言えるでしょう。

(注)この紹介文は、主として学習研究社「ゴッホ」(アラン・オナー)によっています。

家族でノーベル賞を3回もらった キューリー夫人

少女時代と結婚まで

後にキューリー夫人となるマリーは、兄1人、姉3人の末っ子としてロシア支配下のポーランドの首都ワルシャワで1867年に生まれました。母は小さな女学校の校長先生で、その女学校の一室を借りて住まいとしていました。父は男子中学校の理科の先生をしていたのですが、ロシア人に仕事を奪われてくびになってしまいました。

生活に困った両親は、小さなアパートを借りてそこを下宿屋兼塾として、一家もそこに引っ越しました。マリーは食堂に寝椅子を持ち込んで寝て、朝5時半には学生の食事の邪魔にならないように寝椅子をかたすという生活になりましたが、不平も言わずに耐えました。

マリーが8才の時、長女が腸チフスで、10才の時母が結核で亡くなりました。マリーは悲しみ、神を恨みましたが、一方で自分がしっかりしなければと勉強に励み、国立の女学校を一番で卒業しました。彼女はさらに勉強を続けたかったけれど、当時のポーランドには女性の入れる大学はありませんでした。

それより前に、次女ブローニャが医者になるためにパリに留学したがついていました。そこでマリーとブローニャとの間に次のような約束が出来上がりました。「ブローニャが留学中の資金不足については、マリーが田舎で住み込みの家庭教師をして送金する。ブローニャが医者として稼げるようになったらマリーの留学の援助をする。」というものでした。そしてマリーはいろいろ嫌なことがあったにも拘わらず4年半にわたって住み込みの家庭教師を続け、父のいるワルシャワへ戻ってきました。

マリーはその間も独学で自分の好きな物理、化学の勉強を続けていました。ワルシャワに帰っても通いの家庭教師は続けていましたが、その頃いとこのジョゼフ・ボグスキーが小さな学校を作っていて、物理、化学の実験室も備えていましたので、マリーは彼に頼んで、実験室を貸してもらうことにしました。マリーは教科書に書いてあることを一つ一つ確かめないと気が済まない性格だったのです。

こうしてワルシャワでの生活が1年たった頃、待ちに待った次女のブローニャからの手紙が来て、彼女の家に住んでマリーが勉強する番が来たことを知らせてきました。マリーは異国での勉強に不安を持ちながらも、喜び勇んで旅立ちました。彼女は既に23才になっていました。

パリでは次女のブローニャはポーランド人の医者と結婚し、パリのはずれで小さな病院を開いていました。マリーはひとまずそこに落ち着きますが、そこからソルボンヌ大学まで馬車でも1時間かかりました。それに姉の夫がよく話しかけてくるので勉強に集中できません。そのためマリーは、大学近くのアパートの7階の屋根裏部屋を借りることにしました。その部屋はガスも水道もトイレもなく、料理はアルコールランプを使い、水は1階からバケツで運び上げるという不便な生活に入りました。

マリーはもっぱら夜の10時までやっている学校の図書館や実験室を使い、寒い屋根裏部屋ではオーバーコートを着て震えながら勉強に専念しました。その結果、2年後マリーは何と一番で物理学部を卒業できました。そしてマリーはワルシャワで父親や兄と楽しい夏休みを過ごすことができました。

その後、マリーはさらに物理学の勉強を進めるためには数学の勉強をしようとパリに戻った頃、マリーは知り合いの物理学博士から、ピエール・キュリーという8つ年上の物理学研究者を紹介されます。彼はパリの物理化学学校の研究主任で、既にすばらしい論文を発表し、重要な発見もして物理学の世界では若手の学者としてかなり名が通っていました。たちまち意気投合した二人

は物理学会や大学の実験室でしばしば会って話し合うようになりました。

そして3ヶ月もすると、マリーのみずぼらしい屋根裏の部屋にもピエールが訪れて話し込むようになります。数学の学士試験を控えて、時間の無駄だとうとうしがる筈のマリーが、今夜ばかりは会うことが楽しかったし、自分が成長しているような気にさえなりました。そして、数学の学士試験は2番で卒業することができ、前もって計画していたように、ワルシャワに戻りました。それは、祖国ポーランドの真の独立のために役立ちたいと思ったことと、年老いた父親と少しでも一緒にいてあげたいためでした。

しかし、その後もピエールからのラブレターは頻繁に届きました。その中にあった「物理学の研究を続けるのならワルシャワよりパリの方がずっと良い。その成果は祖国のみでなく、世界を変えられる」というキーワードに突き動かされ、マリーは再びパリに行く決心をしました。そして二人は結婚をします。ピエール・キュリー36才、マリー27才でした。やがて二人の間に長女イレーヌが誕生します。

研究生活

マリーは結婚しても、これまで以上に研究に没頭して博士論文を書き、男性と同じようにドクターの資格を取ることを強く望みました。西欧でも女性が博士号を狙うということは極めて珍しく、ましてや結婚後で子供もいる女性では皆無でした。

しかし夫のピエールはそれに賛同して、彼女専用の実験室を確保するために、自分が勤めている物理化学学校の校長先生と交渉してみるようにすすめてくれて、あまり使われていない小さな物置を片付けてやっと彼女専用の実験室を確保することが出来ました。また長女イレーヌの世話は、妻を亡くしたばかりで悲嘆にくれていた医者だったピエールの父を引き取って父に任せることになり

ました。

マリーは、いざとなったら自分も先生として働かなければならない時もあると考え、教員資格試験を受けたら、1番で合格しました。

次の課題は、あまり時間が掛からずに博士論文に値する成果の上がりそうなテーマを探すことです。マリーとピエールは、そのテーマとしてウランを選び、ウランが発光する光の量をピエールが開発した計器を使って測定しました。そしてウランの他にトリウムという鉱物も光を出していることが分かりました。これは大変な発見だと二人は喜んだのですが、このことは、2ヶ月前にドイツの科学者によって既に発見されていたことが分かり、マリーの成果にはなりませんでした。

マリーはさらに研究を先に進めることにしました。ピエールの計器を使えば、針の動きで「目に見えない光」を測定できるので、フィルムを現像しなければ分からない他の科学者よりはるかに有利な立場にあったからです。そして「目に見えない光」は温度や湿度等とは全く関係なく、鉱物の中に含まれるウランやトリウムの量のみによって、その強さが決まるという法則を発見しました。

ピエールはマリーの研究の価値を認め、一時自分の研究を休み、彼女との共同研究に専念することになります。そしてついに「目に見えない光」（彼等はそれを初めて「放射線」と呼びました）をウランの300倍も出す新しい元素の抽出に成功しました。ピエールはその元素をマリーの出身国ポーランドにちなんで「ポロニウム」と名付け、連名で論文を発表しました。

その頃既に二人の身体にはさまざまな異常が現れてきていました。二人は実験のために放射線を浴び過ぎていたのです。今でこそ放射線の怖さについて周知されていますが、当時は科学者の間でも全く意識されていませんでした。二人は食事をする間も惜しんで、研究に没頭しました。狭くなった実験室からより広い部屋に移るために、新しく変わった校長先生に二人で熱心に交渉し、ようやくより広い部屋を確保出来ました。

二人を悩ましたのは、原因不明（実は放射線によるもの）の身体の不調のため、体調が戻るまで時々実験を休止せざるを得なかったことと、その頃までに既に発見していたポロニウムとそれより更に強力な放射線を出す新元素ラジウムの純粋な結晶体を抽出するための何トンもの鉱石を買うためのお金でした。

マリーは教員資格を生かして女子師範学校で教鞭を執るようになり、ピエールもソルボンヌ大学で教えるようになりました。そんな折、ワルシャワから「父危篤、すぐ帰れ」という電報が届き、マリーはすぐ駆けつけたのですが、残念ながら間に合いませんでした。

マリーへの報償

まず第一の報償は、35才の時ソルボンヌ大学から、マリーが強く望み、夫にも5年以上にわたって協力してもらった研究に対し理学博士号が授与されたことです。夫ピエールの教え子も、マリーの教え子も彼女の博士号獲得を祝福してくれました。その席でピエールはポケットに隠し持った青白く輝く小さな試験管を見せて「これがマリー・キュリーの手汗の結晶ラジウムです。博士の王冠は、このラジウムによってマリーの頭に輝いたのです。」と挨拶しました。

それから半年ほどたってキュリー夫妻はストックホルムからの電報を受け取りました。それは「放射線を初めて発見したベクレル教授と、最も強い放射線を出す元素ラジウムを発見したキュリー夫妻の3人に対し、ノーベル物理学賞を授与する」という内容でした。キュリー夫妻が喜んだことは勿論ですが、夫妻はただでさえ放射能で身体を痛めつけられている上に、あまりにもしつこい新聞記者等の追っかけに閉口し、ついにダウンして授与式には出席できませんでした。ノーベル物理学賞を授与されたことで、ピエールは念願だっ

たソルボンヌ大学教授の口が回ってきて、専用の実験室も使えるようになったので、マリーを実験主任に迎えました。夫妻は物理化学学校のおんぼろ実験室に郷愁を覚えながらもソルボンヌ大学に全てを移転しました。その後間もなく次女が誕生します。ここまでは夫妻の体調不良を除いて良いことの連続でしたが、マリーが38才の時、ピエールが突然交通事故で死亡するという大変な事件が起こりました。

ピエールが、前方から吹き付ける雨を防ぐようにこうもり傘をかざしてパリの交差点を横切ろうとして、2頭立ての荷馬車にぶつかり、運悪く車輪で頭部をひかれ、殆ど即死状態で亡くなってしまいました。マリーは悲嘆に暮れましたが、彼女は一家の生活を支えなければなりません。ラジウムは放射線治療に、また夜光塗料としてあちこちで活用されはじめたのですが、キューリー夫妻は一切特許を取得していませんでしたので、そこからの収入はありません。マリーに残された道はただ一つ、ピエールの後を継いでソルボンヌ大学で教鞭を執ることでした。マリーはあちこちに手紙を書き、直接頼んで回りました。その結果、ピエールの死後1ヶ月でソルボンヌ大学の助教授の仕事にありつけ、2年後には教授になりました。このことは、男性優位の当時としては大変なことと、男女平等を実現するものとして世界中で注目されました。

44才の時、マリー・キューリーは一人でノーベル化学賞を授賞しました。46才の時フランスが第一次世界大戦に参戦し、マリーはフランスのために、また祖国ポーランドのために自分も前線に出て戦いたいと、レントゲン自動車を何台も仕立てて、野戦病院を回り、体内に残った敵弾などの位置を見定め、摘出手術の手助けをしました。51才の時、第一次世界大戦は終了しましたが、その時までマリーの研究はストップしたままでした。

長女イレヌは母親の手伝いをして戦地を回った後、パリに戻ってソルボンヌ大学で理学博士を取り、母親の研究助手をしていました。そして同じ研究所で働いていたフレデリック・ショリオと結婚し、マリーと一緒に生活するよう

になりました。そしてこの頃自分は研究の指導をすることに専念し、イレーヌ夫妻等若い人達に実験を任せていました。

そしてイレーヌ夫妻は人工的に放射線を出すことに成功し、キュリー一家に3回目のノーベル賞をもたらしました。これにはマリーの名は含まれていませんでしたが、指導をしたマリーの功績が大きかったことは明らかです。しかし、マリーは二人がノーベル賞を授賞するのを見届けることなく亡くなりました。放射線に対して特別に強かったマリーも、放射線が原因の悪性貧血のため66才で亡くなりました。当時はまだそれが医学的には放射線が原因であるとは認められていませんでした。

(注)この紹介文は、世界伝記文庫「キュリー夫人」(木村絹子)によっています。

インド独立運動のリーダー ガンジー

弁護士になるまで

モHANDAS・ガンジーは1869年にインド西部の藩主国ポールバンドルに生まれました。藩主国というのは、イギリスの支配は受けながらもインド人の王がいるインド本国とは別の小国で、当時500以上ありましたが、インドが独立した時にインドに組み入れられました。モHANDASの父はその藩主国の首相をしていました。

モHANDASが5歳の時の事です。イギリス人の役人が王宮に税を徴収に来た時、その役人があまりにも王を小馬鹿にするので、モHANDASの父がその役人を叱りとばすと、怒った役人が警察に通報して父を逮捕してしまいました。モHANDASの母は熱心なヒンズー教徒だったので、父が帰るまで断食に入ると言って食物を一切口にしなくなってしまいました。幼いモHANDASはそれでは

自分もと母に見つからないようにチャパティをポケットに押し込み断食に入りました。幸い父は1週間も経たないで元気で帰ってきました。

モハンダスが7歳の時、父はポールバンドルの仕事を弟に譲り、自分は藩主国ラジコートの首相になったので、一家はラジコートに引っ越しました。

当時インドでは幼児婚といって、一族の長老が決めた相手と子供の頃から結婚させられる習慣がありました。モハンダスも13歳の時、同じ年で、同じカーストであるパイシャ（平民、商工業者）出身のカストルバという少女と結婚させられます。そのためモハンダスは1年間学校にも行けませんでした。

モハンダスは、陸上競技や球技などのスポーツはからきし駄目でしたし、身体も小さく非常に劣等感を持っていました。たまたま兄の友人で日頃から憧れていたスポーツ万能選手と知り合い、いずれイギリス人と戦うためには、インド人もイギリス人並みの体力を持たなければ勝てないとけしかけられ、肉食主義の両親に内緒で肉食を覚えました。それだけでなくタバコも吸うようになり、ついに小遣いが足りなくなって兄の部屋から金の腕輪を盗むところまでいってしまいました。

もともと気の小さいモハンダスは、それらの秘密を自分1人の胸の内に秘めておくことが出来なくなり、一部始終を手紙に書いて病気で寝ている父の所へ行ってそれを差し出しました。父はそれを読むと涙をためその手紙を破いて、一言も叱らずに「体力だけではだめだ、知力もイギリス人以上に必要だ。」と言って反省しているモハンダスを許してくれました。モハンダスはこれ以降これまで以上に勉強に打ち込むと同時に身体を鍛えるために散歩を始めました。

モハンダスが18歳の時、父が亡くなり、自分は弁護士になるために家の近くの大学に入りました。その頃、家に叔父が来て、「インドで弁護士になっても、一生イギリス人の弁護士の助手で終わってしまう。思い切ってモハンダスをイギリスに留学させてはどうかね。」と提案しました。モハンダスはすぐその話しに飛びつきましたが、母は「家にはそんなお金はないし、イギリスでの

生活で肉食や飲酒が身につくのは困る。」とって反対しました。兄は賛成で留学費用を何とかかき集めてくれて、彼をイギリスに送り出してくれました。

ロンドン大学に入学した彼は、肉食と飲酒以外はなるべくイギリス人の真似をしようとダンスとヴァイオリンを習いましたが、全く駄目で、服装も英国風にしましたが、まるでピエロみたいで似合いませんでした。「そうだ自分はインド人なのだ」と思い直し、やっと勉強に集中することができました。

モハンダスは予定通り3年間で弁護士の資格を得ることができて無事帰国しました。留学中彼は色々な事を学びましたが、特に豊かだと思っていたロンドンにも裏通りには貧しい人々が満ちあふれ、汚い工場では子供達が長時間労働を強いられている実態にはショックを受けました。

また勉強の合間には、人はどのように生きてらよいか真剣に考え、インドの古代詩物語り「ギター」、「コーラン」、「聖書」、トルストイの「神の国はなんじの中にあり」などを読みあさりました。

南アフリカでの活動

モハンダスは比較的大きな都会ボンベイで最初のモハンダス・ガンジー法律事務所を開きました。（これ以降ガンジーと呼ぶことにします。）しかし、客足はさっぱりで、最初の仕事では法廷でも上がってしまってさっぱり言葉が出ず、ガンジーは笑いものになり、その仕事を途中で投げ出してしまいました。こんな状況では、一家の生計を支えるどころではありません。心配した兄が、南アフリカに進出しているインド人の会社の法律顧問の仕事を世話してくれました。もう失敗は許されません。

ガンジーは南アフリカで、最初からひどい人種差別を体験します。南アフリカの目的地の駅には、アブドラという社長さん自らガンジーを迎えに来てくれていました。がっしりした人の良さそうな人です。後学のためにと2人で裁判

所に見学に行くと、「おい、そこにいるのはインド人だな、裁判所ではターバンをとれ。」と裁判官らしい男に怒鳴られました。ガンジーが「ターバンはインド人にとって非常に大切なもので、それをするかどうかはわれわれインド人が決めることです。」と平然と答えると、その男は真っ赤になって怒って行ってしまいました。

またアブドラさんの会社の最初の仕事でガンジーが1人で出張した時のことです。まず列車は一等車を取り、ゆったりした座席で書類を見ていたところ、車掌が来て、「インド人は貨物車に行け」と言ってホームに追い出されてしまいました。切符を買ってあると言っても全く効果はありませんでした。次は馬車に乗り換えです。一番風の当たらない席の切符を買ったのですが、馬車が来ると御者の隣に座らせられてしまいました。そしてしばらく行くとタバコを吸いたいという白人が来て「その間どこかに行っている」と言うのです。ガンジーは頭にきましたが、1人ではどうしようもありません。やっと目的地に着いた時はもう夜で、ホテルを探したのですが、インド人を泊めてくれる宿は殆どありません。やっと1つ見つけた時には、彼は疲労でもうくたくたでした。彼は人種差別というものの実態を南アフリカで初めて思い知らされました。

そのことを目的地に着いて相手方のタイプ・シェートという社長さんに話すと「ガンジー先生、南アフリカではその位のことは決して珍しいことではありませんよ。インド人は白人と同じ歩道は歩けないし、公共の建物にも入れません。夜9時以降は通行証を持っていなければ外出できないのです。これらの規則を守らなければすぐ刑務所行きです。」

アブドラ・シェートさんとタイプ・シェートさんは従兄同士で、トラブルは情報の行き違いが原因で約1年間で解決しました。ガンジーは弁護士の仕事で初めて成功したのです。それだけではありません。ガンジーは滞在中にインド人への南アフリカの人種差別の解決に懸命に努力したことが当地のインド人の間で評判となり、ガンジーを中心とした大きな運動が起ころうとしていたので

す。これはガンジー自身予期せぬことでした。インド本国でもガンジーの帰国を待つ人々が増えていきましたが、ガンジーはまず南アフリカの人種差別問題を解決するのが先と家族を呼び寄せることにしました。

ガンジーはその後22年間もの間南アフリカでの生活が続き、妻カストルバとの間に4人の男の子をもうけます。以下に南アフリカでの特筆すべき事項を記します。

南アフリカを支配していたイギリス軍は2回の戦争をします。1回は先に支配していたオランダ軍とのボーア戦争で、新しく発見された金鉱の所有権をめぐる戦争でした。2回目は先住民のズールー族への税金をめぐるズールー戦争です。いずれの戦争でもガンジーはインド人による野戦病院を組織してイギリス軍を率先して応援しました。このことには、日頃からイギリスを良く思っていないインド人から強い反対もありましたが、これによってインド人への待遇も改善されるのではないかというかすかな期待があったのです。しかし結果はガンジーだけがイギリス本国でも有名になり、勲章を授けられるということで終わってしまいました。

失望したガンジーは、仲間達と自給自足の農場をつくり、どうしたら暴力に対抗できるかを毎日真剣に考えました。ロンドン時代に読んだインドの古い詩物語り、「ギーター」も読み直しました。そこには「全ての生き物の命は、決して殺してはならない。」と書いてありました。ガンジーはこれだと思い、全身が雷に打たれたように震えました。彼の頭に「非暴力による抵抗」の考えがひらめいたのです。

その直後「新アジア人登録法」という法律が施行されました。それによると、8歳以上のアジア人は居住許可証と指紋を押した手帳を持ち歩くことが義務づけられています。そしてこれに従わない者は投獄されるなどの罰則が科されます。困ったインド人が続々とガンジーの元に集まってきました。

ガンジーは「どんな暴力を受けても登録しないことにしよう。」と提案し、

皆それに従うことになりました。そこへイギリス軍が乗り込んできてインド人に殴りかかりました。ガンジーも眼鏡は吹っ飛び、頭や顔から血が流れましたが、誰も手出しはしませんでした。イギリス軍は拍子抜けして引き上げてしまいました。

その後もガンジー達は色々な悪法と、非暴力で戦い、次々と勝利し、ますます自信を深めていきました。

このニュースは本国のインドにも伝わり、大きな反響を呼びました。ガンジーは南アフリカでの自分の役割はそろそろ終わったとガンジー一家は1915年帰国することにしました。

インド独立運動

国民会議派ができて30年、初めはイギリスと仲良くやっっていこうという政治家の集まりでしたが、今ではイギリスの支配に抵抗する大きな力になっていました。ガンジーは一日も早く彼等に合流するために、まずインドの実態を把握したいと1人で3等列車を使って広大なインドを視察して回りました。

そして長い旅から戻ったガンジーは、身分の差別なく皆が平等に仕事を分け合う農場をつくり、そこを以降の生活の拠点としました。

次の国民会議派の会議の時、1人の貧しい農民から依頼を受け、ヒマラヤの山麓にある小さな村の救済に象に乗って行きました。そして異常に高い年貢などの諸問題を解決し、ガンジーはインドでも自分は役に立てるという自信を持ちました。

その頃、国民会議派の中心人物で若い活動家ネルーがしばしばガンジーの所に相談に来ました。第1次世界大戦で混乱している今こそ暴力で独立を勝ち取ろうというのが、ネルーの主張でしたが、ガンジーはそれを押しとどめて、今こそ非暴力による抵抗を試すべきだと主張しました。そしてどういうやり方が

あるかを昼夜真剣に考えました。

そうしているうちに戦争は終わり、50万人ものインド軍が参戦したのだから何らかの処遇改善があるだろうと誰もが期待したのですが、見事に裏切られてしまいました。戦後イギリスは自由と独立を求める主だったインド人を次々に逮捕し、言論と出版、集会の自由を完全に禁止するローラット法を施行してきたのです。

これにはさすがのガンジーも焦りました。国民全体が参加できる非暴力にはどんな方法があるのだろうか、ある晩ガンジーは夢を見ます。それは「ハルタル」という宗教行事で、全国一斉に1日休業するというものです。

1919年4月6日インド全土で「ハルタル」が実施されました。インド人が経営する全ての商店、工場、会社、役所が休業し、イギリス人はこれが自分達に向けられた抗議だと知り、大きなショックを受けました。しかし問題もありました。デリー、ボンベイ等の大都市ではイギリス人への襲撃や電線を切断するなどの暴力も起きてしまいました。そして4月13日、それへの報復と思われるが、インド人が出口が1つしかない広場でお祭り騒ぎをしている所へイギリス軍が乗り込んで一斉射撃をして無抵抗の一般市民を大勢殺害してしまいました。さすがのガンジーも我慢の限界に達しました。

リーダーとしてのガンジー

次の国民会議は、7千人もの代議員で埋まり、外には1,200人の農民であふれていました。ガンジーが会場に到着すると一斉に「ガンジー万歳」の声が上がりました。その会議でガンジーは「私達はイギリスの奴隷ではない。インド人にはもともと生きる知恵がある。踏みにじられてもまた立ち上がる力がある。」と励まし、イギリスへの非暴力・不服従を決めました。

イギリスは自国で生産した綿布を買わせようと、インドでの機織りを禁止し

ていましたが、ガンジーはチャルカというインドの伝統的な糸紡ぎ機を見つけ出し、自ら糸紡ぎを始めました。それがたちまちインド中に広まり、イギリス製の服は路上に積み上げられ燃やされてしまいました。

この不服従の運動で、ガンジー、ネルー他多くの指導者が刑務所に入れられました。獄中でガンジーは早くもインドが独立してからの「建設プログラム」を考えていました。そして釈放されると直ちに文書にして発表しました。その主な内容は①チャルカの普及などによる経済の自立、②ヒンズー教、イスラム教など宗教を越えて仲良くすること、③パーリア（不可触民）という人間扱いされない奴隷以下の階級をなくすことなどです。

しかし、1924年コハットの町では、155人ものヒンズー教徒がイスラム教徒に殺されるという悲しい事件が起こってしまいます。ガンジーは自らの命を投げ出しても両者の対立を解かなければならないと21日もの断食に入りました。日に日に弱っていくガンジーを見て1週間後、両宗派の代表が話し合っってやっと対立は収まり、ガンジーも断食をやめました。

その翌年ガンジーは、「建設プログラム」を引き下げてインド中の村々を演説して回りました。どの村でも1~2万人もの人が集まり、「マハトマ・ガンジー」、「マハトマ・ガンジー」と親しみと尊敬を込めて唱和しました。マハトマとは「偉大なる魂」という意味で、ガンジーの名前ではありません。

1928年のカルカッタでの国民会議派の大会では、イギリスからの完全独立が決議され、1930年1月26日が独立の日と決まりました。ガンジーは何かその日にふさわしい行事をと頭を悩ましている所へ、インドの有名な詩人で親友のタゴールが訪ねて来て、「君は独立の日に何をする計画かね」と尋ねました。それが良い刺激になったのか、ガンジーに1つのアイデアが浮かびました。「塩を作ろう。塩はイギリスの専売品で、しかも高い税金を払わされている。これからはインド人が使う塩はインド人が作るのだ。」

ガンジーと78人の弟子は、夜明け前に出発してダンディ海岸に向かいまし

た。道々で村人達が参加し、ダンディ海岸に着く頃には数千人に膨れ上がっていました。ガンジーは海水で身を清めると、海岸に散らばっている塩の結晶を拾い集め出しました。この話はたちまちインド中に広まり、結晶のない村は海水を煮詰めて塩を作り出しました。これに怒ったイギリスは、僅か2ヶ月の間に10万人以上のインド人を逮捕してしまいました。勿論ガンジーもネルーもそれに含まれています。しかし、インドの人々は既に目覚めていました。

1944年一緒に監禁されていた妻のカストルバが亡くなりました。共に13歳で結婚し、以来63年間夫に従い夫と共に闘ってきた妻を失い、ガンジーは身体中から力が抜けていくような気がしました。

1945年第2次世界大戦が終了し、いよいよ具体的なインド独立の形についての交渉が始まりました。まず問題がインド側にありました。ヒンズー教徒とイスラム教徒が別々の国家を作りたいと希望し、これまで同じ地域内で一緒に暮らしてきた両教徒がいがみ合い、殺し合うようになってしまったのです。まさにガンジーが恐れていた事態が現実になってしまったのです。

ついにインドはイスラム教国パキスタンを分離したまま1947年8月15日に独立してしまいます。独立記念日のお祝いに、初代首相となったネルーはガンジーのために特別席を用意しておいたのですが、ガンジーは姿を現しませんでした。あくまでも1つの国家という信念を曲げなかったのです。

ガンジーはインド独立のために16回もの断食をし、やせ細った身体にむち打って村々でいがみ合いをやめてくれるようお願いして回っていたのです。ある日、人々の前に出たガンジーを1人の若者がピストルで狙い撃ちし、遂に彼は78年の生涯を閉じました。暗殺者はヒンズー教徒の青年で、ガンジーがイスラム教徒に甘いことが許せなかったということです。

私が一番尊敬する偉人はガンジーです。多くの偉人伝の抄録を作成し終わった現時点の感想です。私はガンジーの生涯を紹介した映画を劇場とテレビで2回観ています。彼は死ぬまで自分の信念を曲げず、寸暇を惜しんで学び働き続

けました。彼の生き様はまさに芸術品と言っていいと思います。

(注)この紹介文は岩崎書店伝記人間にまなぼう「インドの独立につくした人ガンジー」

(真鍋和子)によっています。

世界中で最も尊敬されているシュバイツァー

少年時代

シュバイツァーのこの伝記は、彼の仕事を40年にわたって応援してきた日本人高橋功氏の書いた世界伝記文庫「シュバイツァー」によっています。高橋氏は日中、日米英戦争を通じて8年間も日本軍の軍医として働き、戦後自ら希望してシュバイツァーの下で働くことになった人です。

シュバイツァーはスイス系ドイツ人で、プロテスタントの牧師の家庭に1875年に生まれました。未熟児で、そのまま育つかどうか危ぶまれましたが、1年間で見事に丈夫な子に育ちました。5才の時に彼は父にピアノを習い音楽に興味を持ち出し、日曜日に父の教会で皆で賛美歌を歌うのも好きでした。聖書の教えも良く守り、「汝、殺すなかれ」の教え通り小鳥や魚を捕ることもしませんでした。

シュバイツァーの学校の成績は、音楽と歴史を除いていつも中より下で、目立つことが嫌いな少年でした。高校時代、父が学校に呼ばれて彼の成績の説明を受け、あまりのひどさに彼を直接叱る気にもなれず、結局は母親が注意したのですが、親に心配を掛けて済まなかったと反省し勉強に励んだお陰で、何とか高校を卒業できました。

シュバイツァーはベルリンにあるシュトラスブルグ大学に進学することになっていましたが、父は自分の兄が実業家として成功しているパリに寄って

くことを奨めました。彼の来訪を楽しみにしていた伯母は彼のピアノを聞き、思っていた以上に上手なことに驚き、知人でパイプオルガン奏者として有名なピドール氏に1度聞いてやって欲しいと頼んでくれました。

シュバイツァーがバッハの難曲を見事に弾くと、ピドール氏は音楽学校に入って彼の授業を受けるように奨めてくれました。シュバイツァーはそれは出来ないことを説明すると、ピドール氏は彼を特別個人的に教えてくれる事になりました。そして大学に入るまでの間に何回かのレッスンを受け、奏法の基礎を深め、彼とピドール氏との師弟愛が生まれました。

シュトラスブルグ大学では、シュバイツァーは神学部と哲学部の2人分のコースを1人で専攻することにしました。翌年19才の時、シュバイツァーは国民の義務として兵役に就きましたが、大変理解のある上官で、軍務に支障のない限り大学の授業に出ることを認めてくれました。彼は牧師の子として神学部は3科目の試験に合格すれば奨学金をもらえることになっていましたが、軍務に就いている者は1科目だけで良く、彼は「聖書学」に合格して奨学金を受けながら神学を学ぶことになりました。

シュトラスブルグ大学時代

高校卒業までは音楽以外は目立った存在でなかったシュバイツァーですが、シュトラスブルグ大学に入学してからは、人が変わったように学業の成果が上がるようになりました。かってゲーテが下宿していた同じ部屋に下宿したことが縁となってゲーテの研究に取り組み、後にドイツで新設されたゲーテ賞の第1回受賞者となりました。彼は24才でシュトラスブルグ大学を卒業と同時に哲学博士を取得し、翌年には神学博士を取得した後、立て続けに「カントの宗教哲学」、「イエス小伝」、「バッハ」を出版した上に27才でシュトラスブルグ大学の神学科講師となるなど、1人で何人分もの活躍をするようになりま

す。

そればかりではありません。シュバイツァーはパイプオルガンとピアノの名演奏家であるばかりでなく、フランス語とドイツ語で出版された「バッハ」は、現在でもバッハ研究者にとっては必読の書になっており、有名な寺院に手作りのパイプオルガンが残っているのは、1909年にシュバイツァーが起草した「国際オルガン製作条例」が決定をみたお陰であると言われていました。

シュバイツァーは、大学で哲学を教え、牧師やパイプオルガンで教会の仕事をしていたので、社会的にも、実収入の面でも普通の人なら十分満足できる状況に達していたのですが、イエスがナザレを救った話の出て来るイエスの研究から、難病に苦しみ文化の遅れているアフリカの人々を自ら直接支援したいと考えるようになりました。それには医療の面が最適であると思い、これまで勉強してきた哲学、神学、音楽といった文化系とは全く異なる自然科学系の医学を一学生となって6年間勉強するという決意を表明しました。

これには彼を知る人々は皆猛反対で、中には売名行為だといって中傷する人までいましたが、そんなことで決意をひるがえすシュバイツァーではありません。彼が行こうとしている赤道直下のアフリカでは、細分化された専門医では対応できません。どんな病気にも対応できる総合的医療の医師が求められます。

細菌学、病理学、薬物学、内科、外科、精神科など、いわゆる臨床医学の幅広い勉強が必要です。彼は持ち前の努力でそれらを終了して36才で医学部を卒業し、その直後「イエス—その精神医学的考察」という論文で医学博士となりました。そして2~3年前から彼の論文の整理をしたり、印刷の校正をしたりして秘書的仕事をしていたヘレーネと結婚したのもその頃です。

アフリカでの医療活動時代

アフリカでシュバイツァーが選んだ場所は、西海岸の中央部にあるガボンと

いう国のランパネラという村でした。そこには既にカトリックの牧師が布教に行っていたので、カトリック派の人達からプロテスタントで進歩的なシュバイツァーに行かれては困るといって反対されました。そこで彼はガボンでは一切宗教活動は行わないという条件をのんでやっと渡航を許可されました。

当時、ランパネラの病気の殆どがマラリヤと脱腸とライ病でした。彼等夫妻の着任後荷物をほどく間もなく患者が押しかけ、忙しい日々が始まりました。都会と違ってランパネラの単調な生活を救ってくれたのは、彼の知人達が有名な製作者に特注して、餞別に送ってくれたパイプオルガンのペダルも取り付けられるピアノでした。彼は時間の許す限りピアノを弾き、アフリカにいる間に腕前が落ちないように努力しました。

彼が39才の時、第一次世界大戦が始まり、ドイツ国籍のシュバイツァー夫妻は、フランス領だったガボンでは敵国性として捕まり、黒人兵に監視される捕虜生活に3年間入ります。そしてパイプオルガンの恩師ピドール等文化人の軍部への嘆願もあって、フランス国内にあった捕虜収容所に移され、さらに1年間の収容所生活を送ります。そこはひまわりの画家として有名なゴッホがかって療養生活を送った僧院でもあり、ガボンの収容生活よりは大分ましで、シュバイツァーはその人達の診療にも当たりました。

そしてやっと捕虜交換ということになり、シュバイツァー夫妻もドイツに帰国するのですが、ヘレーネ夫人は体力が弱っていたのでシュトラスブルグのお里へ一時帰し、彼は単身帰国しました。そこで、母がドイツ軍の軍馬に蹴られて死亡するという不幸な事故があったことを知り、戦争を憎む気持ちを一層強く持つようになりました。

シュバイツァーは静養を兼ねて43才から48才までシュトラスブルグの病院に勤め、聖ニコライ教会の副牧師となって生計を立てていましたが、その後再びアフリカ行きを思い立ちます。それまでの間に娘レナが誕生した各地で招かれて講演をし、またパイプオルガンの演奏会を行って大好評を博しました。

一方で「水と原生林のあいだ」、「文化哲学」といった本も出版していますが、彼の人生哲学の全ては「生命への畏敬^{いけい}」という言葉に集約され、少しもぶれていないと彼自身が言っています。

2度目のアフリカ行き

彼が医師である助手を連れてガボンのランパネラに着いてみると、彼の病院はまるで廃墟と化しており、そのままでは使えません。しかも感染症である赤痢が住民の間で蔓延しており、隔離病棟を持った新たな病院が必要ということになり、少し上流側の丘の上に以前の数倍の大きさの病院を建設することにしました。シュバイツァーは黒人の労働者の先頭に立って指揮をし、自らのこぎりを挽くなどの労働に励みました。そうしないと働く癖のついていない黒人労働者は動かないのです。足かけ3年掛かってやっと新病院が完成しました。

シュバイツァーは白人の医師や看護婦も増やし、陣容を充実させて赤痢騒動をやっと収めたのですが、その頃また問題が起こりました。シュバイツァー病院がガボン中で有名になってくると、家族にも嫌われるライ病（ハンセン氏病）患者が広範囲から彼の病院に徐々に集まりだしたのです。ライ病も感染症です。患者数が百人、二百人となると、新病棟でも対応が困難です。それでライ病専用の病棟を少し離れた場所に作ることにしました。この伝記の著者高橋氏が初代のライ病棟の院長になりました。

シュバイツァーはアフリカの自分の病院で90才で亡くなる直前まで元気で働いていました。10数回ヨーロッパに帰っていますが、アフリカ滞在期間は実に50年以上に及びます。

彼は生前に色々な名誉ある賞や称号をもらっています。その主なものを挙げておきます。

- 55才 ゲーテ賞
- 57才 エジンバラ大学から名誉神学博士、音楽博士
オックスフォード大学から名誉神学博士
- 74才 シカゴ大学から名誉法学博士
- 77才 ノーベル平和賞
- 84才 ソニング賞
- 86才 ガボン政府より最高赤道星十字勲章

彼はヨーロッパに帰っても、依頼された講演やパイプオルガンの演奏に各国を駆け回り、まさに席の温まる余裕もありませんでした。それらも自分のためと言うよりも、アフリカにある病院の維持管理費を何とか自分の力で稼ぎ出そうとしていたからです。彼の病院は原則として無料で、欧米のお金持ちからの寄付金だけでは賄いきれなかったからです。彼は優秀な頭脳と強靱な体力と精神力の持ち主でした。

50才以降に出版した主な本は、「わが生活と思想」、「ゲーテ記念講演」、「アフリカ物語」、「ペリカン物語」などで、コロンビア盤で「バッハのオルガン曲」を録音、オスロー放送局から3日にわたる「核戦争か平和か」と題する大放送を行うなど、そのマルチタレント振りにはまさに恐れ入ります。シュバイツァーは何か人類にとって重要な発明、発見をしたというのではなく、その人生の生きざま全体が偉大だったと言えるでしょう。

(注)この紹介文は世界伝記文庫17「シュバイツァー」(高橋功)によっています。

三重苦を乗り越えた愛の人ヘレン・ケラー

少女期

ヘレン・ケラーは、アメリカアラバマ州のタスコンビアという美しい町の大地主ケラー一家の子として生まれました。本当に可愛い子で、昼間は近所の女の子達、夜はパーティに集まってくる大人達の人気の的で、取りっこになる始末でした。ヘレンはまるでお姫様のような存在でしたが、満2才になる直前、ヘレンは高熱を出して寝込んでしまいました。町のお医者さんに見てもらったのですが、病名も原因も分かりません。とにかく安静にしているしかないということでした。

そして何日か過ぎてある朝お母さんがヘレンのベッドに行ってみるとヘレンの熱が下がり、以前のヘレンの顔に戻っているではありませんか。直ちにお父さんと呼んで、ヘレンが良くなったことを喜び合ったのですが、どうもヘレンの様子が変わるのです。眼は一点を見つめたままだし、声を掛けても全く反応しません。町のお医者さんに見てもらおうと、眼は全く見えていないし、耳も何も聞こえていないということで、いずれ回復するかどうかは分からないということでした。耳が聞こえないと言うことは、声は出せても口がきけないということでした。

お母さんは、その場に泣き崩れて何時間も泣いていました。ヘレンの両親は、その後ヘレンを外国の名医と評判のお医者さんにも見てもらいましたが、何の効果もありませんでした。

五官とは目、耳、鼻、舌、皮膚（感触）のことですが、ヘレンが一番重要な目と耳が全く使えなくなってしまったのです。人間の身体は不思議なもので、五官のいずれかを失うと、残った感覚でそれを補おうとして、普通の人の何倍

にも強化されるということがあります。人一倍優れていたヘレンは遠く離れた調理場でどんな料理が作られているかを誰よりも早く当てたし、お母さんの服の感触でこれから外出すると分かると、いつまでも手を離さないということもありました。

そうこうしているうち、1年、2年と過ぎ、ヘレンに妹が出来ました。母親の愛情を一身に受けていた間は良かったのですが、母親が妹を常に膝の上に抱いて可愛がっているのを知り、むしゃくしゃして癩癩を起こすようになりました。手当たり次第に物を投げたり、蹴飛ばしたりし、ある日妹を思いっ切り叩き泣かせてしまいました。そういうヘレンをなだめるのにお父さんは半日も掛かりました。

ヘレンが6才になる頃には身体も大きくなり、知能も発達しましたが、それに比例して自分の思いを他人に伝えられない苛立ちも募っていきました。週1回くらいだった癩癩が、この頃には毎日、あるいは1日に数回も起きるようになったのです。両親が何とかしてあげたいと思い悩んでいた時、伯母さんからボルチモア市に大変優れた眼医者さんがいるという情報が入り、ヘレンは父と伯母さんに連れられて車でその眼医者さんの診察を受けに行きました。

結果は、「今の医学ではどうしようもないけれど、ワシントンに居られるグラハム・ベル博士（電話の発明者）がこういう子供達を助ける仕事をして居られる。」ということを教えてくれました。3人はその足でグラハム・ベル博士をたずねると、「私もお力になりますが、ボストンに目や耳や口の不自由な子供ばかりを教育しているパーキンス学院という学校がありますので紹介しましょう。」とって院長宛に丁寧な紹介状を書いてくれました。

ヘレンの父は家に帰り母と相談しました。2人は良いお話しかけれど、6才のヘレンを1人でパーキンス学院に送り込むことはできない。誰か良い先生を家庭教師として送ってもらえないかという趣旨の手紙を院長宛に出してみることにしました。

サリバン先生との新しい生活

両親の手紙に応じてヘレン・ケラーの家に家庭教師としてきたのがサリバン先生です。サリバン先生はその時20才で、パーキンス学院をその年に優等で卒業したばかりの女の先生でした。先生は眼が不自由な子でしたがボストンの眼科医に住み込みでお手伝いに入り、給料の代わりに特別の治療を受け続けた結果、正常に見えるようになりました。

ヘレンは、自分が世の中のためになれた部分があるとすれば、それは全てサリバン先生のお陰だと生涯感謝していました。

ヘレンは目が見えないので手話は使えません。それでサリバン先生はヘレンとのコミュニケーションにお互いの手のひらに人差し指で字を書くという指話を教えました。ヘレンはたちまち多くの言葉を覚えました。

サリバン先生は、ヘレンのヒステリーは両親の甘やかしが原因ではないかと思うようになり、果物畑の向こうにある今は使っていない離れにしばらく2人だけで住まわせて欲しいと両親に申し出ました。父はヘレンがかわいそうだと最初は反対でしたが、母の説得もあって小屋を片付けてくれました。

ヘレンは最初家に帰りたくてだだをこねましたが、サリバン先生もここで妥協はできないと2人の我慢比べとなりました。そしてついにヘレンは負けてサリバン先生に従順な子になりました。2人は森へ行って木の実を採ったり、川に行き釣りをしたりしてヘレンは色々なことを覚えていきました。そのうち点字の勉強も始めました。最初は単語と文章を読むことから始め、ついに自分で文章を作ることまで出来るようになりました。

サリバン先生がヘレンの所に来て3ヶ月も経たないうちにヘレンは普通の子の何倍もの事を覚えました。そして決して一度覚えた事を忘れません。その事をサリバン先生の手紙で知ったパーキンス学院の院長先生は、2人を学院に呼びたいと言ってきました。それに応じて2人はボストンにある学院にまで何日

も掛けて講演に行きました。そこでヘレンは、サリバン先生だけでなく多くの先生方や生徒と指話で自由にコミュニケーションできることを知り、大変喜びました。

やがてヘレンとサリバン先生の講演の日になり、学院の講堂はマスコミの人達や町の人達も含めて一杯になりました。2人は講壇に上がり、ヘレンがサリバン先生の手で指話で詩を書くそばから先生が声を出してそのとても長い詩を読み上げました。それは見事な詩でした。詩の朗読が終わると集まった人達はその詩に感動し、涙を流しながら8才の天使のような美しい娘と、若いきれいな先生を取り囲みました。翌る日どの新聞も2人の写真を載せて、大きく書きたてました。そして2人の名は世界に知れ渡りました。

学院には、ヘレンが読み切れないほどの点字の本があったので、毎日本を読めるのが楽しみでした。また、ボストンに来ている間に初めて海水浴に行ったのも忘れられない思い出です。いつも川で泳ぎ慣れているヘレンは、海でもすぐにバシャバシャ泳ぎ回りました。海岸では貝殻を拾ったり、カニを捕ったりしました。

秋になってヘレン達が家に帰ってくると、ケラー家の人々は20km位離れた山の別荘で過ごす計画を立てていました。ヘレンもサリバン先生も誘われて喜んで同行しました。2人はそれぞれ馬をあてがわれ、ヘレンは初めて野山を馬で駆け回りました。

ヘレンの学歴

ここでヘレンの学校での勉強のことについてまとめておきます。

まずは10才の時です。ボストンの聾啞学校（耳や口の不自由な人達の学校）で、沢山の人達が話せるようになったというので、ヘレンもそこで勉強したくなったのです。耳が聞こえなくとも目が見えれば、先生の口の動きを真似

て口がきけるようになるけれど、ヘレンは目も見えないのでそれが出来ません。サリバン先生は「たとえ無駄になってもいいから」と言って付いていてくれることになりました。

ヘレンがその聾啞学校ろうあに入学すると、年を取ったやさしい女の先生が「ヘレンよりもサリバン先生の方が苦勞することになりますよ」と言われましたが、その通りでした。目と耳が不自由なヘレンが言葉をしゃべるには、まずサリバン先生の口、舌、ほほ、のどの奥を皮膚で感じて真似する以外にありません。ヘレンは朝から晩までそれを繰り返し、2人ともくたくたにくたびれてダウンしてしまいました。

そうしてやっと夏休みまでには一通り話が出来るようになって2人で家に帰りました。駅には家中の人が迎えに来ていました。ヘレンは「ただいま、お父さん、お母さん」と立派に言いました。お母さんはヘレンにいつまでも抱きつき離しませんでした。

14才の時には今度はニューヨークの聾啞学校に入学し、さらに話し方の勉強に励みました。ヘレンは全米の女子大では一番難しいといわれるハーバード大学付属のラッドクリップ女子大を目指していました。そして見事に1回で合格したのです。健常者でもなかなか入れない難関を突破したうえ、ヘレンは正規の4年で優等で卒業（24才）しました。そのためには雨の日も風の日もヘレンと一緒に講義に参加し、ヘレンの手に先生の講義の内容を正確に指で書き続けたサリバン先生、難しいテキストを点字本に訳してくれた世界の支援者がいたことを忘れてはなりません。

ここからはヘレンの社会進出になるのですが、87才で亡くなるまで世界中を回り、目や耳の不自由な人達のために講演し、必要な場所には寄付をして回りました。ヘレンは自分に残すべきお金など頭に全くなかったので、実際にはいつも貧乏でした。盲人事業協会の資金として寄付すべきお金を集めるために、サリバン先生やその後手伝いに来たイギリス人のトンプソン夫人と共に3年間

にわたって旅をしたこともありました。

私がヘレン・ケラーのことを多少記憶しているのは、ヘレン自体(38才)が主演した映画をかって観ていたからです。

彼女が講演した大学等から贈られた賞にはアメリカのテンプル大学からとイギリスのグラスゴー大学からの名誉博士号があり、フランスのソルボンヌ大学からはレジョン・ドヌール勲章を授けられました。またアメリカ第一の新聞がヘレンをアメリカで一番立派な仕事をした4人の中の1人を選んでいました。私も彼女の生涯の概要を知ると、これはまさに適切な選出であると思います。

最後になりましたが、第二次世界大戦直前と直後の2回来日し、数ヶ月各地で講演して大変好評で寄付金も沢山集まったといえます。

(注)この紹介文は、借成社の児童伝記シリーズ「ヘレン・ケラー」(徳永寿美子)によっています。

映画初期の大スター チャップリン

1889年に後に映画界の大スターとなるチャップリンがロンドンの裏町の貧民街で生まれました。アメリカでエジソンが覗き窓式のキネトスコープという映写機を発明したのが4年後の1893年ですから、チャップリンの成長期と映画の開花期がほぼ重なります。

チャップリンの両親は、ロンドンの下町の大衆向け演芸場の役者でした。歌手や物真似の芸人としてそれなりに売っていたのですが、父は酒癖が悪くそれが原因で離婚してしまいます。母もあまり丈夫な方ではなかったので、女手1つで兄弟を育てることは大変で、2人で孤児院に入れられるということもしばしばでした。

そのうち兄は家計を助けるために船乗りになり、チャップリンは自分も何かしなければと思い母の舞台の袖で見ていると、母は急に声が出なくなり、観客

からはヤジの嵐が起きました。困った経営者は「こんな子供でも舞台を空けるよりまし」と5才のチャップリンを連れ出し「何でもいいからやれるものをやってくれ」と言って舞台の真ん中に連れ出しました。普段から母の舞台を見ていたチャップリンは、見よう見まねで歌ったり、踊ったり、パントマイムをしたりしました。

するとそれが大受けで、舞台に沢山の小銭が投げ込まれました。これでチャップリンは自分の進むべき道が決まり、一方母は現役の役者を退き、暇を見つけては自分の持っている技、特にパントマイムをチャップリンに仕込みました。それがどんなに役に立ったかは彼自身が後年述懐しています。チャップリンが9才の時、母は精神を病んで入院してしまい、いよいよ彼は自立せざるを得なくなります。

幸い彼は、才能と運に恵まれ、9才で木靴ダンスの一座に入り、「ロンドン子ジムのロマンス」や「シャーロックホームズ」で子役を演じて名子役として評判を得ると、19才でカルノー一座と契約し、アメリカ巡業にも参加させてもらうことになります。

24才でハリウッドの映画会社キーストン社で初めての映画に主演し、興行成績は良かったのですが、会社や監督の方針と合わなかったのか、チャップリンに気難しいところがあったのか、恐らく両方でしょうが、次々に会社を変わって生涯で80本以上もの映画に主演しています。

このことは結婚歴にも通じます。ミルドレッド・ハリス(2年)、リタ・グレイ(3年)、ポーレット・ゴダード(6年)というように次々にパートナーを変え、チャップリン54才の時、有名な劇作家ユージン・オニールの娘で36才年下のオーナと結婚し、やっと安定した家庭生活を送るようになります。オーナとの間には8人の子供をもうけ、彼が64才から88才で亡くなるまでスイスのローザンヌ近郊で24年間平和で幸せな晩年を過ごしました。

チャップリンの生涯を語る上で忘れてはならないことは、第2次大戦後、ア

アメリカ議会の極端な赤狩りに引っかかり、共産主義者として1952年彼が63歳の時にアメリカ本国から無期限の追放を受けてしまったことです。不幸中の幸いというか、その年は彼の最高傑作「ライム・ライト」が完成した年でした。その頃は無声からトーキーへの移行の時期で、原作、脚本、監督、主演と彼が1人で担当し、自分自身が納得するまで制作に打ち込んでいる時でした。

1972年に20年振りでアメリカ議会の誤解が解けアメリカへの再入国が許され、アカデミー特別賞を受賞します。それとは関係なく世界平和会議で国際平和賞を受賞し、その賞金をパリとロンドンの貧しい人々に寄付しました。フランスとイギリスからはいくつもの名誉ある称号を与えられました。

映画は総合芸術だといわれ、私もそう思いますが、どうも最近はあまり感動する映画にお目に掛かれていません。

(注)この紹介文は世界を変えた人々12「チャップリン」(パム・ブラウン)によっています。

人種差別運動の師 キング牧師

1950年から60年にかけて、キング牧師はアメリカの黒人差別に対して闘う公民権運動の中心として活躍しました。残念ながら、その志半ばにして1968年に暗殺者の凶弾に倒れましたが、あくまでも非暴力主義を貫いたキング牧師のメッセージは黒人だけでなく自由と平等を求めて闘っている現代の多くの人々にも参考とすべき点が多いでしょう。

少年時代

マーティン・ルーサー・キングは1929年(私より6年早い)にアメリカ南部ジョージア州アトランタで生まれました。父は黒人専用の教会の牧師で、黒

人としては恵まれた家庭の子でした。

アメリカは、南北戦争後リンカーンの奴隷制度廃止によって自由と平等を得たはずですが、キングの少年時代は南部諸州を中心にまだまだ実生活面では白人による黒人差別は根強く残っていました。例えば、白人専用のレストランや喫茶店、トイレなどに黒人は入れませんでしたし、映画館も白人用の一階ではなく二階から観る他ありませんでした。

キング自身の記憶の中で少年時代一番傷ついた出来事は以下のようなことです。高校時代の最後の年、他の町であった弁論大会で「黒人と憲法」というスピーチで優勝しました。得意になって帰りのバスに乗り込むと、次第に混んできて、2人の白人が立ちん坊になってしまいました。すると運転手がキングと引率の先生に、命令口調で「立って席を譲れ」と言いました。キングは断ったのですが、運転手は「この黒んぼ野郎」と汚い言葉で罵りました。先生に促されてやむなく彼も立ちましたが、スピーチの内容とのあまりのギャップにキングは怒りに身体が震えました。

大学時代

キングは普通より3年も早く15才で大学に進学しました。その大学はモアハウス・カレッジで、黒人の大学の中では1、2を争う優秀な大学で、人種問題などの公開討論も活発に行われていました。キングは最も黒人のためになる職業として医者か弁護士になりたいと望んでいましたが、牧師でもあった学長の説教から大きな影響を受けて、黒人社会の中での教会の重要性を知り、学長のような牧師になれば黒人社会が持つ現実の問題に取り組めると思うようになりました。

そのことを父に話すと大変喜んで、彼の教会で試験的に説教をすることをキングに許しました。17才の少年の説教にも拘わらず大勢の信者が集まってく

れて、結果は成功だったといえるでしょう。その時からキングは父に助手として認められました。

キングは19才で最初の大学を卒業し、さらに勉強したいと思い、ペンシルバニア州にあるクローザー神学校に進みました。そこでの学習で一番影響を受けたのは、インド独立運動の指導者マハトマ・ガンジーの非暴力の教えでした。それはインドの民衆の心に、イギリスの政治的・軍事的圧力に対抗する強い精神力を植え付けました。インド人たちは、何度も何度もデモを繰り返し、たとえ善意であろうとも他国の支配は受けたくないという意思表示を続けました。そのためには命を捨てることも覚悟していることを示したのです。

キングはクローザー神学校を1番の成績で卒業すると、次いでボストン大学に進み、そこで宗教哲学を修めて博士号の取得を目指します。そこではキリスト教だけでなく、仏教、イスラム教、ヒンズー教、日本の神道などについても博く学びました。

ボストン大学在学中に、キングは彼と同じく南部のアラバマ州の黒人農家出の音大生コレッタと親しくなり、24才で結婚します。そしてまず生活費を稼ぐためアラバマ州のモントゴメリーにある教会の牧師に就任し、仕事をしながら博士論文を書き上げ、26才の時ボストン大学から博士号を取得します。ここまでのキングのいわゆる勉学の時代で、ここから彼の公民権運動のリーダーとしての人生が始まります。

最初の公民権運動

その頃のモントゴメリー市は、南部でも代表的な黒人差別の激しい都市でした。キング牧師が最初に遭遇したのは、奇しくも高校時代精神的に最も傷ついたあの乗り合いバス内の黒人差別問題でした。この1年以上も続いた黒人によるバスボイコット事件がマスコミを通じて全米に報じられ、若き公民権運動の

リーダーとしてのキング牧師の名を轟かせたきっかけとなったので、やや詳しく紹介します。

彼が26才の時です。ローザ・パークスというごく普通の黒人女性が帰宅のバスの中で白人の乗客に席を替わらなかったという理由で警官に逮捕されてしまいました。そのことに怒った地域のリーダー達が立ち上がり、黒人による市バスのボイコット運動を計画し、そのリーダーとして皆が一番若いキング牧師を推しました。キング牧師はこの機会にガンジーの非暴力による対抗を試してみようとリーダーを引き受け、こういう問題は民衆が熱いうちに実行に移さなければと決行を翌週の月曜日からと定め、市内の全ての教会の牧師から、日曜日の礼拝で信者全員に計画とその趣旨を分かり易く説明することを依頼しました。

月曜日から計画は、キング牧師達指導者が期待する以上に見事に実行されました。黒人達はダウン・タウンまでぞろぞろ歩いて通勤していました。中には自家用車に乗り合わせたり、タクシーを利用する人もいました。このボイコット運動は黒人達にも大きな負担をかけるものでしたが、客の75%が黒人だった市バスにとっては死活問題でした。

白人で構成されている市の指導者層は市長を先頭に強硬姿勢でこの市バスボイコット運動を押さえ込もうとし、古い州法を持ち出してはキング牧師などを逮捕し、投獄しました。わけてもK・K・Kという白人の人種差別主義者は、電話や手紙でキング夫妻を脅かすだけでなく、キングの家の玄関を爆破するまでに運動の妨害をエスカレートしていきました。幸いキングの家族には被害はなかったのですが、これには怒った黒人達がキングの家の前に集まり、警官と衝突する寸前までいきました。あわてて飛び出していったキング牧師の必死の説得によってやっと群衆は散会し始めました。

地方都市で起こったこの事件は、マスコミで大きく取り上げられました。その結果全米各地での黒人による公民権運動を誘発させると同時に、南部でも白

人の支持者を増やしていきました。そしてついにアメリカ最高裁判所による「市バス内での人種隔離を命じるアラバマ州の州法は憲法違反である」という判決を得ることによって、この市バスボイコット運動は終息することになります。

その後の公民権運動

全米の各地で火のついた黒人の抗議行動に助言を与え、指導するために1957年に南部キリスト教指導者会議（SCLC）が結成され、キング牧師がその会長に選ばれました。それ以降彼の活動は急に忙しくなります。全米を回って年間200回もの講演をこなし、家族との団欒もままならないほどでした。

その頃、キング牧師をとんでもない事件が襲いました。彼が自分の本のサイン会をしている時に、中年の黒人女性が近づいてきていきなり彼の胸に鋭いペーパーナイフを突き立てました。彼女は長年精神病院への入退院を繰り返している精神異常の浮浪者でした。刃物は僅かに大動脈をそれて一命を取り留めましたが、命まで狙われる超有名人になったということです。

1960年には、黒人学生がレストランで食事をするのを拒否される事件が起こり、その学生と支援者が座り込みという抵抗運動を始め、参加者が次第に増えていきました。キング牧師も応援に駆けつけたのですが、全員逮捕されてしまいました。学生達は直ぐに釈放されたのですが、キング牧師だけは裁判にかけられ、4ヶ月の禁固という重い刑を言い渡されました。それを救ったのが時の大統領候補ジョン・F・ケネディでした。彼が当選できたのは、もしかすると多くの黒人を味方につけたからかも知れません。

キング牧師が34才の時、初めて首都ワシントンでの行進を計画しました。その行進には白人も含めて25万人もの大群衆が参加し、キング牧師を先頭にリンカーン記念堂に向かって「勝利を我等に」を合唱しながら行進しました。

奇しくもその年はリンカーンが黒人に自由と平等を約束した年から100年目だったのです。その集会でキング牧師は「全ての人は皆平等である」という有名な演説をしました。その日の新聞は「キング牧師がアメリカ黒人の大統領となった」と書き立てました。

キング牧師は、非暴力を掲げ彼の信ずる方法で黒人の自由と平等を求めた運動を続けていきました。彼は南部諸州で何十回も逮捕され投獄され、心ない白人による違法な妨害すら受けました。

そして35才（1964年）の時には、ノーベル平和賞を受賞しました。そのことは、キング牧師がアメリカ黒人の中の偉人にとどまらず、最早世界の偉人として認められる存在になったことを意味します。性による差別、宗教や思想による差別、家柄による差別などあらゆる差別撤廃運動の基本理念としてキング牧師の考え方が受け入れられたのです。

そして彼が39才（1968年）の時、テネシー州メンフィスにおいて「私は山頂（神との約束の地）に登ってきた」と題する演説を行いました。

翌日、ホテルのバルコニーで暗殺者の凶弾に倒れ短い人生を閉じました。非暴力主義の指導者キング牧師を失ったアメリカの黒人達が、やられたらやり返すという報復行動に一時走ったのはやむを得ないことかも知れません。しかし、黒人の社会進出は確実に進んでいきました。

（注）この紹介文は世界を変えた人々2「キング牧師」

（V・シュローデト・P・ブラウン）によっています。



第3部

偉人たちの
時代背景としての
ヨーロッパ史

齊藤 剛

第1章アテネ・ローマの歴史

アテネの歴史

ギリシャの山々は概して急峻^{きゅうしゅん}で、盆地が多い。海岸線は入りくんでおり、小島が多い。この地形は日本に似ている。しかし年間の雨量は400ミリ内外で、天水農業が可能であり、夏の乾燥に強いオリーブとブドウ、イチジクが栽培されている。

B.C.2000年頃ギリシャ人の祖先がこの地に移住し、定着した。B.C.1600年頃、エジプト、メソポタミア、クレタ文明を吸収してミュケナイ文明という高度な青銅器文明を作り上げた。

ギリシャ人の支配層の貴族層の中から卓越した王が現れ、ミュケナイ、アテネなどの城砦の中に華麗な壁画を持つ王宮を営んだ。王は多数の奴隷と土地を所有していたが、大規模な水力管理は必要なかったため、オリエントのように強大な権力を持つ支配者層は出現しなかった。ミュケナイ文明はB.C.12世紀に崩壊する。

これらの時代の出土品は、アテネにある国立考古学博物館に展示されている。ギリシャ全土から発掘された彫像や陶器、墓碑、装飾品などが収蔵されている。特に、黄金で作られたマスクや頭冠、装飾品には驚いた。極めて薄い黄金の金箔を作る技術がすでにこの時代に確立していたからである。

これらの出土品の中では、「竖琴を弾く男」の造形に、まるでピカソの絵を見ているような抽象性を感じ、その感覚の斬新さに強い印象を受けた。それらを見ていると、我々が知っているギリシャ黄金時代の芸術は、すでにエーゲ海の島々で、B.C.1600年の時代から展開していた文明や文化の歴史と伝統を受け継いだものであることが良く分かる。文化は長い時間の中で成熟していくもの

であると言ってよいであろう。

ギリシャのポリス（都市国家）は、B.C.8世紀ごろエーゲ海周辺のギリシャ人の間に点々と成立した。共同体がその占拠した土地をくじ引きでポリス市民に分配し、自由な小土地所有者となった市民が、同時に戦士としてポリスを防衛する義務を持つのが原則であった。ここに共同体と市民との関係の原型がある。ポリスでは権利は土地の配分と参政権であり、そうした権利に対する義務は兵役であった。しかも兵役は名誉であり、財産の多い人ほど多くの兵を出した。後にローマ時代になって、属州において、税を納めることによって兵役に従事しなくてもよいという考え方が出てくるが、いずれにしても防衛の義務があって権利を得ることが出来るということには変わりはない。

150のポリスが分立し、このうち中心的なポリスとして発展していくのがアテネとスパルタである。

王権の衰微とともに、土地や奴隷の私的所有にすぐれた貴族層の支配が確立する。やがて交易が盛んとなり、商工業が発達した結果、平民が土地貴族と対立するようになった。

世界の歴史の中で特別の地位を占めている古代アテネであるが、その黄金時代は意外に短く、B.C.479年のペルシャ戦争への勝利に始まり、B.C.431年のペロポネソス戦争（B.C.431～B.C.404年、アテネを盟主とするデロス同盟とスパルタを盟主とするペロポネソス同盟との戦い）の勃発とともに終わる。

アテネを象徴するものといえばアクロポリスの丘である。私は大学時代に西洋史学科で古代ギリシャについて学んで以来、アクロポリスの丘を訪れることは長い間の夢であった。それがようやく実現したのは1999年の夏である。人類の偉大な歴史遺産にふさわしく、世界中からの大勢の観光客であふれ、皆ここを訪問できたことの喜びに満ちていた。ガイドは観光客に対する説明の域を超えて、自分の勉強の成果と、このような偉大な遺産を持つ誇りに酔うかのごとく、専門的な説明を延々と続ける。歴史や建築の知識は十分理解出来なかつ

だが、長い間の夢が実現して、真夏の太陽がさんさんと降り注ぎ、汗が次々と吹き出してくるのも苦にならないほどに私は感動していた。

アクロポリスの丘には、B.C.1300年頃には城壁が築かれていた。その頃にはすでに聖域として人々に崇められ、多くの神を祭る場所に変わっていたとい

う。アクロポリスの丘はアテネの中心に位置し、高さ156メートルの岩山で、一般の街並みよりは一段と高くなっているため、まさに神に一番近い所であり、そこに神殿が建設され宗教的な行事が行われるのは、当時の人々の宗教意識としてはごく自然なことと想像される。

現在残っているパルテノン神殿は、アテネ全盛時代の偉大な指導者ペリクレスが、ギリシャ最高の彫刻家フェイディアスを総監督として、都市名の由来となった守護女神・アテナの神祠があった所に、B.C.447年に起工し、5年後に完成したものである。

著名な建築家や芸術家達を集めて建設され、合計50本の高さ約10mのドーリア式の柱からなる。アテネ近傍のペンテリコス山から取れるきめの細かい大理石が用いられ、建物はギリシャ美術の頂点を示す彫刻で飾られた。この建築には直線は1本も使われておらず、すべての部分はその大きさを強調するためわずかにカーブしている。遠くの海上からも見ることができ、古代アテネの権力のシンボルであった。

このパルテノン神殿には、フェイディアス自身の制作による12メートルの高さを誇るアテナ女神像があったと伝えられているが、残念ながら現存しておらず、その模刻がアテネ国立考古学博物館に展示されている。完全武装した堂々たる女神像であり、黄金と象牙で作られていたというから、パルテノン神殿を飾るにふさわしい彫刻であったと想像される。フェイディアスの彫刻家としての水準の高さについては、パルテノン神殿に残されている諸彫刻の痕跡に、その技術の一端が示されているという。

ペリクレスはその執政期間であるB.C.443～429年に、壮麗な建築で飾られた都市を構想し、その費用をデロス同盟の諸都市からの毎年の交付金^{まかな}で賄った。歴史に残る都市を建設するためには、当事者だけでは賄いきれない莫大な費用を必要とする。

アクロポリスの丘からはアテネの市街地が一望に見渡せる。都市の市民の間に一体感が生まれるためには、都市の中に市民統合のための象徴的空間が必要である。

現代においても、市民統合の象徴となる公共空間をどのような形でデザインしていくかは、長期的視点に立った都市政策の重要な課題である。

丘の中腹には音楽堂があり、7～8月には今でもギリシャ劇が演じられている。丘のすぐ下にはギリシャ最古の劇場であるディオニソス(ギリシャ神話で酒と演劇の神)劇場が見える。ギリシャに典型的な半円形の野外劇場である。

アクロポリスの丘のふもとにはアゴラ(広場)が作られ、アゴラに面したところに市会堂、評議会堂、裁判所、神殿が置かれていた。今日では建物の遺跡が地中に残されているのみで当時の様子を伺い知ることは出来ない。ここに哲学者や芸術家たちが集い、高尚な議論を展開して、哲学、文学、建築、彫刻など人類にとって財産となる多くのものを生み出した。

アテネを初めとしたギリシャのポリスにおいて、人間的で高度な文化が花開いたことには驚嘆する。人間や自然界への関心を持ち、ソクラテス、プラトン、アリストテレスなどが人類最初の哲学を生み出すに至る。

この三人の名前は非常に有名であるが、その内容は意外と知られていない。ソクラテスは、精神をはじめ自分自身・自分の本質へと向かわせ、金や評判・名誉ばかりでなく、魂をできるだけ優れたものにすることに関心を向けることをすすめ、徳の本質、正義とは何か、勇敢とは何かについて考察し、人間の歴史において哲学的思考の出発点になる。

プラトンは、ソクラテスの考え方を本に著すとともに、「美しいものを美し

いと感じるのはまさに美であること自体によってである」というアイデア論を展開し、本質であるアイデアの世界に思惟^{しい}によってたどりつくことを説き、善は、それぞれの事象の原因であるアイデアの更に上位にあるとする。また、哲人政治を説く『国家』などを著す。

プラトンはB.C.385年頃、アテネの郊外に「アカデメイア」という学校を開き、弟子たちと禁欲的な共同生活を送る。哲学の予備学として幾何学と天文学を重視した。A.D.5世紀には新プラトン主義の中心となったが、学校は529年に閉鎖されるまで約900年続いた。

アリストテレスは、それまでの哲学を集大成するとともに、プラトンのアイデア論を批判し、個物は形、質料と結びつくことによって初めて現実に存在できるとし、火、空気、水、土の四元素を第1質料と考え、物質の生成と運動の原理を説明した。

人間の精神活動である文化は段階的に発展していくのではなく、ある時代、特定の空間で人間どうしがぶつかりあい、刺激しあう中で、通常では考えられない成果が次々と生まれてくる。その人類最初の事例が、アクロポリスの丘とそのふもとのアゴラで、今日のヨーロッパ文化の源となる様々な文化が生み出されたことである。

アゴラは人民集会にも使われた。アテネの民主主義で忘れてはならないのは直接民主主義ということと、奴隷の存在である。アテネは最大時で、面積25万ha。人口は20余万人であったが、市民12～13万人に対し奴隷が10万人もいたということである。民主主義にしても芸術文化にしても、奴隷の存在あって可能であったということは間違いないであろう。

今日で言う人権思想は古代にあっては存在しなかった。ポリスの扶養能力を超える子供や生産労働につくことの出来ない障害児は当然のこととして殺され、姥捨ても行われた。財産のない親は子供を役所に差し出し、役所はその子供を他の人に奴隷として売った。

個人が完全にポリスの一部となっており、ポリスは都市における生活を通じて個人を教育した。市民の間に極めて強い絆が作られている反面、市民は完全にポリスへの従属を余儀なくされた。

民主主義の制度として陶片追放があった。親指くらいの陶片に6000票名前を書かれると10年間国外追放となった。政治的刑罰は、関係者の家族の墓を荒らすことによって、その先祖までもが罰せられた。

アテネといえば、1896年に第1回近代オリンピックが開催された場所である。その時のグラウンドは大変に狭く、楕円形の400メートルトラックとスタンドだけであり、シンプルな印象を受けた。もちろん競技の種類も出場者の数も極めて少なかった。現在の華やかなオリンピックとは想像も出来ないほどの簡素な催しであったと思われる。

古代オリンピック発祥の地は、ペロポネソス半島にあるアテネとは別の都市「オリンピア」にあり、当時、参加希望者は一定の期間トレーニングのための合宿を行った後、予選を勝ち抜いて初めて出場出来たという。勝利者に与えられる月桂樹の冠は、ギリシャ神話の中で、太陽神アポロが女神ダフネに恋した際、ダフネの父親の神ラドンはダフネを月桂樹に変えてしまったため、アポロは永遠の愛の証として、月桂樹の枝で月桂冠を作り身につけたという話の由来による。

また、音楽の語源は、ギリシャ神話の中の全能の神ゼウスの娘ミューズである。ミューズは文芸・音楽・舞踊を司る女神であった。古代ギリシャではスポーツの祭典オリンピックの他に「音楽競技会」も4年に1回開かれ、ポリスの威信をかけた音楽の戦いが展開された。音楽は人間が成長する上で、その感覚や思考に良い影響を及ぼすものと考えられていたので、男子は必ず学ばされたという。

B.C.404年のペロポネソス戦争においてスパルタに敗れた後、商工業や交易の発達で市民の間に貧富の差をつくり出し、市民の平等原理は崩れて、政治

的争いが一段と激しくなっていた。また、戦乱が打ち続く中で、各ポリスは廃墟と化した。冬季に豪雨の多いアテネは、もともと浸食を受けやすかったが、失った農耕地や牧草地の代わりに、標高のより高い丘陵地へと開墾が繰り返され、荒廃地は広がっていった。

B.C.146年にアテネはローマ人に支配される。B.C.2世紀中頃、スパルタも含めギリシャ本土全体がローマの支配に服することとなるが、ローマ人はアテネの文化に敬意を払い続けた。

ローマの歴史

私がローマを初めて訪問したのは1981年の2月であった。わずか10日間のローマ滞在であったが、イタリア人の人生を楽しむ生き方がすっかり好きになり、ローマの歴史について学び始めることになった。以後2回イタリアを訪れることになるが、どの都市もそれなりに魅力を持っているイタリアの都市の中でも、ローマ帝国繁栄の多くの遺跡を持つローマの魅力は計り知れないものがある。

ローマの歴史といえば、塩野七生^{ななみ}氏の「ローマ人の物語」という膨大な記述がある。また、塩野氏のローマ史研究から得られた見識は現代日本社会にも通ずるものがあり、その発言は多くの示唆^{しき}に富んでいる。

ギリシャに比べてローマの歴史は新しい。B.C.8世紀頃、イタリア半島南部にギリシャ人の植民が始まり、同じころ中北部にエトルリア人が移住してきた。その後、種々の種族が移住し、定住した。

これらの集落のひとつがローマであり、伝説によれば、B.C.753年にロムルスが建国し、城壁をめぐらし、最初の王となった。

ローマはしだいに強力となり、B.C.6世紀初めまでに近隣の7つの丘の集落が合体して都市（ポリス）を形成した。

B.C.578年に最初の下水道であるクローカ・マキシマが掘られた。谷の湿地にはテベレ川に下水道で排水するため、水路が掘られ、B.C.184年に地下トンネル水路にされた。テベレ川も川底は深く掘り下げられ、川岸もしっかりとした石で固められて護岸工事が施された。ローマ時代に整備されたこれらの設備が、今日なお使用されていることには驚嘆する。

B.C.510年、王家を追放して、共和政が確立された。共和政は、民会、コンスル（民会で選出される執政官）、元老院の3本柱で構成されていた。伝承によると、全市民は財産評価によって、騎士と歩兵に分けられ、騎士は18の百人隊に編成され、歩兵は財産評価に応じて五つの階級に区分されていたという。

B.C.4世紀初頭までに、ローマは中央イタリア第一の都市となっていた。B.C.266年、イタリア半島の中・南部を完全に制圧する。B.C.3世紀～2世紀にかけて、地中海を隔てて対岸にあるカルタゴとの3回にわたる大戦に勝利する。有名なポエニー戦争である。

ローマの躍進は、優れた軍隊と健全な市民共同体にあった。民会の成員であることを誇りとし、その決議に従って自ら武器を調達して戦争に参加した。ギリシャのポリスと同じである。B.C.88年、イタリアの諸都市の自由民に市民権が与えられ、都市国家ローマの形態は終わりを告げる。

以後、民会を基礎とする民衆派と元老院の権威を背景とする閥族派が権力闘争を繰り広げ、最終的にカエサル（シーザー）が単独支配者となった。カエサルは最初、民衆派に属していたが、市民共同体を前提としては広大な版図を統治できないと確信し、民会と元老院の形骸化を進め、自ら絶対的な権力を握り、大国ローマの新しい統治形態を構想した。

都市国家の歴史を決定的に超克し、ローマによってではなく、周辺の多種多様な民族が協力し、すべての民族が連帯感を持ちうる新しいローマ帝国の建設を目指した。

カエサルは、政敵ポンペイウスを追ってエジプトのアレキサンドリアに行き、

そこに約1年半滞在する。その時クレオパトラの恋人となり、エジプトを属州という形で間接統治しようとする。

ローマに帰ったカエサルは、ローマをアレキサンドリアのような壮麗な都市にしようとして、テベレ川の流れを変えてまで、計画的に都市を作ろうとする。

しかし、元老院議員の反感を買い、B.C.44年暗殺された。英雄カエサルの物語は、ヨーロッパ人の教養となっており、「ルビコン川を渡る」「ブルータスお前もか」という言葉は今も使われている。

カエサル暗殺の背景としては、元老院議員の危機感、民衆派にとっては裏切りという政治的なものの他に、妻がいながらエジプトの王クレオパトラとの恋に落ちたことへの民衆の反発などがあつたであろう。英雄は人気も博するが、多くの人の嫉妬もかうのである。

遺言によりカエサルの後継者となったオクタ비아ヌスは、B.C.31年アクティウムの海戦でアントニウスとクレオパトラの軍隊を破り、ローマ世界の単独支配者となった。カエサル亡き後、クレオパトラは軍人出身のアントニウスと結婚したからである。

オクタ비아ヌスは、B.C.27年にアウグストゥス(尊厳なる者)の尊称を与えられる。政治的・軍事的な実質的権力を握っても、決して皇帝というような権力者の地位には着かなかつたのである。カエサルの失敗から学ぶしたたかな政治家像が浮かんでくる。しかし、歴史上、ローマの初代皇帝と呼ばれることが多い。

オクタ비아ヌスは、カエサルの遺志を引き継ぎ、エジプトのアレキサンドリアのような壮麗な街を作ろうとして、ローマの故事来歴を調査収集し、その上に立って総合的な首都計画を立て、新しい建造物を建てた。ローマは帝国の首都にふさわしいものに生まれ変わり、オクタ비아ヌスは、A.D.14年、臨終に際して「私は粘土のローマを受け取り、大理石のローマをお前たちに残す。」と語った。

ローマは整然とした都市計画に従って作られた街ではなかった。7つの丘という地形はそれには向かない地形であった。今でも、ローマの街の中の道は狭く曲がりくねっている。初めてローマを訪れた時、テルミニ駅から宿泊していたホテルまで市内地図を見ながら歩いているうちに、気がついてみたら全く逆の方向に戻っていたことがある。また、裏道は細いため、後ろから走ってきたバイクに乗った二人ずれにバッグを取られそうになったこともあった。いずれもローマの街の道事情からくるエピソードである。

しかし、ローマ人が征服した外国のローマ属領に建設した街では、十字形を形作る2本の主要街路を軸とする明快な格子状のプランを適用した。人々が快適に暮らすための広場、劇場、公衆浴場、上・下水道、神殿、図書館などを作った。植民都市に人工的な快適都市を作ったのである。その中でも19世紀に発掘された、北アフリカのアルジェリアにあるティムガッドはよく保存されており、1万5千人の暮らしとそれを支えた都市施設が良く残っている。植民都市を幹線道路で網の目のように結んだ。ここから「すべての道はローマに通ず」という格言が生まれる。しかし、「ローマは一日にしてならず」であった。

住宅は2つのタイプからなる。ドムスは、中庭を囲んで一群の部屋が並ぶ一戸建て。インスラは5階建てのアパートでしばしば倒壊し、上の方の階には水道も污水管も届かなかった。4世紀には1800戸のドムス、4万6000棟のインスラがあった。

ローマの水の供給量は、現在の量を^{りょうが}凌駕するものであった。高架水道（総延長505キロ）が整備され、毎日90～108万 m^3 の水を供給した。

使い道によって、皇帝の所領・建物、個人(貴族)、公共用水(噴泉、貯水槽、公衆浴場)の三つの水路をもち、3世紀には247の貯水槽、11の主要な大公衆浴場、900以上の公衆浴場(サウナもあり社交場であった)、1200以上の公共用噴泉(トレビの泉もその一つ)があったという。このようにふんだんに水を使用した都市は、歴史上存在しなかったのではないかと思われる。しかも、決して雨

量が多くはなかったローマにおいてである。

B.C.33年からA.D.114年までに、歴代の皇帝たちはいくつかのフォルム(広場)を建造した。フォルムは会合場所、マーケット、政治の中心であり、最も古く、最も重要なのがフォルム・ロマヌム(フォロ・ロマーノ)であった。ローマの街の中心であり、その周囲には元老院議事堂や主要な公共建造物(民会の会議場や神殿)が配置された。低い湿地帯であったが、大下水溝を設けてテベレ川に排水した。

都市ローマの政治的、文化的エネルギーがここに凝縮されていた。今日では建物の柱がわずかに残るのみであるが、ローマ帝国繁栄の雰囲気をしるすには絶好の場所である。このような場所が残されていることは、空想好きの私にとっては何よりの財産である。

アテネのアゴラやローマのフォルムが、中世において広場となり、周囲に教会や市庁舎が建てられ、市が開かれる、それが近代になってパークとなる。日本も明治になって西洋文化の導入の一環として公園を整備し始める(最初の公園は東京の日比谷公園)。

このように歴史的にみていくと、公園は市民にとって単なる憩いの場ではなく、精神的、文化的要素をもっていることに留意する必要がある。

A.D.64年に大火が起こり、ローマの街並みの大半は全焼又は半焼した。当時の皇帝ネロは焼け野原となった広大な土地を入手し、大庭園を擁する黄金宮殿を造営したため、住民の怨嗟の的となり、自殺する。肉親を殺したりしたため、ネロは暴君の代表として歴史上悪名を残しているが、火事に強いローマを作ったのはネロである。

ローマは、道幅が2~3mと狭く、木造部分が多かったため火事が多かった。ネロはローマの再建にあたり、道幅を広げ、インスラに中庭をつくり、新住居の一部に必ず石を用いることとした。また、邸宅所有者に、空地に消火用器具を置くことを義務づけ、公共浴場をたくさん作った。

A.D.135年に賢帝の誉れ高いハドリアヌス帝が、テベレ川のほとりに、サンタンジェロ城を造営した。ここは中世に監獄として使われ、建物は現在も残っている。オペラ「トスカ」で主人公であるトスカが、愛する男がだまされて銃殺されたのを知って、サンタンジェロ城の上からテベレ川へ身を投げる有名なラストシーンがあるが、城とテベレ川との間にかなりの幅があって、実際にはオペラのようにはいかない。オペラを見るたびにそのことを思い出す。

ローマ帝国の最盛期の2世紀には、ローマの人口は120万人にのぼった。ローマ帝国は、北は今日のロンドンから南はアフリカの北部、東は今日のアラビア半島と、地中海を中心として当時の世界の人口の四分の一を占め、現在の40か国に及ぶ大帝国に成長した。いわゆるパックス・ロマーナ（ローマによる平和）である。その背景にはローマ軍の強化があり、25年の兵役を果たした者とその息子に市民憲章を与えるという方法によって成された。息子が市民憲章を持てるようにとこぞって兵役に従事したのである。

一方、百二十万人という人々を統治するためには、不満を持たれないようにする必要があった。その政策は「パンとサーカス」と呼ばれている。パンは食料の供給を示し、無産者に近い都市生活者（最大40万人）に対し年間60万トンの小麦を輸入し、無料で給付した。サーカスは娯楽の提供であった。休日は帝国末期には年間200日にのぼった。そのうち180日にわたり、コロッセオで戦車競技、剣闘士競技(猛獣を相手とし、帝国各地でショーが開催された)、猛獣競技、模擬海戦が行われ、市民はそれに熱狂した。

ローマ観光の目玉の一つであるコロッセオは、高さ52メートル、収容人数5万人である。帝国の身分制を人々に認識させるため、座席指定となっており、1階から元老院、騎士、市民、市民権を持たない人々といった風に階が別となっていた。皇帝は観客の見える席で、サインを出して剣闘士の生命を握る役割を果たした。国民の上層部の人々の自尊心を満足させ、下層部の人達に不満をもたれないようにする。いつの時代も安定して統治することは容易なこと

ではない。

ローマ時代の人々の生活の様子は、ナポリの近くのポンペイの発掘によって生々しく浮かび上がってきた。A.D.79年ヴェスヴィオ火山が大爆発。ポンペイの都市は地下に埋まり、時計の針を永遠に止めてしまった。18世紀になって発掘され、収容人員2万人の円形闘技場、5000人収容の半円形の露天劇場、1500人収容の音楽堂など当時のポンペイの街がほぼ再現されるという奇跡が起きたのである。

日本で開催されたポンペイ展は印象深いものであったが、いまだ現地を訪れたことがない。ナポリまでは行ったのであるが、日程の都合で足を伸ばすことが出来なかった。

ナポリといえば「ナポリを見て死ね」という言葉があるように、昔は美しい都市であったそうであるが、今はその面影は全くと言ってよいほど失われてしまっている。都市は作ることと同様に維持していくのも大事なことである。

アテネが人間の精神の豊かさにおいて、ヨーロッパの源となったのに対して、ローマは都市・法律・暦など現実的なものを発展させ、物質的な豊かさを歴史上まれに見るほどに高めた。帝国全土に人々が物質的豊かさと娯楽を享受する快適都市を作り、それを道路で網の目のように結び、自由に交流できるようにした壮大な構想には圧倒される。

しかし、人類が最も幸福であった時代と手放して賞賛する気持ちには率直に言ってなれない。ローマの人たちの生活はあまりにも享乐的であり、ギリシャ劇は次第にエロチックなものとなる。貴族が満腹になった後も、鳥の羽で喉を突いて更に美食をむさぼる有様や剣闘士競技、猛獣競技の残酷さを楽しむ姿には異常性を感じずにはいられない。従って、ローマ帝国繁栄の時代には、歴史に残る哲学や芸術は生み出されていない。

キリスト教が再三の弾圧にも屈せず、幅広い階級に信者を広げていったのも、人間は物質的豊かさだけでは満足できない生き物であることを示している。

精神的豊かさのアテネと物質的豊かさのローマ、二つがバランスよく発展して幸福な社会が築かれていくのである。現代に即して言えば、経済発展と文化のバランスということになる。

第2章 中世ヨーロッパ社会

一神教の誕生

古代と近世との間に中世がある。この中世は宗教の時代といってもよいほど、宗教が人々の生活を支配していた時代であった。アテネ・ローマの時代にも神殿が沢山作られ、宗教が政治や国民の意識・生活に重要な役割を果たしていたが、その宗教は多神教であった。中世のヨーロッパの宗教は、ユダヤ教、キリスト教そしてイスラム教という一神教である。アジアの宗教もヒンズー教、日本神道いずれも多神教である。仏教は釈迦が語った様々な場面の教えによって膨大な経典が作られ、その内容は一様ではなく、宗教の定義によっては宗教というよりも哲学であるという捉え方もあるほどであるから、一神教、多神教の分類にはなじまない。

それでは宗教の歴史の中で全く画期的である一神教が、どのように生まれたかをごく簡単に見ていくこととする。何故ならば、世界の歴史はもちろん現在の世界も、一神教の内容を把握することなくして理解することは困難であるからである。

まず、B.C.2000年頃、砂漠と荒野が広がる中東地域で遊牧生活を送っていたアブラハムが、彼と彼の子孫にカナン（現在のパレスチナ）の地を与えると
いう神のお告げを受け、カナンへ移住する。その後、ヤコブの時代に飢饉が訪れ、エジプトに移住したが奴隷にされてしまい、モーゼが神のお告げを受けて

エジプトを脱出して、再び今のイスラエルに移住する。「十戒」の映画で有名な、海を拓く奇跡が展開する「出エジプト」である。

モーゼの子孫は集団指導体制に移り、B.C.1000年、エレサレムを占領し、そこを「聖都」と定め、大イスラエル王国を築く。繁栄の時代を謳歌した後、南北に分裂、新バビロニアによる「バビロン捕囚」を経、ローマ帝国の属国となる。

イエスが登場すると、ユダヤ教徒たちはローマ帝国と結んでイエスを十字架にかけるが、過酷さを増すローマ帝国の支配に過激派が武装蜂起。結果はローマ軍の圧勝に終わり、百万人近い戦死者を出し、聖都も神殿も完全に失い、以後ユダヤ人は祖国を持たない離散の民となっていく。

ユダヤ人迫害の歴史

ユダヤ民族は、ヤハウェという天地人、動物、植物すべての創造主であり、唯一絶対の神から祝福された「選民」であり、イスラエルは神から与えられた土地であるという信仰が、その後の世界史の中で現在に至るまで様々な問題を起こすことになる。

ユダヤ教の信者であったイエスは、ユダヤ民族の枠を超えて、すべての人種、階級に対する隣人愛を説いたことと、ユダヤの聖職者が、ローマ帝国によるキリスト処刑に手を貸したことが両者のその後の対立を生み出す。また、新約聖書の中で「イエス・キリストを殺したのはユダヤ人であり、ユダヤ人はその報いを受けるであろう」と書かかれていることが、キリスト教徒によるユダヤ人迫害の根拠となっていく。

ここで、その後ユダヤ民族がたどった歴史を見ていくこととする。1078年にローマ教皇が「ユダヤ人公職追放令」を出すことによって、多くのユダヤ人は職を失うことになった。ユダヤ人は、土地を所有することが出来なかった。

そこで、ユダヤ人の中には、キリスト教徒が不浄のものと考えていた金融業に従事するようになった人が多くいたため、金融業界はユダヤ人のものとなる。

1215年には、ユダヤ人は特別の衣服を着用すべきことが決議された。1348年ペストがヨーロッパで大流行すると、ユダヤ人はキリスト教の子どもをつかまえて殺人儀式をするという流言りゅうげんが広まり、ユダヤ人虐殺が始まった。

イギリスでは1290年、国王が一切のユダヤ人を国外に追放した。シェイクスピアが「ヴェニス商人」を書く前に、ユダヤ人を主人公とする異常な社会的事件が起こり、ユダヤ人に対する大衆の憎悪が広まっていた。座付作者であったシェイクスピアは、こうした国民感情を背景に「ヴェニス商人」を書いたのである。

その小説の内容を見ていくと、ユダヤ人シャイロックは、3,000ダカットをヴェニスの豪商・アントーニオに貸すに際し、返済できない場合、身体どこからでも肉をきっかり1ポンド切り取ってもよい、という証文を書かせる。船が難破し、借金を返済出来なくなると、友人が3倍にして返してもよい、というのも聞かず、アントーニオへの怨みを晴らすのだと、法廷であくまで証文の実行を迫る。ところが、裁判官は、肉を切り取る際に一滴たりとも血を流してはいけない、と思ひもよらぬ判決を述べる。シャイロックは、元金だけでも返してください、と懇願するが、裁判官はさらに追い討ちをかけ、ヴェニスの法規定によれば、生命を脅かした犯罪事実が明白になった場合、犯人の財産の半分は被告のものになり、他の半分は国庫に没収すると告げる。しかし、アントーニオの要請により、財産の半分は被告が保管し、シャイロックの死後彼の娘に譲ることとする。また、キリスト教徒への改宗と、彼の死後遺産を娘に贈ることで決着する。

シェイクスピアは小説の中で、ユダヤ人の強欲さと非人間性を誇張する一方で、キリスト教徒の慈悲深い心を対比させ、読者の共感を呼ぶことに成功している。人気作家の面目躍如というところである。しかしこの作品はシェイクス

ピアの意図を超えて、世界に広く読まれることによって、キリスト教徒はユダヤ人を一層嫌うようになる。

19世紀の末には、ロシアやポーランドでユダヤ人が迫害されたため、1881～1910年にアメリカに移住したユダヤ人は156万人にのぼった。

次にナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺（ホロコーストと呼ばれている。）の背景を見ていく。

ヒットラーは1889年にオーストリアの税関吏の子として、熱心なカトリックの家に生まれた。1907年、ヒットラーは18歳の時ウィーンにある美術アカデミーを受験するが不合格となる。翌年再挑戦するが失敗。ウィーンで室内装飾、製図等^{ぎょう}を業として過ごした。

当時のウィーンは、1857年に皇帝フランツ・ヨーゼフが中世以来の城壁を撤去し、その跡にリング通りを開設し、リングに沿って、今日ウィーンの観光名所となる大半の建築物が建設されていた。リングの内側は貴族主義と商業の富で繁栄していたが、その中にはユダヤ人も多く含まれ、経済的に大きな力を有していた。一方、リングの外は失業者と浮浪者があふれた貧しい世界であった。

ヒットラーは24歳になるまでの5年間、リングの外側の貧民街で過ごす中で社会問題への関心を深め、同時にユダヤ人に対する反発心を持つようになった。

その後ドイツのミュンヘンに移住し、第1次世界大戦中は兵士となり、毒ガスのため一時失明した。

1919年にドイツ労働者党に入った。20年二十五カ条綱領を決定し、国民社会主義ドイツ労働者党（略してナチ党）と改称した。綱領はヒットラーの協力を得て起草され、その中にユダヤ人の追放・迫害が盛り込まれていた。

積極的な政治活動を展開し、雄弁な演説でナチスの総統となったヒットラーは、ユダヤ人虐殺を実行する。犠牲となったユダヤ人は600万人にものぼった。

第二次世界大戦後に、ユダヤ人は2000年に近い流浪の旅を脱却して、イス

ラエルという祖国を持つに至る。

今日ユダヤ人は1300万人程度で、アメリカに580万人、イスラエルに370万人住んでいると言われている。ユダヤ人といえば、フロイト、マルクス、アインシュタインを初めとして、人類にとって偉大な業績を残している民族であり、優秀な民族であることは間違いないが、人類の幸福にすべて貢献している訳ではない。2008年秋に発生したニューヨーク発の世界的な金融危機にもユダヤ人がかかわっている。ユダヤ人の優秀な頭脳が人類の幸福につながっていくことを願うばかりである。

三つの一神教

ユダヤ教の経典は、「創世記」や「出エジプト記」などの旧約聖書と律法の集大成であるタルムードから成っている。「創世記」には天地創造、アダムとイブ、エデンの園、ノアの箱舟など有名な話が沢山登場する。キリスト教の経典は旧約聖書とイエス・キリストの言行録とヨハネやパウロなどの弟子たちの説教集である新約聖書から成る。

6世紀になって、神（ヤハウェをイスラム教ではアラーと呼ぶ）の啓示を受けた、最後にして最大の預言者マホメットが布教を始め、その内容がコーランにまとめられてイスラム教となる。従って、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という三つの宗教は、神と旧約聖書は共通である。旧約聖書・創世記の中で、アブラハムの妻サラの子がイサクで、エジプトの女ハガルに産ませた子がイシマエル。イサクの子孫がユダヤ教であり、イシマエルの子孫がイスラム教であると言われている。キリスト教とイスラム教の違いは、キリストとマホメットの教えの違いであるが、キリスト教においてキリストは神の子であるのに対し、イスラム教ではキリストはあくまで預言者の一人であり、最高の預言者はマホメットであるということになる。

コーランの中に「酔わせるものを摂ってはならない」と書かれており、酒、煙草、賭博、売春などイスラム社会では遊興娯楽が排除されている。天国と地獄の来世への信仰、一日に5度の礼拝、断食、喜捨、巡礼など、物質的なものよりも信仰による精神性を重視する社会である。

今日、キリスト教とイスラム教は、世界の宗教の中で大きな位置を占め、激しく対立しているが、それはキリスト教世界において、宗教改革が起こり、利潤の追及を是認する資本主義が生まれてくることが深く関係している。一方、イスラム教においては、宗教改革が起きず、今日、両者の大きな違いとなっている。

中世ヨーロッパ社会

キリスト教は最初、この世の愚かな者、弱き者、身分の低い者の宗教であり、ローマ帝国から過酷な弾圧を受けたが、地下にカタコンベを掘って耐え忍んだ。それは今でもローマの街の地下に残っている。

しかし、やがてキリスト教は幅広い階級に信者を広げていくため、政治権力と妥協する道を歩み、4世紀にはローマ帝国から公認され、世紀末には国教となった。

修道院が6世紀にベネディクトによって創設されて以来沢山創られ、貧困、純潔、服従の戒律を守って、信仰に励む生活を送った。修道院では、食堂での食事の際に話すことが禁じられ、徹底した禁欲生活であった。

ローマ帝国滅亡後のヨーロッパでは、10世紀に封建社会が完成する。これは、貴族で荘園の所有者でもある封建領主が、農民を農奴として支配し、自給自足の経済を営む社会であった。農奴は土地の用益権と共有地の利用を認めてもらう代わりに、税を納め、身分的に隷属れいぞくしていた。

やがてキリスト教は、ローマ教皇を頂点とするピラミッド組織を作り上げ、

信者の収入及び生産物の1割を献納する10分の1税を設け、聖職者や教会建造物、一部を貧者の救済に当てることにした。これは農民にとって重い負担となった。

このように中世ヨーロッパにおいては、キリスト教の神やローマ教皇をトップとする聖職者が、人間の精神や生活を支配していた。来世がすべてであり、教会の重要な儀式に参加出来るかどうか信者の社会的地位を左右し、教会規律と聖職者の説教が大きな影響を与えていた。信仰に基づく精神性が強調され、労働は、個人と社会全体を維持していくために必要な分だけ行なえばよいという考え方であった。働かなければ食べていくことが出来ないから、生きるための手段としての労働は必要であるが、物質的利益を追求していくための労働が推奨されることはなく、職業も重視することはなかった。教会は商業活動に対し、利子の禁止や暴利の取締りなど倫理的規制を行なった。このように、自由はかなり制限されていた反面、十字軍派遣などがあるものの、比較的安定した生活が営まれていた。

イタリア中部にあるアッシジを訪問した時、街を歩いていて中世の宗教的雰囲気を感じることが出来た。道は曲がりくねっていて、丘の上の狭いところに建物が並んでいる。街の真ん中には大きな教会が聳え立っていて、中に入ると格別に大きく美しいステンドグラスが目を引く。街の周りは、畑はきれいに耕され、木々の緑と一体となった田園風景。時間はゆっくりと流れ、人々は聖職者に導かれて、精神性を重んじた生活を送っていた姿が自然な形で浮かんでくる。

これは芸術面にも表れている、ギリシャの演劇はローマ帝国末期には、享乐的、エロティックなものになっていったため、キリスト教がローマ帝国の国教となると、エロだけでなく、演劇そのものが禁止されてしまった。また、聖書の中で聖パウロが「女性は教会の中で黙っていなければならない」と述べていることから、女性は教会の中で歌うことを禁じられていた。

人間社会は、欲望を充足し個人が自由を満喫する社会と、精神性を重んじ規律ある集団生活を営む社会とがある。遊牧生活の社会の中から、乾燥した砂漠地帯の生活を維持していくために、ユダヤ民族の中から、鉄のような規律と民族の固い団結心を基本とする思想が生まれる。厳しい気候・風土を生き抜く知恵としてユダヤ教という一神教が生まれ、それを世界宗教として発展させたキリスト教の信仰が、中世ヨーロッパ社会を支配するのである。

第3章 近代ヨーロッパの幕開け

イタリア・ルネサンス

およそ1000年続くキリスト教支配の中から、14世紀～16世紀にイタリアを中心に新しい動きが始まり、それはやがてヨーロッパ全体に影響を及ぼしていく。これはルネサンスと呼ばれているが、ルネサンスとは再生という意味であり、今日でも非常に良く使われる将来に明るい展望のもてる語感を持っている。

ルネサンスは、中世キリスト教の禁欲的生活から個人を解放し、人間の生な欲求を充足することを肯定する。個人は教会の倫理や古い権威に拘束されず、生活の単位を集団的なものから個人や家族へと移行させた。ルネサンス精神は、本質的に衝動をもつ「人間性」を強調し、学問や芸術に関心をもつ教養個人主義であった。

従来、イタリア・ルネサンスは、古代ギリシャ・ローマの文化を復興・再生しようという動きであるとし、その内容は、日本では文芸復興と訳されている。しかし、1000年という時間はあまりにも長い歴史であり、人間の歴史の中で、突然昔の時代が復興するということは他に例がないから、私は若いころから、なぜ1000年の時を経てルネサンスが起きたのかが不思議であった。

この本を書くにあたり調べてみると、このような「ルネサンス」像を提起し、「ルネサンス」を歴史用語として通用させたのは、ブルクハルトであることが分かった。彼は1860年に『イタリア・ルネサンスの文化』を書き、イタリアの「ルネサンス」の新しい要素は個人主義の確立にあるとし、それが「古代の復活」と結びついていると指摘した。

ブルクハルトに対して、それ以後多くの歴史学者から、「個人の活動を主とする商業主義は、イタリアでは12・3世紀においてすでに隆盛していた」「中世のアッシジの聖フランチェスコ（1181～1226）のもつ感受性と人間と自然への愛情が、ルネサンスの主要な契機となった」「12・3世紀においてフランス・ゴシック美術の開花があり、ルネサンス美術の基本である自然主義と現実主義は、それを受け入れたものである」「フランスでは12・3世紀に、ラテン古典文学や自然科学において新しい動きがあった」「中世においても個人主義は見られたし、15・6世紀になってもキリスト教の影響はきわめて深かった」「この時代がそれ以前と比較して独自性があったとは思えない」などといった反論を受けることになる。

今日では多くの歴史学者は、ギリシャ・ローマの文化の復興ということも一つの要素であるが、新しい精神的な、そして社会的な動きが重要であり、ルネサンスと中世をはっきりと区別すべきではないと考えているようである。

一方、美術史家の間では、ルネサンスと古代ギリシャとの関連を今でも見出そうとする。そこではラファエロが、ヴァチカン市国のシステリーナ礼拝堂の壁画『アテネの学堂』において、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、ピタゴラス、ユークリッド、ヘラクレイトスなど50名を超える古代ギリシャの賢人たちの絵を、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロなどルネサンス期の有名人をモデルにして描いたことが何よりの証拠とされているようである。

しかし、ルネサンス時代の画家であり、建築家であったヴァザーリの『ルネサンス画人伝』を見ると、20数人の画家の業績が紹介されているが、ギ

リシャ・ローマの影響は極めて限られていることが分かる。ヴァザーリは、ジョット（1276～1336）の行った絵画史における革新を強調し、「デッサンはジョットのおかげですばらしい生気を回復した」「近代的なすぐれた画風を復活した」「彼は自分一人で、優秀なデッサンと彩色の画風を創始した」と書いている。

また、ジョットの描いた、フィレンツェのサンタ・クロチェ寺の壁画『聖フランチェスコ』と、アッシジのサン・フランチェスコ寺の壁画『聖フランチェスコの生涯と事績』の32の場面について、「さまざまな服装や自然の事物のある種の模倣や観察が実に見事に行われている」と絶賛しており、ジョットの革新に、聖フランチェスコの思想の影響が大きかったことを強調している。

ヴァザーリは、ルネサンス時代の画家の人生と画風について詳しく記述している。彼はミケランジェロの弟子であったから、彼の評価がすべてではないにしても、同時代の画家の一人であったヴァザーリが、それぞれの画家についてどう見ていたかということは、無視できないものであると思われる。何よりも驚いたのは、今日有名なボッティチェリ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ミケランジェロのほかにも、数多くの画家が存在し、ヴァザーリからそれなりの評価を受けていることである。もちろん、偏見をもっていたと思われるボッティチェリに対して以外の、他の三人に対しては最大級の評価となっている。芸術の発展は、裾野の広さがある、頂上は高くそびえるものであることを示している。

田中英道氏は『ルネサンス像の転換』のなかで、ジョットの革新に注目し、彼の絵に描かれた人物が、東洋人的風貌をしていることに着目している。そしてフランチェスコ派の伝道が、イタリアと中国の仲介の役割を果たし、中国画がルネサンス絵画に影響してその基本となったことを強調している。

マルコ・ポーロの『東方見聞録』に見られるように、1300年前後の中国のモンゴル帝国は、当時の世界の中でもっとも進んだ国であり、西洋と中国はモ

ンゴル帝国の整備したルートにより、9・10か月で結ばれ、火薬、活版印刷術、羅針盤のほかに、絹地に描かれた絵画作品がヨーロッパにもたらされていたのである。

田中氏は、中国の絵画とルネサンス期の絵画の様式面での共通性を指摘するとともに、ルネサンス期の絵画が、古代ギリシャの絵画と様式面でかなり異なっていることを明らかにしている。まず、ルネサンス期のヴィーナスは、官能性を備えている一方で憂いにみちた可憐な哀感をもち、この時代特有の表現となっている。聖母子像については、ギリシャには母と子の絵は存在しない。キリストの磔刑像^{たぐけいざう}は、ギリシャのアポロ神の力強い姿とは対極にあり、精神的な象徴としてだけでなく、個人の生活にある懐疑、落胆、絶望そして極度な肉体的な苦痛や恐怖感が、その姿の中に見通されている。

田中氏は、数多くの美術の学者が「ルネサンス」の芸術の中に「古典」の断片を認め、それらを古代ギリシャの復興の証拠としてきたが、それはあくまで断片的に用いられたにすぎず、根本的な模倣ではなかったと結論づけている。そして「神の裁きによる善と悪の二元的判断に委ねられてきた人間の精神が、この時代に難解で曖昧で未知なものだという認識を与えられるようになった。…意思的にメランコリーたらんとする風潮こそ、この時代の特徴というべきであろう。」と述べている。

中国や中世の聖フランチェスコの影響のほかにも、十字軍の遠征などにより、当時大きな勢力となり文化的にも発展していたイスラム社会や東ローマ帝国に、人間中心のギリシャ文化が継承されているのを知ったことや、1453年に東ローマ帝国が滅亡し、コンスタンティノープルが陥落したため、東ローマ帝国から多数の知識人がイタリアに渡ってきたことなどもルネサンスの要因としてあげられる。

ルネサンスは単純にギリシャ・ローマの文化が復興したのではなく、さまざまな要因が重なり合って、人間の精神を解放し、近代ヨーロッパ幕開けの萌芽^{ほうが}

となったといつてよいであろう。

中世社会の中でもしだいに商業が発達。特に地中海貿易で繁栄するようになったヴェニスやフィレンツェが自由な都市として発展し、財力豊かな商人が文化のパトロンとして芸術家たちを育てたことは重要なことである。

特に、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロそしてラファエロの三人のパトロンはいずれもメディチ家であった。三人の業績は人類の歴史に燦然と輝いており、特定の時期に、フィレンツェという特定の空間で大きな業績が達成されたという意味において、古代アテネのアクロポリスのふもとのアゴラが想起される。

まず、ダ・ヴィンチは「万能の天才」といわれ、絵画、彫刻、解剖学、天文学、音楽について大きな業績を残しているほか、13,000ページに及ぶ膨大なノートを書き残し、その中には飛行機、装甲戦車、潜水艦、計算機などのデザインがアイデアとして描かれていた。ヴァザーリは彼について「この上なく偉大なる才能が、多くの場合、自然に、ときには超自然的に、天の采配によって人々の上にもたらされるものである。優美さと麗質、そして能力とが、ある方法であふれるばかりに一人の人物にあつまる。」と、その天才ぶりを表現している。

絵画としては「モナリザ」と「最後の晩餐」があまりに有名である。ヴァザーリは「最後の晩餐」について、「ダ・ヴィンチは使徒たちの顔にあまりの荘厳さと美しさを与えてしまったため、キリストの顔には神性を与えることができないと思い、未完成のまま残された。また、フランスの王がこの絵があまりに素晴らしいので、自分の国に持っていかうとしたが、修道院の壁に描かれていたためにミラノに残された。」と書いている。

「モナリザ」の絵を最初に高く評価したのはラファエロである。彼はダ・ヴィンチを尊敬し、彼の絵を模写しており、ラファエロの女性の肖像画には「モナリザ」の影響が見られるという。また、職人氣質で、沢山の弟子たちと

工房で仕事をし、貴族や教会の依頼に応じて精力的に絵の製作を行なったため、37歳で亡くなった。

ヴァザーリはラファエロについて「たいへん女好きでほれやすい人であった。女遊びを続け、度を越した放蕩をおこなった。」としている一方で、「ラファエロのおかげで、技芸も色彩も創意工夫も一体となってあの最高度の完成に達した。」と評価している。また、その人柄について「画工たちがラファエロと一緒に仕事をすると、みな気分が一致して、お互いが円満に調和し、愉快地働いた。」と書いている。

ラファエロのライバルであったのがミケランジェロである。ヴァチカンのシスティーナ礼拝堂は、壁画はラファエロ、天井画はミケランジェロとなっている。しかし、ローマ教皇から天井画の依頼を受けた時「自分は彫刻家であり、画家ではない」と語っており、父に弱音をはいて送った手紙が残っている。代表作はヴァチカンにある「ピエタ」とフィレンツェの「ダヴィデ像」である。「ピエタ」は、若いマリアが磔（はりつけ）になって死んだキリストを抱いている像である。

建築家としても大きな業績を残しており、サン・ピエトロ寺院の建造に17年間を費やしている。ヴァザーリはミケランジェロについて、他の誰よりも圧倒的に多くの紙面を費やし、芸術家として最高の評価をし、システィーナ礼拝堂の天井画の制作が困難を極めたことについても、足場の骨組みが良くなかったこととカビの繁茂をあげているが、弟子の評伝であるから、客観的なものではない。しかし、ミケランジェロは芸術家気質で、気が向くと仕事をするという風であったため89歳まで生きて、多くの優れた作品を残した。彼が偉大な芸術家であったことは間違いがない。

このような数多くの芸術家がイタリアの都市で活躍できた背景には、当時のローマ教皇や富裕な商人の存在があった。芸術家支援の代表格であるメディチ家は、当初薬を商^{あきな}って栄えていたが、14世紀にはいって銀行家として活躍し、

1410年にはローマ教皇庁の財務管理者となって、金融業務で莫大な利益を得る。多くの芸術家を育て、イタリア・ルネサンス文化の興隆のうで大きな役割を果たした。

私は1981年2月のローマ旅行に際して、ローマから列車に乗って、妻と二人だけでフィレンツェを観光した。フィレンツェは、イタリア・ルネサンスの華やかさが街全体にあふれている楽しい街である。ブレネスキのフィレンツェ大聖堂とジョットの塔は、建物の壁面全体が絵画を見るような色彩豊かな美しい建物である。ベッキオ橋の両脇には土産物屋がびっしりと並び、買い物客で賑わっている。塔の上から街を眺めると、街全体が良く保存されていて、屋根の色は赤茶色に統一されている。

ウフィチ美術館には、ルネサンス期の名画が沢山展示されている。中でも、ポッティチェルリの「春」や「ヴィーナスの誕生」は、丁度修復されたばかりで色鮮やかであり、あたりを圧倒していた。大きなキャンパスに描かれ、華やかで若い女性の魅力を余すところなく表現した紛れもない名画である。この二つの絵は、ともにコージモ公という貴族の別荘に伝わっていたものであるという。

ラファエロの絵は、女性の表現が明るくとても優美である。写真とは全く違う、名画をすぐ近くで見る感動。日本に帰ってからの美術館通いは、このときの経験に依拠している。

ミケランジェロの「ダヴィデ像」は、4メートルの高さの彫刻であり、フィレンツェ市の依頼により制作され、当時は政庁の前に置かれていたが、今は複製がシニョーリア広場にあり、本物はアカデミア美術館に展示されている。

フィレンツェの街を歩いていると、アッシジのような中世の街とは異なり、人間のあるがままの姿を表現し、植物が光を求めて伸びていくように、明るさを求めようとしたこの時代の人の気持ちがよく伝わってくる。

ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」には、その後ミラノで鑑賞する機会を得るこ

とができた。ヴァチカンのサン・ピエトロ寺院にあるミケランジェロの彫刻「ピエタ」は、伸び伸びとしていて、才能が自然に発揮されたという印象を受ける。絵画に自信がないというより、彫刻には天性の才能があると自分で感じていたのかも知れない。

ルネサンスを推進した人々は、中世的世界を打ち破り、新しい人生観を打ち立てたが、人間性あふれる高度な社会への個人的・主観的な憧憬であり、教養主義であったため、新しい社会秩序を建設するものではなかった。実際には、その芸術活動は、王権や貴族、教会、大商人の庇護のもとに成り立っており、社会構造の変革に対しては保守的な役割を果たした。ルネサンスといっても、その動きは多様であり、統一的思想原理を持ったものではなかったのである。

一方、ルネサンスの時代は、ペストの流行や政争、戦乱の続く波乱の時代であった。16世紀になると、フランスでもイタリアの都市との交流が盛んとなり、絵画、文学、料理、造園技術などの影響を受ける。やがてルネサンスは、ドイツ、イギリスへと波及していく。

宗教改革

ドイツの金属加工職人であったグーテンベルクが、金属の活字を使用した活版印刷技術を実用化し、1455年に初めて聖書を五百部ラテン語で印刷する。彼の完成させた印刷技術は急速に普及し、1470年にはパリで初めて印刷工場が設立される。これにより、書籍が流通するようになるが、特に聖書を一般の人も手にすることが出来るようになった。

聖職者の説教によってキリストの教えに接していた人々が、実際に聖書にどう書かれているかを知ることが出来るようになると、聖書に忠実な信仰を求める動きが起き、宗教改革が始まった。

きっかけを作ったのはルターの免罪符批判であった。1515年、教皇レオ10世がローマのサン・ピエトロ教会の建設のために、ドイツでの免罪符販売を許すと、ルターはこれに強く反発する。免罪符を購入することによって、あらゆる罪から解放されるということに危機感を感じ、「人はただ信仰によってのみ許され、その信仰のよりどころは聖書以外にない」との主張が、聖職者の墮落などへの信徒の不満と結びつき、多くの人の共感を得る。ドイツ語訳の聖書を発行したことも聖書の普及に貢献した。

しかし、ルターは伝統的な考え方の上に立って神の摂理を強調し、職業と身分は、一度神から与えられればそこに留まるべきだとした。地上における生活上の努力を肯定しなかったという意味で、結局、宗教と職業労働との新たな結合をもたらすには至らず、高利貸しのみならず利子一般も非難した。コペルニクスを「成り上がりの星占い師」と罵倒し、地動説を信じなかった。

フランスのカルヴァンにおいては、信徒たちの神との交わりは、深い内面的孤立の中で行なわれ、宗教的な事柄が個人の責任とされた。カトリック信者のように、悔い改めと懺悔ざんげによって司祭に助けを求めることは無くなったが、同時に司祭から贖罪しよくざいと恩恵の希望を与えられることも無くなった。生活全体の意味を根本的に変革する行為によってのみ、神の恩恵を受けられるとされた。

一方、社会的な組織づくりに取り組み、カトリックが、神と信者との関係として、神—ヴァチカン—司教—神父—信者というタテ系列のピラミッド型を構築し、「神父」は男性で独身者であることを条件としたのに対し、プロテスタントでは、「牧師」は神と信徒との仲立ちをする者として位置づけられた。教会運営を、信徒の代表と牧師が協議するように改革し、牧師は、カトリックの神父と異なり、妻帯も可とされた。

また、神がキリスト者に欲するのは社会的な仕事であるとして、職業労働の重要性を強調し、無欲の勤労の結果として蓄財がなされることを肯定した。物質的欲求については、「食欲」な行為は否定したが、職業労働の結果として財

産を築くことは神の恩恵であるとし、中世では禁じられていた金利の意義を認めることによって、新興の市民層の支持を受けるようになる。

このカルヴァン主義は、イギリスにおける宗教改革を促進し、ピューリタン革命へと発展していく。一部はアメリカ大陸に移住し、アメリカの歴史を創っていく。

ピューリタンは、商工業者だけでなく、独立自営農民や借地農民の労働をも重要視した。しかし、過激な主張を唱える者も出て来て、享乐的なものとして、劇場の排斥や裸体の閉め出しを行ったり、教会における宗教的儀式を呪術ようじゆつとして排斥し、埋葬に際しても歌も音楽も無しに近親者を葬ったりした。

宗教改革の結果、キリスト教は大きく分けて、カトリックとプロテスタントという二つの勢力に分裂し、両者は何度も戦争するという事態に発展していく。

「プロテスタントは、キリスト教に対する信仰心をカトリックよりも緩やかなものにし、宗教的支配から解放した」というのは誤解であり、プロテスタントの方が厳しかった。カトリックの神父は妻帯していないが、必ずしもすべての人が女性に対して禁欲ではなかったという現実があったし、カトリックの教会規律の中には形式化していたものが多かった。宗教改革はそうした現状を批判し、信仰における個人と教会の関係を変えた。カトリックが個人の実際じじの生活まで及ばないものであったのに対し、プロテスタントは家庭生活と社会生活の全体に対し、厳しい規律を要求するものであった。個人にとって信仰は、より厳格なものになったのである。

それではここで、宗教改革によって起こされたプロテスタンティズムが、近代的な経済システムである資本主義の発展にどうつながっていったかについて、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫、大塚久雄訳）の内容を紹介することとする。

中世の商工業の社会は、古代とは異なり、利潤追求に対する倫理的規制はあっても、すべて自由労働を基礎とし、特に商人はほとんど全く自由民であっ

た。一般的には、イタリア・ルネサンス期の商人の活躍と宗教改革により、宗教的制約から解放され、資本主義の発展につながったと考えられがちであるが、ウェーバーによれば、それは全く事実と反するものであり、宗教的情熱が資本主義をもたらしたということである。

まずルターが、世俗の職業は神の召命しょうめいであり、我々が現世において神から与えられた使命である「天職」であり、隣人愛の現われであるという考え方を示す。

更に、カルヴァン派の信徒にとって、現世において行う社会的な労働は「神の栄光を増すため」のものであり、倫理の特徴的な部分として、「神に選ばれし者」に属しているかを知ることが出来る確かな標識となった。

カルヴァン派から発生したイギリスのピューリタニズムにおいて、財の獲得や利潤の追求は神の意思に添うものとされ、無頓着な享楽に全力を挙げて反対し、時間の消費が重い罪となった。利得されたものの消費を抑制し、それを蓄財して生産的な利用、すなわち投下資本としての使用を促した。

中産的生産者の内面に「資本主義の精神」が宿った場合、そのうちのある人々は経営を拡大して近代的な産業経営者となり、他の人々は経営内の規律にみずから進んで服することが出来るような近代的な労働者となっていく。長い間の宗教教育の結果、こういう行動様式を身につけた労働者が大量に与えられてはじめて、資本主義的な産業経営の一般的な成立が可能となった。いったん資本主義という社会機構が形成されると、それを維持するために儲けなければ経営を続けていけないため、儲けることは倫理的に是認され、「天職」としての労働という信仰は薄れ、産業革命を引き起こし、資本主義という鋼鉄のようなメカニズムが作り上げられていった。

一般的に、ルネサンスと宗教改革が一体となって、ヨーロッパにおける近代の幕開けとなったと考えられがちであるが、ウェーバーの友人であるトレルチは『ルネサンスと宗教改革』（岩波文庫、中野好夫訳）の中で、まず、社会学

的形成の推進力という概念を打ち出し、それを「人間もしくは人間の行動を内側から一定の方向に推進していく力。一定の生活原理や生活規範が提示され、それによって人生百般における一定の態度決定が打ち出されるような倫理」と説明している。そして「ルネサンスが禁欲を解放したのに対し、宗教改革は中世の禁欲とは異なる新しい禁欲を課した。峻厳なる罪概念、人生は天国のための試練と苦難の実証の場所であるという来世観念、悪魔・悪霊の存在に対する信仰はカトリック以上に強調された。また、カルヴァン主義は必要な種々の統制組織を創り出しており、新しい社会を作っていくうえで、宗教改革はルネサンスよりも大きな力を持っていた。」と主張している。

私は、ルネサンスの段階では漠然とした時代風潮であったものが、宗教改革において、具体的なキリスト教組織の改革、緊張感を持った個人の信仰のあり方の変革へと進んでいき、信仰と一体となった生産、勤勉、節約を重んじる考え方が、資本主義という社会をもたらしたと考えている。

一方、ローマ法皇を頂点とするカソリック教会側は「イエズス会」を組織して、世界的な布教活動に乗り出す。その使命を帯びた宣教師フランシス・ザビエルが、インド、東南アジアを経て、日本の鹿児島に着いたのは1549年であった。

このように、中世と宗教改革以降の時代では、個人と社会の関係は異なるが、キリスト教が大きな意味を持っていたということでは同じである。むしろ、16世紀から17世紀にかけて、プロテスタンティズムにおいて宗教的情熱が高まり、個人の教育や社会の変革の原動力となったのである。

科学・哲学・市民革命

中世においては、キリスト教の強い影響下に、神の存在証明、人間存在、自由意志、善悪などについての思索がなされた。哲学は神学の中に包含されてい

る状態であった。

ルネサンス・宗教改革の時代になると、科学、哲学、思想において、自然界の法則や人間存在について、人間の理性への信頼に基づく新しい考え方が現れ始める。

まず科学についてみると、アリストテレスの天体論の考え方に基づいて、2世紀中ごろに、プトレマイオスが天体運動のモデルを作り、その天動説がキリスト教の世界観と一体となり常識となっていたが、1543年、コペルニクスが『天球の回転について』において地動説を唱える。

今日、よくコペルニクスの転回と表現されてもはやされているが、地動説を初めて唱えたという点においては画期的であったが、説明は必ずしも十分ではなかった。コペルニクスの死後、占星術師であったプラーエが精密なデータを集め、それをういてケプラーが17世紀初め、天体運動の法則を数学によって定式化した。これによって、物質を数量的に見る立場を確立し、重力、慣性の法則を発見した。

ケプラーと交友していたガリレイも、観察事実を積み重ね、物事を測定して数量化し、そこから現象を表現する数学的な関係式を導くという方法を取り始める。また、落下について研究し、従来信じられていたアリストテレスの「物体の落下速度は物体の重さに比例する」と言う説を否定し、物体の落下速度はその重さには無関係で、時間の自乗に比例することを証明した。更に、二つの力を受けた物体の運動について研究し、地球が回転していても、地上の人間が後ろに取り残されないのは慣性の法則があるからであることを証明し、天動説に対する反駁^{はんぱく}となった。1632年『天文対話』において、地動説を一層明確に説くと、宗教裁判にかけられ、自説の放棄を余儀なくされるが、法廷を立つとき「それでも地球は動く」とつぶやいたと言われている。

ニュートンも、自然現象を数学的法則に帰着させる方法を受け継ぎ、ケプラーとガリレイの発見した法則を統一して「万有引力の法則」を発見するに至

る。また、現象を出発点にとる帰納法を重視し、ニュートン力学を提唱。後に相対性理論や量子力学によって乗り越えられるものの、この時代においては画期的な仮説の提示となる。帰納法とは、個々の事実から、それらを包括する一般的な命題を推定するものである。これに対し、経験に頼らず論理の規則に従って、特種的個別的な事実を導き出す方法を演繹法えんえきほうという。

化学においても、具体的な内容は省略するが、アリストテレス的な世界観が克服される。アリストテレスといえば古代ギリシャの時代の人である。いかに長い間科学の不毛の時代が続いたかが分かるであろう。また、この時代の科学者は、当然のことではあるが、中世以来の宗教観、科学観から全く脱却していたとは言い切れないということも、見逃してはならない点である。

次に哲学について見ていくこととするが、この時代、科学と哲学、政治思想は必ずしも分離されていなかったことに注意する必要がある。

ガリレイと同時代に、フランシス・ベーコンが、中世以来の哲学を、空虚で無駄な言葉争いに没頭し、人間生活に役立つようなものを生み出していないと非難し、経験をすべてあげることによって一般的な原理を導き出す帰納法及び「実験」の思想を展開し、近代思想の口火を開く。

人間の理性を用いて真理を探求するという近代哲学の創始者と言われるのがデカルトである。彼は、宇宙には「エーテル」が満ちていて、それが回転することによってそれに浮かんでいる天体も一緒に動いている、という渦動理論を展開し、それを引き継いだライプニッツとともに、ニュートンによって「万有引力」の立場から強い批判を受ける。

しかし、彼は純粹の哲学の分野においては、1637年『方法序説』において「私は考える、ゆえに私は存在する」という命題を提唱する。これは一般的には「われ思うゆえに我あり」と訳されているものであり、懐疑を重ね、自分を含む世界のすべてが虚偽だとしても、まさに疑っている自分だけはその存在を疑い得ない。すなわち考えること自体が自分の存在証明である。人間理

性＝自我が、^{めいせき}明晰判明な観念をもって捉えることのみが真に存在するとして、^{えんえきほう}演繹法を主張する。デカルトは数学者であり、ケプラーやガリレイに通ずるものがあった。それは機械論的世界観であり、人間の感情や身体性は軽視されていた。人間理性・自意識・自我を絶対化するものであり、人間の理性を自然や社会といった外部世界や宇宙の広大な時間の中で見ていく視点が欠けていた。いずれにしても、デカルトは近代哲学出発の起点となり、以後、デカルトの打ち出した哲学に対して研究を深めていくことにより、ヨーロッパの近代哲学が発展していく。

一方、16世紀に始まった宗教改革はプロテスタンティズムという大きな流れとなり、17世紀に入って政治体制の改革へと発展していったのが、イギリスのピューリタン（清教徒）による市民革命であった。

イギリスのヘンリー8世は、宗教改革が起こると、ルターの方針に反対し、また、自らの離婚問題からローマ教皇とも袂を分かち、1534年、英国国教会を設立する。これは同時に国王の権力を絶対視するものであった。^{たもと}女王エリザベス一世の治世は1558～1603年と長期間続き、その間イギリスはスペインの無敵艦隊を破って世界の海を支配するようになる。

このような繁栄を背景に、その後のジェームス1世は「王権神授説」を唱えて絶対専制君主となり、13世紀の「マグナ・カルタ」以来の議会を無視し、新旧両方のキリスト教徒を弾圧する。

次のチャールズ1世になると、議회를解散してしまったため、国王派と議会派の対立が生じた。そこに登場してきたのがクロムウェルで、議会派を指揮し、農村のピューリタンを中心とした武装隊を組織して、国王派を攻撃し、1649年、チャールズ1世を断頭台で処刑してしまう。いわゆるピューリタン革命である。その後、クロムウェルは権力志向を強めたが、1658年に亡くなってしまうと、王政復古が成される。しかし、1670年代にホイッグ党とトーリー党という二大政党が生まれ、1688年に「名誉革命」が起こって、「権利の章

典』において、国王に対する議会の優位が確立する。

こうしたイギリスにおける政治的展開は、一般的に市民革命と称されているが、その展開は^{うよきよくせつ}紆余曲折としており、必ずしも市民の立場に立って運動が展開された訳ではなく、政治運動の常であるが、なかなかすっきりとした理解には至らない。いずれにしても、イギリスにおける宗教改革の政治的帰結として、ピューリタン革命が起こったのである。

イギリスにおけるこうした政治的展開をみて、ホブズは、ピューリタン革命の2年後の1651年、『リヴァイアサン』を出版した。彼はベーコンの秘書をしていたし、ガリレオやデカルトと交友があった。この本の中で彼は、人間は自己保存のために、限られた自然界の資源を常に争うことになる。自己保存のために暴力を用いることは自然権として肯定されるが、個人の実力差は決定的ではないから、「万人の万人に対する戦い」となる。そこで、各自の自然権を主権者に委ねることを契約する。人間どうしが集まって、互いに生存を保持していくためには、国家が強い主権をもって、人権をもった個々の人間の集合体になるしかないだろうと推理したのである。

このホブズの思想は、社会契約論の先駆けとなり、ロックは、政府が国民との信託に反した場合の抵抗権、革命権を唱え、アメリカ独立宣言に大きな影響を与える。更に、ルソーに至っては、人民主権論と法の支配という民主主義の二大原理を主張し、フランス革命へと発展していく。更に、19世紀後半において近代国民国家の成立を見ることになるが、その基本となる考え方は、ホブズの思想の中に^{ほうが}萌芽を見ることが出来ると言ってよいであろう。

14世紀に始まったルネサンスという新しい時代風潮は、16世紀から17世紀にかけてキリスト教、科学、哲学、政治体制に革命をおこし、近代の文明・文化の^{ようらんき}揺籃期の役割を果たしていく。

第4章 ヨーロッパの光と影

魔女裁判

第3章「近代ヨーロッパの幕開け」で見たように、ヨーロッパはルネサンス以降、宗教改革、科学・哲学・市民革命を実行し、近代社会の基をつくり、17世紀以降、各分野において輝かしヨーロッパ文化・文明を築き世界をリードしていく。これを「光」の部分とすれば、一方で「影」の部分も持っていた。

まず、大航海時代における海外侵略である。当事者としては、国の発展のために行なった、と考えるかもしれないが、今から見れば圧倒的な武力差のもとに実行した侵略行為であることに違いない。南アメリカにおいて、スペインは1519～21年にマヤ・アステカ文明を、1533年にインカ帝国を滅亡させ、メキシコ、ペルー、フィリピンなどを植民地にした。イギリスは東インド会社を通じてインドを支配した。

次に、黒人奴隷貿易がある。16世紀～19世紀半ばにアフリカ大陸からアメリカ大陸や西インド諸島へ連れて行かれた黒人奴隷が、1000万から2000万人いたと言われているが、それにヨーロッパ人が関わっていた。黒人奴隷の悲惨さというと、それを受け入れたアメリカの人種差別が強調されるが、貿易の一端を担ったのはヨーロッパ人である。もっとも、アフリカの現地の人も関与したことを忘れてはいけないという指摘もある。

以上はいずれもヨーロッパ以外の世界にもたらしたものであるが、内部における「陰」の部分は「魔女裁判」である。

私が初めて関心をもったのは、ドイツの中世の古都ローテンブルクにおいてであった。この都市は日本人に人気のある、ロマンチック街道の途中にある人口1万5千人の観光都市である。街は、木組みでデザインされた建物が良く保

存され、メルヘンチックでとても美しい。広場に面して市庁舎があり、高さ160mの塔がある典型的な中世の都市である。私が驚いたのは、街の明るさとは全く異質な「犯罪博物館」である。そこに魔女裁判関係の資料が展示されていた。拷問に使った道具や木版図。説明はドイツ語と英語でなされていたが、日本人観光客が多いためか一部日本語の説明が加えられていた。

魔女裁判という言葉は知っていたが、実態についてはよく理解していなかった私は、日本に帰ってから勉強し、ヨーロッパやキリスト教というもの、そして人間について認識を新たにしたのである。それでは、森島恒雄氏の『魔女狩』（岩波新書）、上山安敏氏の『魔女とキリスト教』（講談社学術文庫）を中心に、その内容を見ていくことにしよう。

古代から、ヨーロッパ各地に広く魔女信仰があったが、それは恐怖の対象であるとともに畏敬に満ちた存在であった。

ヨーロッパがキリスト教支配の時代になると、キリスト教は各地で信仰されている、多産な女性が農作物の豊作に通ずるといふ豊穡神崇拝や森や樹木などへの自然崇拝など、土着の民族宗教との闘争を余儀なくされる。そこで行われている呪術ようじゆつに対し、カトリックの宗教儀式で対抗しようとし、土着宗教の中にあるデーモンの要素を悪魔（サタン）の仕業とする。古い魔女の観念から畏敬の要素が取り除かれ、キリスト教は新しい秩序をつくるために、魔女は悪魔に仕えるものとして魔女を弾圧し始める。中世のキリスト教では、悪いことは何でも悪魔の仕業と考えられていたからである。

キリスト教組織が拡大してくると、それを維持していくために、免罪符の販売や教会税の徴収を行なう反面、聖職者のお金やセックス面での墮落が横行するようになり、12世紀初めに、南フランスを中心に教会の権威に従わない異端運動がおこり、ローマ教皇を頂点とするカトリック体制に危機感をもたらす。弾圧により異端者はいなくなるが、異端者の再現を恐れ、ローマ法王は、1233年、異端撲滅の恒久的な組織として「異端審問官」制度を設け、異端審

間に関する逮捕から処罰までの権限を与える。

最初、魔女は管轄外であったが、1318年、教皇はフランスの異端審問官に対して、魔女を異端者として処分し、その財産を没収することを命じた。ここから過酷な魔女裁判が始まる。異端者への罰としては、懺悔^{ざんげ}、鞭打ちから火刑まで様々な段階があったが、魔女とされたものはすべて火刑となった。更に、財産没収が行なわれ、異端審問を実施するための財源となった。魔女は悪魔と結託し、悪魔と情交するとされたことが、キリスト教の神への最大の冒瀆^{ぼうとく}とされたからである。

魔女裁判の様子は、1485年に二人のドイツ人によって書かれた『魔女への鉄槌』に詳しく、大半は魔女の悪行が書かれている。すなわち、呪術によって農作物に被害をもたらす、人形に釘をさして相手を病気にする、人妻を不妊症にする、夫を不能者にする、嬰兒を殺す、空中を飛んで魔女集会に出席するなどである。これらは神話や伝説から寄せ集めたものであった。この本や魔女の木版図による魔女のイメージが、グーテンベルクの印刷術の普及によってヨーロッパ中に広まった。

魔女裁判の陰惨さは、密告とうわさにより逮捕されたことである。聖職者も魔女裁判にかけられた例があるように、家族さえもがお互いに疑心暗鬼になるような事態に発展した。いったん魔女の嫌疑がかけられると、無罪を証明することは容易ではなかった。拷問による自白が強要されたからである。逮捕された者の虚偽の自白によって、共犯者にされる人もあった。吊り上げ、吊り落とし、焼きゴテ、熱した鉄の靴など、紹介するのもおぞましい残虐な方法で拷問にかけられた。魔女の自供は、どれも『魔女への鉄槌』に書いてあるような内容であり、でっち上げであることを証明している。

こうして15世紀から17世紀にかけてヨーロッパで魔女裁判により処刑された人間は、30～300万人と言われ、かなり幅があるということは、今日なおその実態が良く把握されていないことを表わしている。魔女狩りのピークは

1600年をはさむ100年間であった。

魔女裁判の背景には様々な要因があげられている。ペストの大流行、宗教改革による新旧の宗教対立、異常気象による農産物の価格高騰、浮浪者層の発生などにより社会不安が増大し、あらゆる災難や不幸が魔女に結び付けられた。

1348～52年にペスト（黒死病）が大流行し、ヨーロッパ人口の25～30%が減少した。16・17世紀にもペストが南ヨーロッパで猛威をふるった。

1550～1700年は小氷河期と言われ、ヨーロッパ中が雨と雪と氷に覆われ、寒冷の厳しい気候が農作物に被害を与えた。小氷河期と魔女裁判のピークはほぼ重なっており、悪天候が魔女と結び付けられたことが分かる。

第3章「近代ヨーロッパの幕開け」で見たように、ルネサンス、宗教改革により、合理的、科学的精神が育ちつつあった時代にも、宗教の世界においては、ルターやカルヴィンは悪魔の存在を固く信じていた。悪魔を信じない者は、神を信じたことにならないからであった。神秘主義が完全に払拭されてはいなかったのであり、プロテスタントはカトリック以上に熱心な魔女裁判官となった。イングランドでは、魔女狩りはピューリタンの支配下でピークに達している。

そのほかにも次のような要因があげられている。ヨーロッパの山岳地帯では「近代の幕開け」となる新しい風は及んでおらず、都市部の教養人と異教的迷信を持ち続けている農民層との間に文化的格差があった。薬草を用い、出産術をもった産婆が、嬰兒殺しの疑いにより魔女裁判にかけられた。現代で言う精神異常者が魔女摘発の対象となった。

私は、ヨーロッパ人が、他の民族に対して示した優越感が、ヨーロッパ以外の社会を野蛮な未開社会と決めつけ、海外侵略を行なったと同じように、内部に向けては、いわゆる古い考え方や弱者といわれる人たちを排斥しようとしたのではないかと思う。近代の幕開けの時代にむしろ激しくなったということは、大きな変化の中の鬼子^{おにご}といってよいであろう。科学的認識を深めた学者や医学

者の発言が社会をリードしていくなかで、18世紀において魔女裁判は急速に消滅していく。

そういう意味では、魔女裁判は人権と福祉の思想が未成熟な中で生じた問題であり、現代にも通ずる、人間の精神の根本的なあり方に関わる問題であると思われる。

魔女裁判を初めとして、ヨーロッパの「影」の部分は、嫌悪感を催す内容であり、忘れ去ってしまいたい事柄であるが、これも歴史の事実であることには代わりがない。

音楽の都ウィーン

今日の日本人が抱いているヨーロッパのイメージは、その「光」の部分である。それらをまず、ウィーンの都市において見ていくこととしよう。

15世紀中ごろ、ウィーンは神聖ローマ帝国の都として栄え始めた。イタリアでルネサンス文化が開花していた頃の1498年、皇帝が「宮廷合唱団」を創設。これが、今日「天使の歌声」として世界的に有名な「ウィーン少年合唱団」の前身となる。以後、歴代の皇帝自身が音楽をたしなみ、ヨーロッパ各地から一流の音楽家を招いたため、ウィーンはヨーロッパ音楽の一大中心地として発展していった。

この時代音楽活動は、国王・貴族に宮廷音楽家として雇われるか、教会でオルガニスト、合唱隊の指揮、付属学校の教師になるかであった。

1756年ザルツブルグで生まれたモーツァルトは、6歳になると、ウィーンの宮殿や貴族の館で3ヶ月間ピアノを演奏し、神童の名をほしいままにする。実際、教会で聴いた複数のパートの合唱曲を一度聴いただけで音符にしたというから、クラシック音楽史上最大の天才であることは間違いがないであろう。

クラシックは数学から生まれている。フランス最初の大学として1215年に

設立されたパリ大学において、音楽は自然科学に属し、数と量を扱う学問であり、そこから音程と和音が生み出された。音楽は自然の中にある秩序を表現したものである、という考え方もあるくらいであるから、モーツァルトはそれを天から受け止めるようにして楽譜に書きとめたと言ってよいであろう。今日でも、モーツァルトの作曲した曲を聴かせるとIQが上がるという研究結果もある。

1781年、モーツァルトは25歳の時、ウィーンで音楽家として生きようと決意してそこに移住し、10年後に亡くなるまで、ウィーンで数多くの名曲やオペラを作曲した。

天才モーツァルトが亡くなった翌年、22歳のベートーベンがウィーンでハイドンの弟子となる。以来34年間ウィーンで生活。ハイドン、モーツァルトの音楽を継承し、突然の聴力減退の病に襲われ、遺書まで残す苦難な状況の中で、九つの交響曲のほかに、数多くの室内楽曲を作曲した。ウィーンの貴族たちは年金を払うなどして、ベートーベンの音楽活動を支えたが、1827年、ベートーベンは「諸君、拍手したまえ、喜劇は終わった」という言葉を遺して世を去った。

生粋のウィーン生まれ、ウィーン育ちはシューベルトである。彼は1797年に生まれ、1828年31歳で亡くなった。彼の生涯の伴侶は貧しさであり、恋人にも、敬愛していたベートーベンにもめぐりあえず、多くの親しい友人と優しい兄に支えられた音楽人生であった。彼の歌曲にその悲しみ、嘆き、孤独が表現されている。

この時代、音楽家は国王・貴族か教会のために曲を作った。モーツァルトもベートーベンも自由な活動を求めているが思うように行かなかった。シューベルトが最初の本格的な自由音楽家である。音楽家が、出版社と契約し、演奏会を開催して収入を得、自らの活動によって生活する独立した職業となる。貧しさの裏には芸術家としての自由があったのである。

一方、音楽は貴族や聖職者のものだけでなく、それを楽しむ市民の誕生をも意味していた。ウィーン・ワルツが流行し、1832年の謝肉祭では、ウィーンの人口40万人のうち、772の舞踏会で、20万人のウィーン市民が踊ったという。

1842年には「ウィーン・フィルハーモニー」が創設され、著名な作曲家が自分の作品を指揮したことによって、世界一流のオーケストラとなる。

その後、1873年にウィーン万国博覧会が開催され、日本ではあまり知られていないが、19世紀末～20世紀初頭のウィーンは光り輝いていた。精神分析のフロイトのほかにも、そうそうたる物理学者、経済学者、文学者、音楽家、哲学者が活躍している。その背景には、皇帝フランツ・ヨーゼフが、1857年から30年間にわたり、リング通りに沿って、市庁舎、国会議事堂、国立オペラ座、ブルク劇場、国立自然博物館、王宮公園などを建設したことがあげられる。空間と建物、そこで展開される学問と芸術文化。古代ギリシャのアテネのアゴラと、イタリア・ルネサンス期のフィレンツェを思い出さずにはいられない。

ウィーンは、最盛期には200万人であった人口が、今日150万人と、都市の拡大を行なわず、古い建物を大切に「音楽の都」として、世界中から多くの観光客を集めている。

ナポレオンと芸術の都パリ

ウィーンで、皇帝ヨーゼフにより、文化的な建築物が次々建てられていた丁度おなじ頃、フランスのパリにおいても都市大改造が行われていた。

その前に、フランスの歴史を見ていくこととする。フランスで絶対王政が確立するのがブルボン王朝のルイ14世の時である。彼は、1661年、パリの郊外にヴェルサイユ宮殿の造営に着手する。左右対称でバロック精神を代表する壮

大な建築物であった。宮殿の周りには、貴族・執政者1,000人、家臣4,000人、従者や兵士が1万4,000人住み、小都市を形成するほどであった。ルイ14世の宮廷楽団は、食事、祝宴、舞踏会に際して室内楽を演奏した。こうしてバロック芸術がヨーロッパ全土に美の基準を提供していった。

しかし、魔女裁判のところで触れたように、1550～1700年はヨーロッパ一般と同様に、フランスにおいては小氷河期を迎えていた。

悪天候が終わるのは18世紀初め頃であり、人々はパリにおいて、レストランや喫茶店に集まり、飲食をしながら会話を楽しんだ。また、貴族の家では女主人公を中心に食べ物や飲み物は勿論、音楽を交えて知的な会話を楽しむサロンが約800もあった。

西洋史学者の木村尚三郎氏によれば、フランスの革命思想も、18世紀のパリの開放的な雰囲気、サロンの自由な雰囲気の中から、まさに貴族や有産階級自身によって作られていったという。

しかし、18世紀のパリ市内は、不潔、不衛生で、汚物が頭の上から降ってくるような住みにくい街であった。

また、当時のブルボン王朝下の庶民の生活は悲惨であった。そこで、1789年、食糧難の不満からフランス革命が勃発する。

ここで、フランス革命の中で、ヨーロッパ社会を大きく変革したナポレオンについて見ていくこととする。ナポレオンは今日でもフランスの英雄であり、軍事の天才・市民革命家というイメージが強いが、実際には戦争に明け暮れた人生の中で、敗戦の憂き目を何度も経験している。また、権力の集中を推し進め、議会の議決と国民投票を経てはいるものの、終身制の皇帝の地位につき、ナポレオンの子孫にその位を継がせることを決めた。

ナポレオンにおいて注目すべきことは、その業績にある。税制や行政の制度整備を進め、フランス銀行を設立。本格的な民法であるナポレオン法典を制定して「万人の法の前の平等」「信教・経済活動の自由」など近代的価値観を取

り入れた。革命の理念である「自由・平等・博愛」を各国に広めた。

また、徴兵制による国民軍を組織した。フランス革命以前のフランスの軍隊の将校は貴族出身者に限られ、将校の数は3万5千人にふくれ上がっていたが、2万3千人までが勤務していない状態だった。ナポレオンの管理能力により、強くなったフランス軍はヨーロッパを席卷した。更に、公共教育制度を創設し、メートルやキログラムを定めた。憲法を制定するとともに、議会を置いて近代的な行政・司法の制度を確立した。

独裁により、政治・経済・社会の革命を推進していったのであるが、その犠牲も大きく、ナポレオン戦争で200万人もの命が失われた。その最大のものは、大軍を率いてのロシア遠征で、ロシア軍の徹底したモスクワ焦土作戦にあって総退却。飢えと寒さで次々と脱落者を出し、無事帰還したのはたったの5千人だという。その模様は、トルストイの『戦争と平和』に詳しく書かれている。

パリの中心に位置している凱旋門は、ナポレオン軍がロシア・オーストリア連合軍を破った勝利を祝して、ナポレオンが1806年に建築を命じたが、彼が失脚したため、ようやく1836年に完成した。古代ローマに多く見られた戦勝記念碑であり、壁面にはナポレオンの戦いや義勇軍の出陣を描いた彫刻が飾られている。今日のフランス国歌も、ナポレオンの戦勝記念の最初の祭典で、マルセイユの兵がパリに入場する時歌っていた革命の歌、祖国を守る歌である。

産業革命はフランスにも及び、パリの人口は1800年には55万人であったものが、19世紀中頃には100万人を超え、急激に人口が増大し、都市問題を引き起こしていた。

フランスの政治は、王政復古を経て、1851年、ナポレオン1世の甥が、ナポレオン3世として皇帝に即位した。以後20年間、フランスの政治は安定し、経済は順調に発展した。そのナポレオン3世の支持を受け、セーヌ県知事としてパリの大改造を行なったのがオスマンである。

彼は、1853年知事になると、早速事業に着手する。凱旋門を中心に大き

な道路を放射状に張り巡らし、パリ市内の住宅の43パーセントを取り壊した。中世の曲がりくねった道路を壊し、近代的・機能的な都市に作り変えようとするもので、いわば物理的な「都市革命」の実行であった。オペラ座、鉄道の駅、病院、大学などの建築物を整備し、下水道による公衆衛生の改善、市民のための広場や市場の設置を行なった。フランスでは王室の財産を国民のものにすることが行なわれ、王室の狩猟用の森であった900ヘクタールにも及ぶブローニュの森が、市民のための森林公園として公開された。

一方で、パリの街には、細く曲がりくねった道路の、非常に古い歴史のある街も残り、改造された都市とは趣を異にすることとなった。特にモンマルトル一帯において、カフェやキャバレー、芸術酒場でピアノ演奏、詩の朗読が行なわれた。シャンソンはこうした中から生まれる。世界中の若い芸術家の卵たちが競って芸術の都パリを目指し、古くて安い宿で交流しながら、自由奔放な生活を楽しんだ。その中から、絵画、音楽、文学の分野で活躍する人が現れるようになり、パリの名前を世界に広めた。

1857年、パリで開催された万国博覧会に、徳川幕府が出展した。徳川昭武を全権とする25人の使節団であった。日本コーナーでは、等身大の武者人形、茶室、芸者、コマ回しやはしご芸などの曲芸が披露された。幕府の狙いは、万博出展により、世界的に幕府の権威と信用を高めて、フランスから600万ドル（幕府の年間予算のほぼ半分）の資金を借り、幕府の軍資金とすることであった。この計画は頓挫したが、幕末の一時期、幕府とフランスは政治的、経済的に急接近し、幕府陸軍がフランス式の軍事訓練を受けている。幕府の武士たちも、ナポレオンに対して共感を抱いたようである。

ちなみに、エッフェル塔は、フランス革命100周年を記念して開催された第2回パリ万国博覧会のために建設されたものである。

19世紀後半からヨーロッパにジャポニズム運動がおこり、日本の浮世絵は、マネ、モネ等の印象派画家やゴッホに影響を与えた。1900年のパリの万国博

では、日本人の川上貞奴が「芸者と武士」という芝居を演じ、日本の着物が「ヤッコ・ドレス」として大流行した。

日本人の間にパリを愛する人が多いのは、若い時にパリで学んだ芸術家が多いことや、フランスと日本との芸術交流の歴史の深さにある。パリは今日、「芸術の都」として、世界中から多くの観光客を集めている。

社交界の華・オペラ

ヨーロッパで生まれた華やかな芸術にオペラがある。オペラは、まさに総合芸術である。まず作曲家が脚本を基に作曲、オペラ歌手が歌って演技、オーケストラが指揮者の指揮のもとに演奏、舞台装置を作る美術、全体を構成する演出といった風に、様々な専門ジャンルを総合化した芸術である。

このオペラが最初に誕生したのは、イタリア・ルネサンス後期の1596年、フィレンツェのバルディ公爵が、ギリシャ悲劇の再現を夢見て、歌うようなせりふを用いて劇を演じた時であると言われている。

女性が教会の中で歌うことは禁じられていたから、高音のパートをボーイソプラノが担当していたが、やがてファルセット歌手といって、成人男性が裏声を使って高音を歌うようになる。更には、去勢^{きよせい}して変声期前の美声を保つカストラートに取って代わられる。外科手術の技術向上が背景にあったが、カストラートになれば、教会の合唱団員として生活が保障されたことが大きかった。中国の宦官^{かんがん}と同じで自己顕示欲の強い人間をつくり出し、非人間であることには変わりなかったため、ナポレオンが北イタリアを征服したとき、禁じられてしまった。以後は、カストラートの開発した技術を女性歌手が学び始め、今日のノーマルな姿になった。

18世紀前半のオペラは、カストラートをはじめとした人気歌手が、美声と技巧を強調するものが多かったが、18世紀後半になると、作品を中心とし、

作品にあわせて歌手が歌い演技するという風になり、モーツァルトが「フィガロの結婚」「魔笛」など本格的なオペラを作曲するようになって以降、今日も上演されているようなオペラがイタリアだけでなく、ドイツ、フランスなどで沢山作られるようになり、オペラを上演する専門の歌劇場が作られ、社交界を彩る総合芸術として発展していく。

私が初めてオペラを見たのは「カルメン」であった。世の中にこのように楽しく、奥の深い芸術があったのかと驚嘆し、以来、35年間オペラを鑑賞してきた。

特に、ビゼー作曲の「カルメン」は、自由奔放なカルメン、実直な軍人ドン・ホセ、人気者の闘牛士エスカミーリョ、田舎出身の清楚な女性ミカエラの絶妙な組み合わせが好きで、今でもよく見ているオペラである。

オペラはギリシャ悲劇の再演を願ってスタートしたことから、悲劇が多く、主役が最後に劇的な形で死ぬストーリーになっているものがほとんどである。最後のシーンが、どれだけ観客の心を打つかが極めて重要となる。

私の好きなオペラをもう一つ紹介しよう。それは文豪ゲーテの戯曲『若きウェルテルの悩み』を原作とし、フランス人マスネが作曲した『ウェルテル』である。私は大学生の頃、ドイツ文学に傾倒しており、そこから大きな影響を受けてきた。『ウェルテル』というオペラは、ドイツ文学の世界とオペラの世界が見事につながった作品である。

内容をごく簡単に要約すると、1780年代、フランクフルト近郊の街で、法務官の娘のシャルロットはアルベールと婚約する。シャルロットのいとこのウェルテルは、かねてから恋心を抱いていた。舞踏会のあとに思い切って打ち明けると、「亡くなった母が決めた婚約者がいます。」と告げられる。アルベールとシャルロットが結婚して3ヶ月が過ぎようとした頃、シャルロットへの思いが深まっていくのを止めることのできないウェルテルは、今も変わらぬ愛情を打ち明ける。本当はウェルテルを愛しているシャルロットは、一度は殺

然と断ったものの、最後には、クリスマスに来てくれるように言って去っていく。

クリスマス・イヴの夜、ウェルテルの存在の大きさに気づいたシャルロットは、ウェルテルから最近届いた手紙に、自殺がほのめかされていることに気づき絶望する。ウェルテルがシャルロットを訪ねると、昔ウェルテルが愛読していた詩集を渡し「もう二度とお目にかかることはないと思いますわ」とつぶやく。この言葉にウェルテルは自殺を決意。クリスマスの夜、シャルロットがウェルテルの家に駆けつけてみると、彼はすでにピストル自殺を図り、瀕死^{ひんし}で倒れていた。シャルロットは助けを呼びに行こうとするが、彼に止められる。ウェルテルはシャルロットの腕の中で、彼女の初めての愛の言葉を聞きながら、幸せそうに死んでゆく。

今日、オペラは世界中で上演され、多くの人の心を捉えており、最近では、特色のある演出が話題となっている。日本においても、経済的豊かさを背景に、ヨーロッパやロシアの有名なオペラ劇団の日本公演が目白押しとなっているが、日本独自のオペラの創作・上演は、未だ十分とは言えない状況にある。オペラを創作・上演するためには大きな財源を必要とするためであり、日本におけるオペラの発展のためには、今までに日本で創作された優れたオペラの再演率を高めていくことも必要ではないかと思う。今後日本において、日本人の感性を取り入れた、質の高いオペラが創作・上演されていくことを願うばかりである。

第5章 産業革命と帝国主義

イギリスの産業革命

人間の歴史において、物の生産上の革命が最初に起きたのは、今から1万年前にメソポタミア地方で始まった農業革命であった。以来、農業生産を中心として生産活動が営まれてきたが、18世紀に入り、物を作る工業の世界に変化が始まる。

第3章「近代ヨーロッパの幕開け」で見たように、16世紀以降、世界を神との関係で見るとはならず、物質を数量的に捉え、実験によって自然界の法則を発見していくという実証精神の高まりによって、近代科学が発展し始める。

一般的に科学技術と表現されるが、文明と文化と同様、科学と技術を明確に分けることは出来ないが、一応、科学は普遍妥当な原理や法則の発見を指し、技術は、科学知識を生産・加工に応用する方法や手段という意味で使うこととする。

科学が発展し始めると、タイムラグを置いて、その応用としての技術が進展し、物の生産様式に大きな変化をもたらすこととなり、産業革命と呼ばれることとなった。

すなわち、ここで産業革命とは、科学技術の発展により、様々な機械が発明・改良され、物の生産が手工業・家内工業から、機械を使用した工場内における大量生産へと変わり、経済・社会組織上の大変革をもたらしたことをいう。

その変化が最初に起きたのがイギリスであり、1760年代に始まり、1830年代まで続き、やがてフランス、ドイツ、ロシア、アメリカ、日本へと伝播していく。

すでにイギリスは世界の海を支配し、海外に広大な植民地を持っていた。な

かでも、インドにおいては、1600年に東インド会社を設立し、早くから植民地経営を行っていた。そのインドから安い綿織物が輸入され、イギリス人の間に広まっていたが、国内産業を保護するという観点から、インドの綿織物の輸入を禁止するという措置がとられた。これがイギリスにおける綿織物の発展をもたらすことになる。

紡織機の改良が行われていく中で、1769年、アークライトが水力紡績機を開発し、工場で数百人の労働者を使い、機械による綿織物の大量生産を行うようになり、本格的な工場制機械工業の始まりとなった。

1785年に、アメリカのカートライトが蒸気機関を動力とした力織機を発明すると、生産効率は更に向上した。同じ年、ワットが蒸気機関の改良に成功して以降、様々な機械に蒸気機関が応用されるようになる。これにより、工場は都市近郊に建設することが可能となり、動力革命が進展していく。

1807年、フルトンが蒸気船を発明。すでに発明されていた蒸気機関車が、スチーブンソンによって改良されると、陸上においてもしだいに交通革命が起き、1850年までに6000マイルの鉄道が整備された。

産業革命が進むにつれて、工業機械や鉄道のために鉄が必要になっていくが、すでに製鉄において、木材を伐採して作る木炭を使用した方法に代えて、コークス製鉄法が開発されていたことが、産業革命の推進に大きく貢献した。これは同時に、森林の大量伐採を止めさせ、環境問題にも好影響をもたらすことになる。

産業革命により、多くの工場は、物資や労働力を求めて都市近郊に建てられたから、工場立地に適した都市には、集積の利益を求めてますます多数の工場が集まり、人口は瞬く間に膨れ上がり、工業都市が出現した。

これらの工業都市においては、労働問題と都市問題が発生し、大きな社会問題となっていった。労働問題としては、手工業で必要としていた熟練労働を要しないことから、婦人や児童の労働を一般化し、人権問題を引き起こした。一

方、熟練職人から職を奪い、失業に追い込んだ。また、低賃金と長時間・深夜労働が労働者の平均寿命を低いものにした。

都市問題としては、環境汚染による衛生問題が発生した。工業都市では、工場の動力として大量の石炭を炊いたから、スモッグが空を覆いつくし、住民の肺を侵して健康を蝕んだ。工場排水が川に流れ込み、水質汚染をもたらした。ロンドンのテムズ川も、今からは想像もつかない位に汚れていたという。川の汚染や不潔な地域では伝染病が発生した。

労働者の急激な増加は、深刻な住宅不足を引き起こした。労働者は、都市の一定地区に過密状態で住み、狭くて上下水道もない不衛生な住宅に住むことを余儀なくされた。

こうした状況に対し、すでに18世紀末から、福祉収容施設、賃金補助、雇用・失業対策がとられたが、不十分であったため、1830年冬には、民衆の生活悪化に対する暴力的抗議が盛んとなった。政府は調査委員会を任命し、2年間の膨大な調査と検討を経て、1834年に勧告が出され、ただちに「新救貧法」と呼ばれる法律が制定された。その内容は、今日から見ると、貧困は社会の仕組みに原因があるのではなく、個人に責任があるとしているなどの点で限界を持ったものではあったが、産業革命によって生じた社会問題に対して一定の役割を果たした。

更に、ロバート・オーエンなどの運動で、一般の児童労働に対する規制が法制化される。1833年には工場法が制定され、工場監督制度、労働時間の制限、労働者を一定時間教育することを雇用主へ義務づけることなどが規定された。

伝染病患者を福祉施設に収容することによって、かえって病気を蔓延させ、貧民をつくり出すこととなった。そこでチャドウィックは調査を行い、「労働階級の衛生状態に関する報告」としてまとめた。それは1848年に「公衆衛生法」として実を結ぶこととなった。同法により、上水道、清掃、下水道、墓地管理、道路舗装などを行なう地方保健局が設置され、中央政府には、監督と管

理の権限を持つ保健総局が設置されるようになった。

また、産業革命によってもたらされた資本主義の発達により、都市で成長していった商工業資本家たちは、寄付金により慈善事業を行なう組織をつくった。相互扶助の取り組みも進み、生活協同組合や労働組合（当初は、熟練労働者の職種別組織で、共済活動を重視した。）が組織された。

イギリスの産業革命は最も早く起きたため、人間の歴史にとって未知の多くの問題を発生させ、そのうち労働問題、都市問題はしだいに対策がとられていくが、階級対立と帝国主義による世界分割という大問題を発生させていく。

階級対立の中で登場したのがマルクスとエンゲルスである。二人合わせてマルクス主義と呼ぶ。このマルクス主義は、膨大な歴史哲学・経済学・革命論であり、この内容を紹介することは私には全く不可能なことであると自覚しつつ、その影響が人間の歴史にとってあまりに大きいところから、私なりに、マルクス主義者の批判を恐れずに、次のように大胆に要約することとする。

人間は階級闘争の歴史を繰り返してきた。物質の原理が歴史を貫いているのであるから、社会は、物質の生産力を高める生産関係を持った社会へと必然的に進化していく。資本主義社会では、労働者は生産手段を所有する資本家によって搾取さくしゆされており、労働者は労働に喜びを感じることができず、労働の疎外が生じている。労働者は自らを解放するために団結して、生産手段を国家の所有とし、プロレタリアート独裁の政治体制を打ち立てなければならない。労働者が資本家によって搾取されている資本主義の社会よりも、労働者が支配する社会主義の社会、それを更に推し進めた共産主義社会の方が、物質の生産力は高くなるから、そうした方向に社会が進んでいくことは歴史の必然である。

このマルクス主義は、ロシアや中国などにおいて革命をもたらし、その周辺の国家にも波及して、世界の大きな勢力となったが、今日の状況は、ベルリンの壁崩壊後の世界の歴史が示している通りである。

帝国主義による世界分割

産業革命の進んだ国においては、資本主義の経済システムによる経済発展が進むが、19世紀末の1873年から23年間、ヨーロッパは大不況に襲われる。そこで産業革命で先行したイギリスはその優位性を背景に、次々に植民地獲得に乗り出し、20世紀初めまでに、世界中で55の植民地を獲得するに至る。続いてフランスが乗り出し、遅れてドイツ、ロシア、アメリカ、日本が後を追う形で海外に進出し、植民地獲得競争が展開された。

これを帝国主義と呼ぶ。この言葉は、ローマ皇帝の支配する皇帝国家（インペリウム）に由来する。植民地がなぜ経済発展と関連したかという点、植民地は工業生産に必要な安価な原材料の供給地であるとともに、生産された工業製品の販売先となったからである。また、天然資源も魅力であり、余った資本の投資先としても有効であった。

植民地にされる側は当然抵抗するから、軍事力が重要になるが、産業革命を経た国の工業生産能力は急速に進歩しているため、軍艦など武器のレベルに圧倒的な差が生じていた。

かくして、第1次世界大戦までに世界の84%が欧米列強の植民地となってしまうことになる。その様子を具体的に見ていくこととする。

弱肉強食の海外侵略がアジアで最初に展開されるのが、1840年のアヘン戦争である。その頃イギリスは、中国の清の広東を中心に盛んに貿易を行い、特に大量の紅茶を輸入していた。広東では公行（コーホン）という特権的仲買商人が貿易を独占しており、その公行に沢山の銀を払っていた。そこで、すでに1600年の東インド会社設立以来植民地として支配していたインドでケシの花を栽培し、その乳液から精製したアヘンを清に密輸入することを思いついた。ほとんど無料で清の紅茶をイギリスにもたらすという、全くあくどい商法を実行したのである。ちなみに以前は中国の緑茶をイギリスは輸入していたのであ

るが、船で運ぶ途中、赤道あたりで発酵してしまい、それを飲んでみたら意外とおいしかったので、紅茶として楽しむようになったという経緯がある。

官僚も賄賂をとって密輸を黙認したから、アヘンの吸引者が急増し、社会問題となる。清の皇帝は、林則徐を担当大臣に選ぶ。彼は使命感に燃えて広東に行き、港に停泊していた船に隠してあったアヘンを没収して処分してしまう。イギリス政府はただちに大艦隊を派遣。狼狽した清政府は、林則徐を新疆に流刑するが、イギリスは更に艦隊を南京に進めて圧力をかけ、「南京条約」で終結をみる。

南京条約は圧倒的な軍事力を背景に結ばれたとはいえ、中国にとって極めて屈辱的なもので、香港の割譲、五港の開港、公行の廃止、戦費の補償を無条件で認めることを余儀なくされた。更に、関税自主権の喪失、領事裁判権、最恵国待遇を認めさせられ、これが後に日本との条約締結の際の先例となってしまう、長い間日本を悩ますことになる。

アヘン戦争以来、アジアは欧米列強からねらわれ続け、20世紀初めにはアジアで欧米列強の支配から免れているのは日本、朝鮮、タイだけという状況になってしまう。そのうち朝鮮はロシアと日本に挟まれ、つらい歴史を歩むことになる。

次に列強のアフリカ分割について見ていくこととしよう。アフリカは天然資源の宝庫であるにもかかわらず、政治的にも、経済的にも遅れていたから、列強による植民地支配の格好のターゲットとなった。

1883年にベルギー国王が「コンゴ領有」を宣言すると、ヨーロッパ各国はこれに異議を唱え、なんとアフリカ分割のための国際会議が開催され、土地資源を発見した国の「占有権」を認めることが決まる。この時、コンゴはベルギー王の私領としてのコンゴ自由国として承認される。この相互承認の方法はアジアにおいても同様であった。あなたの国がAという国を植民地にすることは認めてやるから、Bという国については、私の国に認めてほしいという外交

交渉である。

この国際会議の後、イギリス、フランスを中心にヨーロッパ各国によるアフリカ分割が始まり、20世紀初めには独立国はエチオピアとリビアのみという状態になってしまった。

アフリカに住んでいる人のことをまったく無視した、列強による植民地支配により、多くのアフリカの国は今日なお貧困に苦しむ状態から抜け出すことが出来ずにいる。

もともと、ヨーロッパ列強は16世紀から19世紀半ばまでに、アフリカの黒人を1,000～2,000万人船で連れ出し、アメリカに奴隷として売っていたという暗い過去をもっている。それがやんだと思ったら、今度は植民地支配である。

弱肉強食は生物界だけではなく、人間世界でも避けられないものであり、生存していくための手段なのであろうか。産業革命によってもたらされた帝国主義は、植民地や権益の確保を巡って列強どうしが争うようになり、民族問題も複雑に絡み合って、二つの世界大戦を引き起こすに至る。

田中 義明

プロフィール

【略 歴】

- 1935年 千葉市に生まれる
- 1958年 一橋大学商学部を卒業
- 1958年 日本精工(株)に入社
- 1959年 公認会計士元吉重成事務所に転職
- 1961年 (株)日本能率協会に転職
(企業に対するコンサルティング、国・自治体のプロジェクトの研究に從事)
- 1970年 (株)フォークアートサロンを設立(代表取締役)
(レストラン、パーティホール、カルチャースクールなど)
- 1975年 (株)水問題研究所を設立(代表取締役)
(建設省、国土庁、環境庁、東京都等からの委託にもとづき利水、治水、親水に関する研究に從事)
- 1984年 (株)デジジョン・システム、P S マネジメントの開発顧問となり、思考技術の開発、教材作成および研究指導にあたる
- 現 在 (株)フォークアートサロン代表取締役

【著 書】

「新企業分析入門」(白桃書房)、「創造力革新の研究〔共著〕」(日本能率協会)、
「技術者教育の研究〔共著〕」(日本能率協会)、「アート・ファンの時代」
(近代文芸社)、「ホワイトカラーのプロジェクト・マネジメント〔共著〕」
(生産性出版)など

【資 格】

- ・ 公認会計士三次試験合格
- ・ 不動産鑑定士二次試験合格

齊藤 剛

プロフィール

【略 歴】

1944年 市原市に生まれる

1968年 東京大学文学部西洋史学科を卒業

1968年 榑学習研究社に入社

1971年 千葉県庁入庁

主として企画部において、地域政策、総合五ヶ年計画、幕張メッセ、かずさアカデミアパーク、交通政策、まちづくりなどを担当

2003年～2007年 千葉県文化振興財団理事長

現 在 城西国際大学講師

【著 書】

『世界の中の日本』(太陽堂)

近く発行予定『大東亜戦争へ至る歴史』(中央公論事業出版)

|||||

尊敬する歴史上の人々

2013年1月発行

〈著者〉

田中 義明

斉藤 剛

〈印刷・製本〉

ワタナベメディアプロダクツ株式会社

|||||

